Special Thanks
この文庫に協力してくれた人たち



石黒　昇（いしぐろ　のぼる）

昭和13年８月24日生まれ。「鉄人28号」以来、数々の作品に参加。「マクロス」ではＣＤ担当。



大野木寛（おおのぎひろし）

昭和34年８月23日生まれ。「マクロス」16話でデビューしたばかりの新進シナリオ・ライター。



河森正治（かわもりしょうじ）

昭和35年２月20日生まれ。本業はメカデザインだが「マクロス」では黒河影次名でコンテも。



富田祐弘（とみたすけひろ）

昭和23年４月14日生まれ。「イデオン」「ダグラム」など多くのアニメの他、実写の脚本も担当。



星山博之（ほしやまひろゆき）

昭和19年５月13日生まれ。「ムーミン」「ザンボット３」「ガンダム」など、多くの作品に参加。



松崎健一（まつざきけんいち）

年齢はヒミツ(富田氏と同じくらい)。大のＳＦずきが高じてアニメの世界へ。シリーズ構成も。



美樹本晴彦（みきもとはるひこ）

昭和34年８月28日生まれ。大野木・河森氏とは高校で同学年。「マクロス」で初のキャラ作監。

AM JuJu

夢みるプレリュード



シナリオ・スタッフ共著

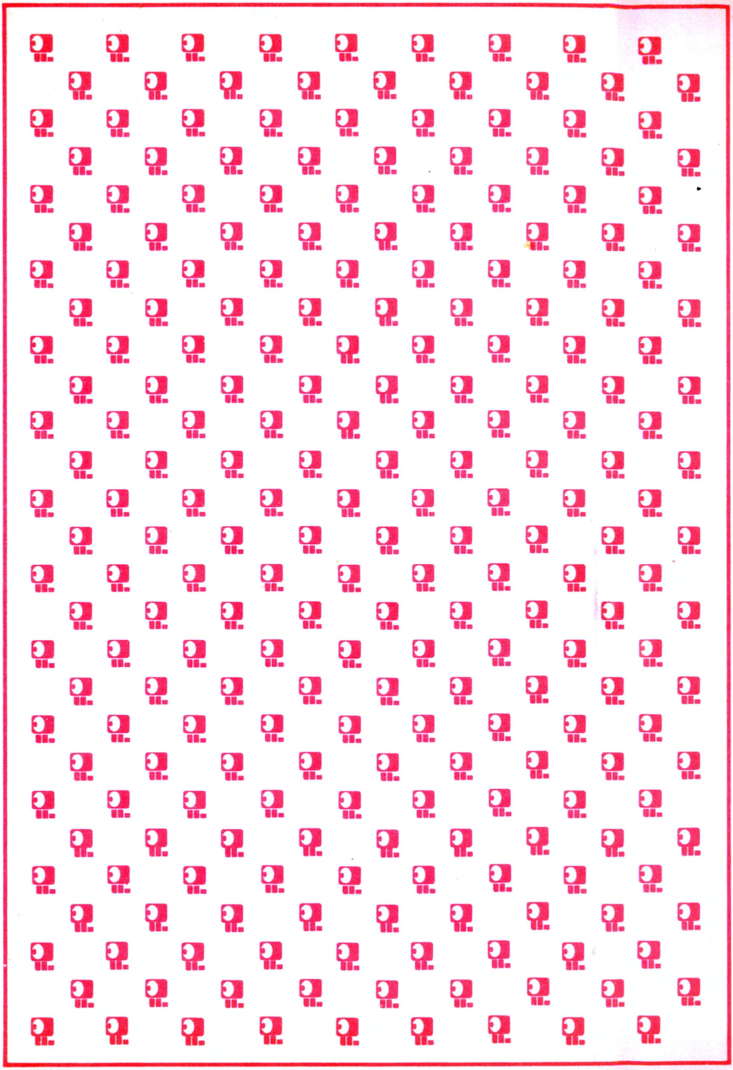
夢みるプレリュード　シナリオ・スタッフ共著

アニメージュ文庫 C-003
定価380円

夢みるプレリュード

シナリオ・スタッフ共著

アニメージュ文庫



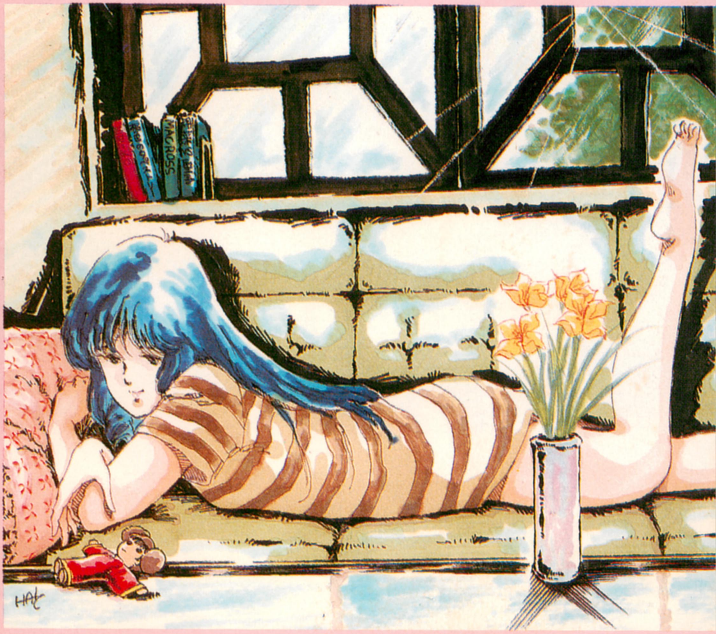
MINMAY'S Diary



原画／美樹本晴彦


3月27日
私の歌……
夢……？　お仕事……？
……よくわからない。
でも、いまは歌っていいたい。
私にできるのは、これしかない。
……そんな気がするから。
イラスト・文／美樹本晴彦

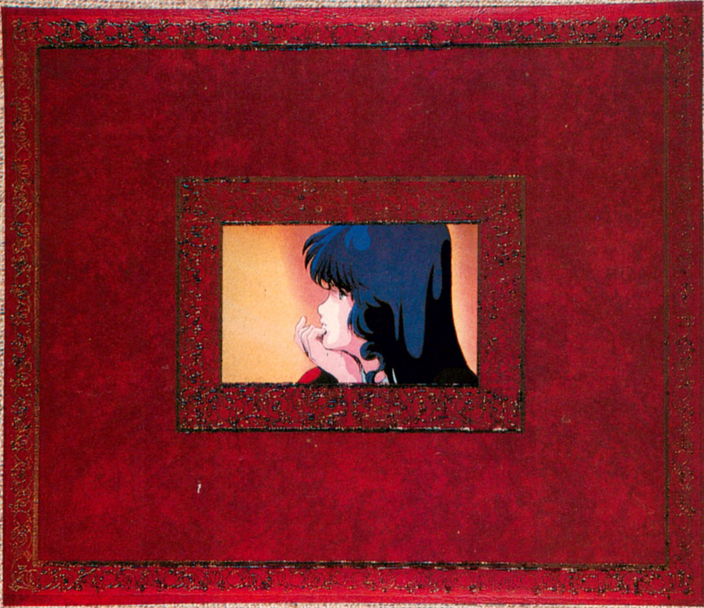
4月5日
アイ・ラヴ・ユー……
ありふれた言葉。
……でも……
ひとりきりじゃ
ちょっぴり寂しい。
仕事も何もかも忘れて
あなたの胸に飛び込みたい。
いま、どこにいるのかな?
未来の恋人さん……。



4月8日
お友だちと買い物……
ホント久しぶり。
アキナもセイコも
相変わらずネ。
私はどうなのかな……？
心配なんです。
気取ってないかなって。
いつもカメラの前で
すましている私……。
ホントの私……、
じゃないんですもの……。

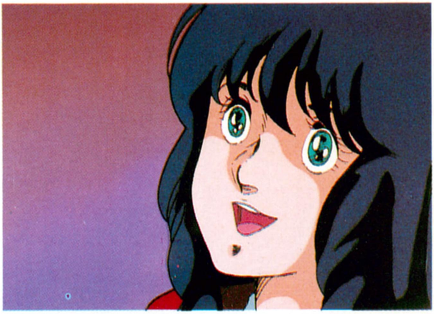


MINMAY'S *Album*

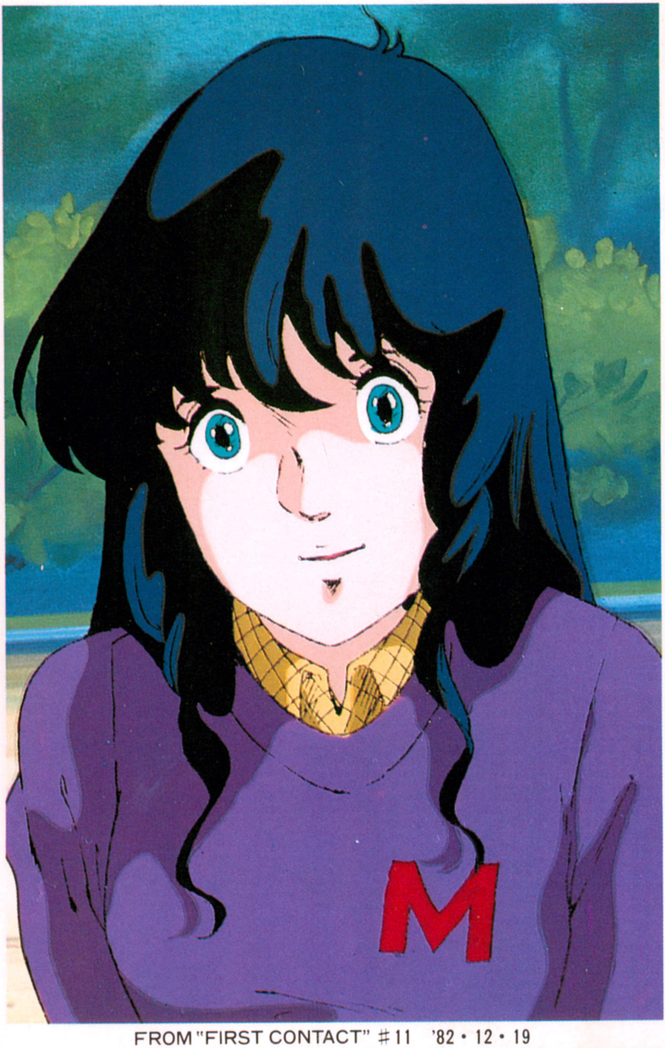




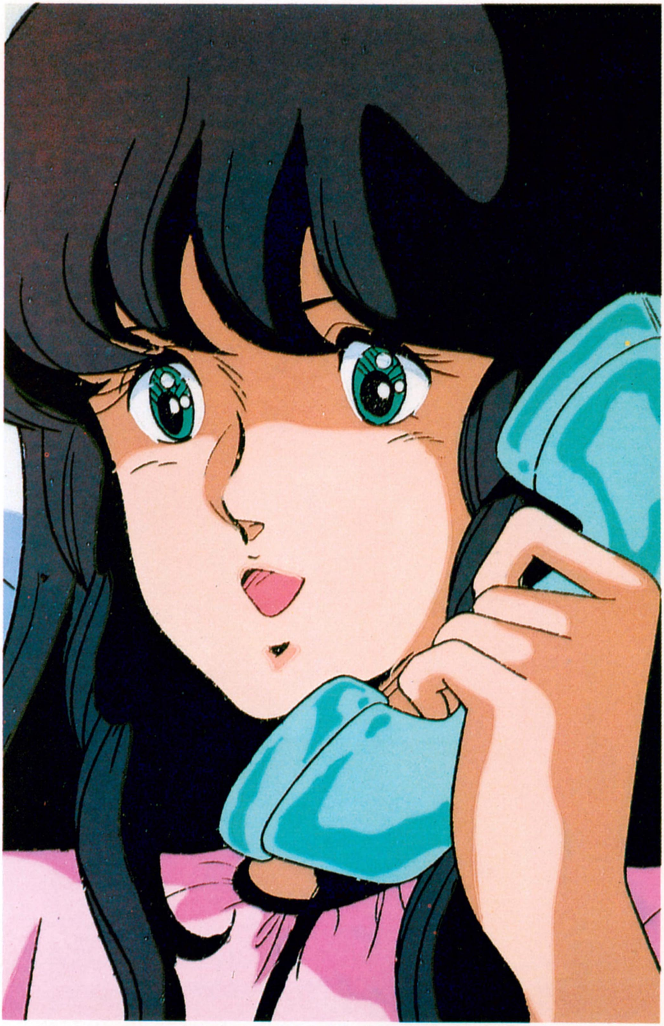
FROM "CHINA TOWN" #15 '83 • 1 • 23



FROM "CHINA TOWN" #15 '83 • 1 • 23



FROM "FIRST CONTACT" #11 '82・12・19



FROM"BURST POINT" ＃19 '83・2・27



FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31

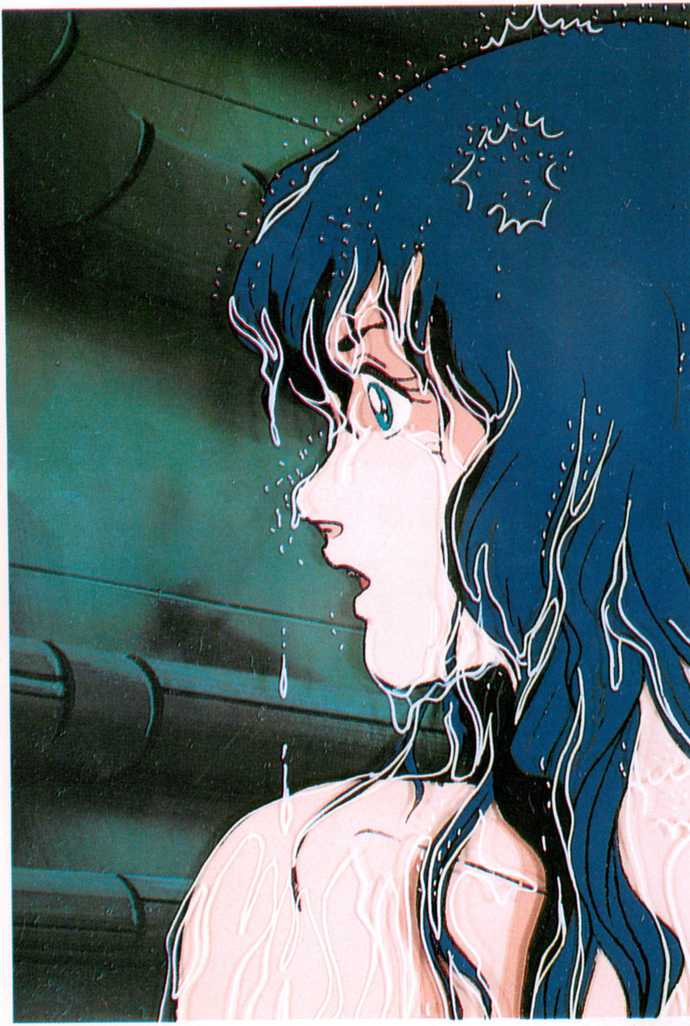


FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31



FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31





FROM "LYNN MINMAY" ＃4 '82・10



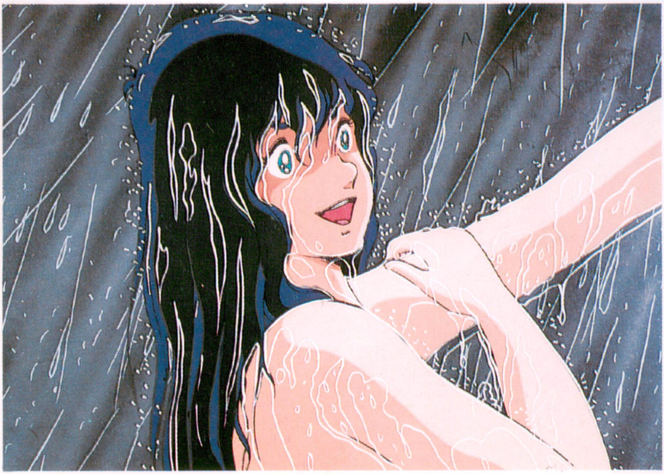
FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31



FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31



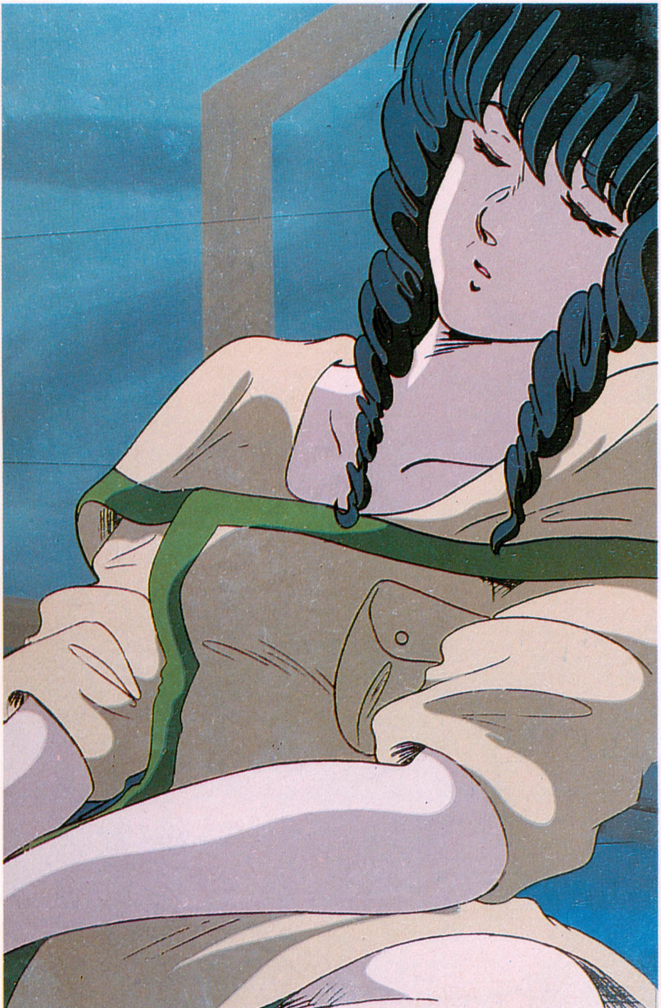
FROM "LYNN MINMAY" ♯4 '82・10・31



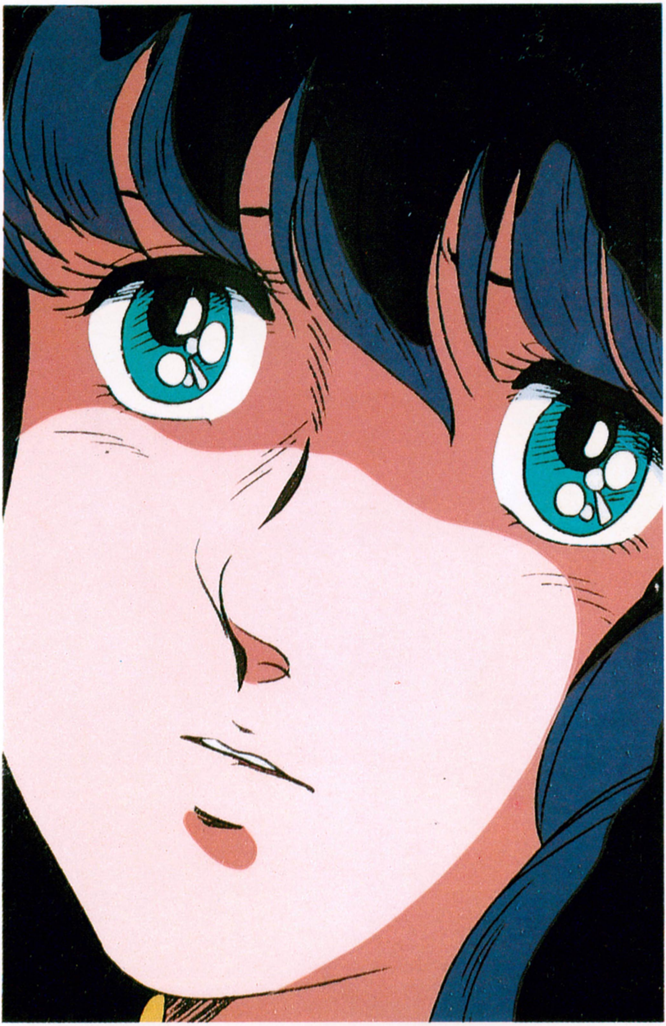
FROM "LYNN MINMAY" ♯4 82・10・31



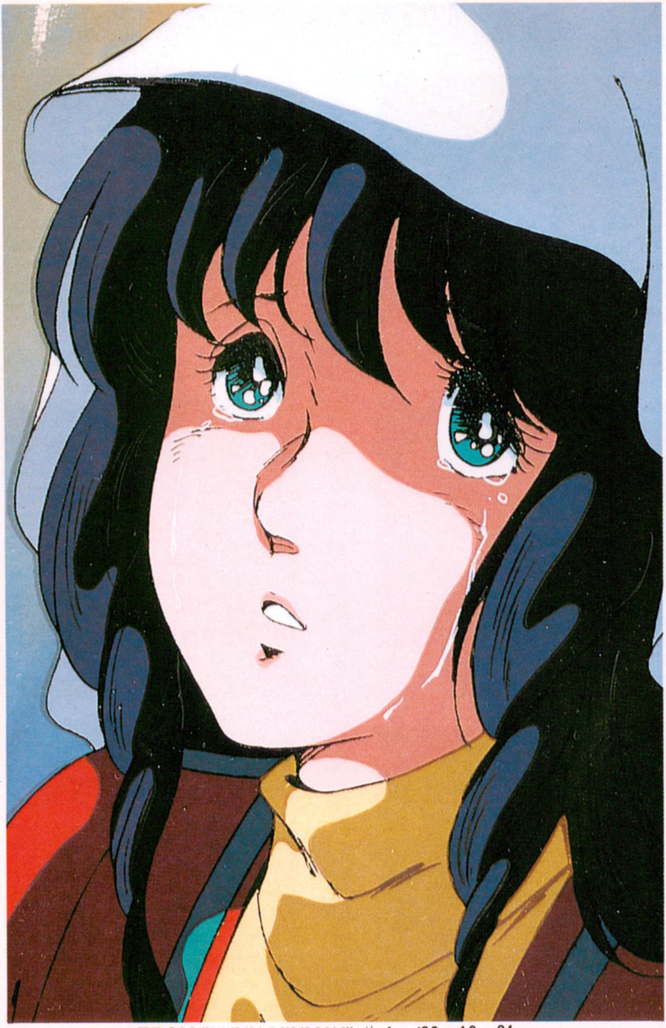
FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23



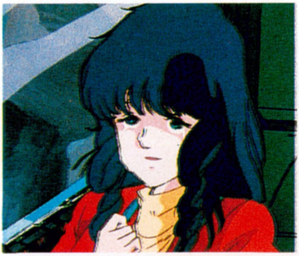
FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31



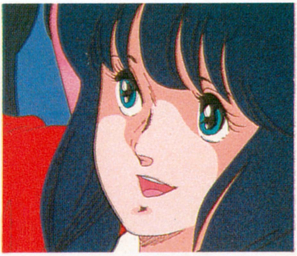
FROM "LYNN MINMAY" ♯ 4 '82 • 10 • 31



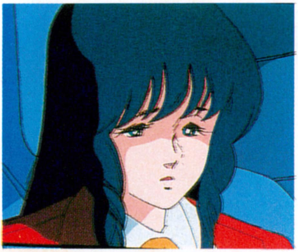
FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31



FROM "COUNT DOWN" # 2 '82 • 10 • 3



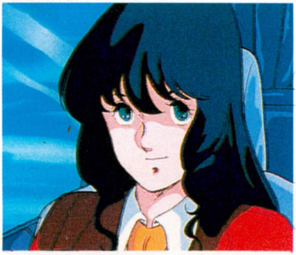
FROM "CHINA TOWN" #15 '83 • 1 • 23



FROM "CHINA TOWN" #15 '83 • 1 • 23



FROM "CHINA TOWN" #15 '83 • 1 • 23



FROM "CHINA TOWN" #15 '83 • 1 • 23



FROM "LYNN MINMAY" # 4 '82 • 10 • 31



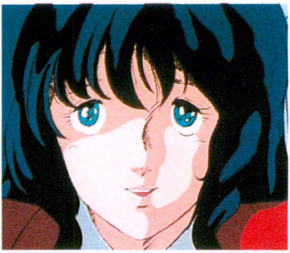
FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23



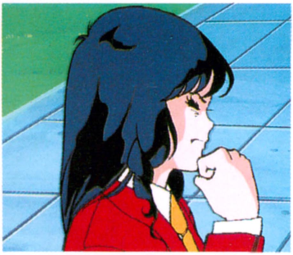
FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23



FROM "LYNN MINMAY" #4 '82・10・31



FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23



FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23



FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23



FROM "COUNT DOWN" # 2 '82・10・3

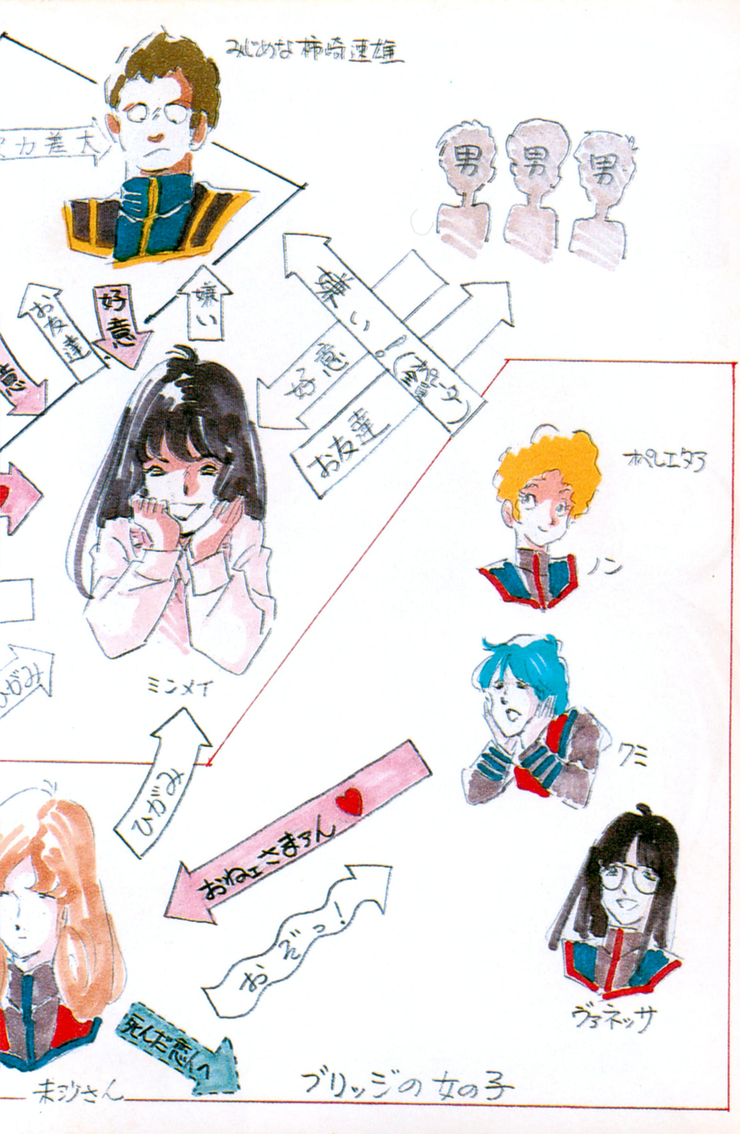


FROM "CHINA TOWN" #15 '83・1・23

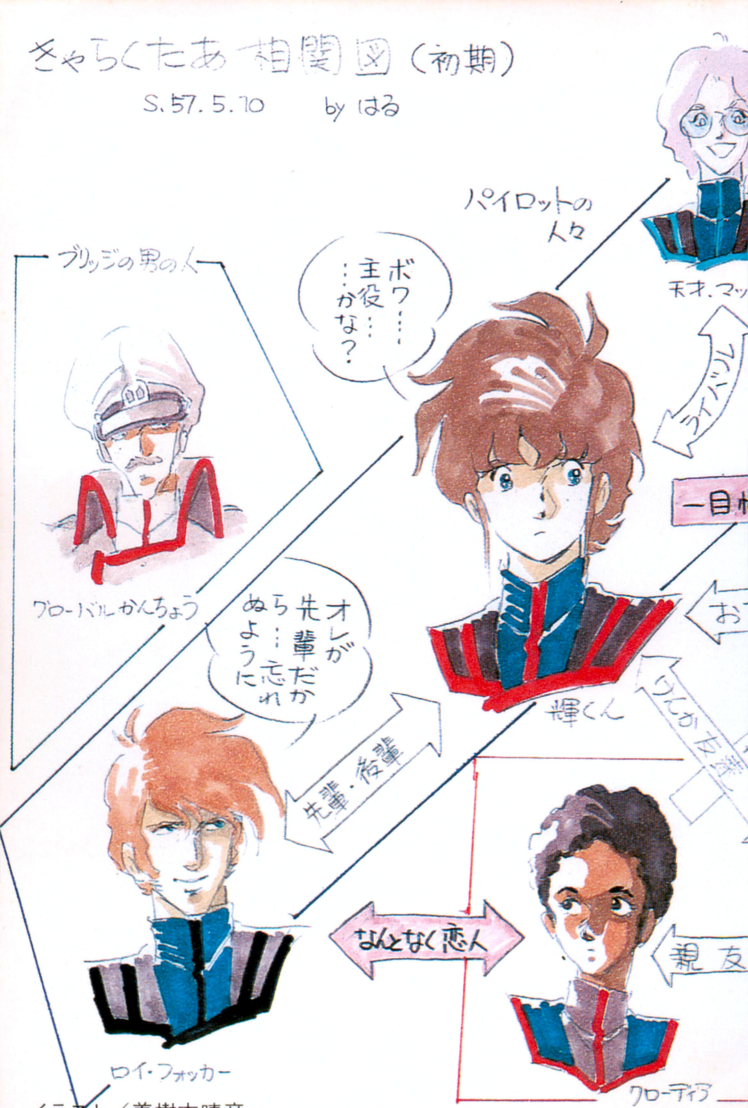
MINMAY'S FRIENDS



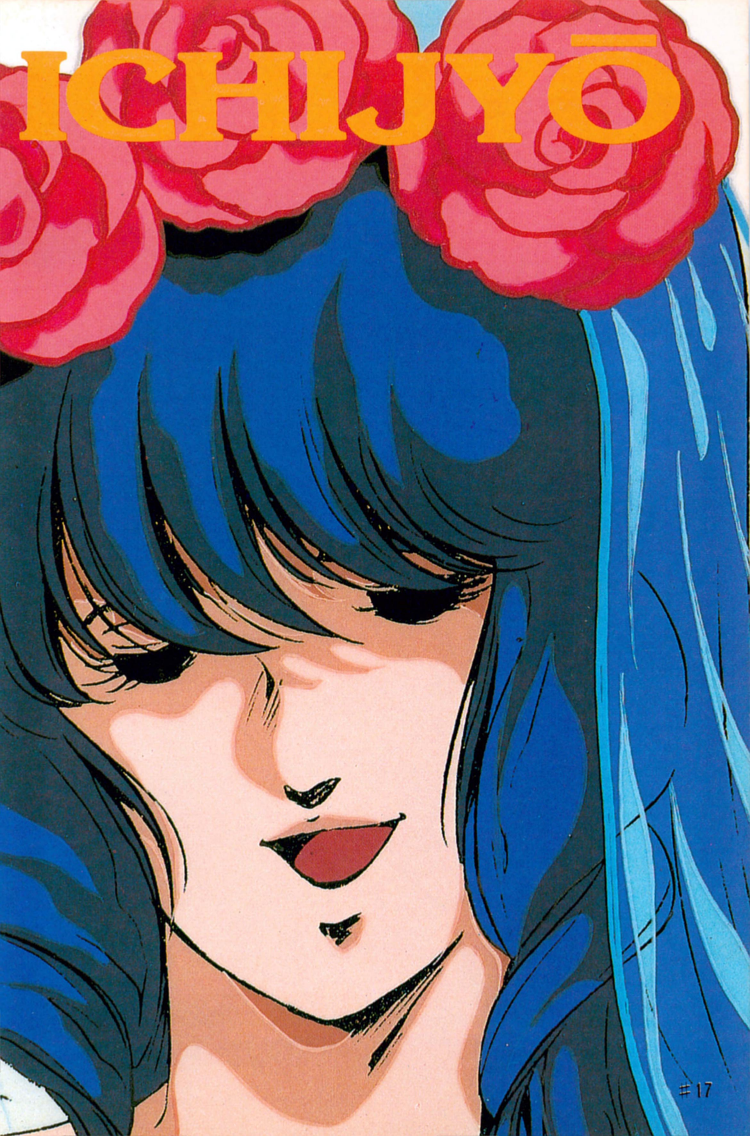
原画／美樹本晴彦

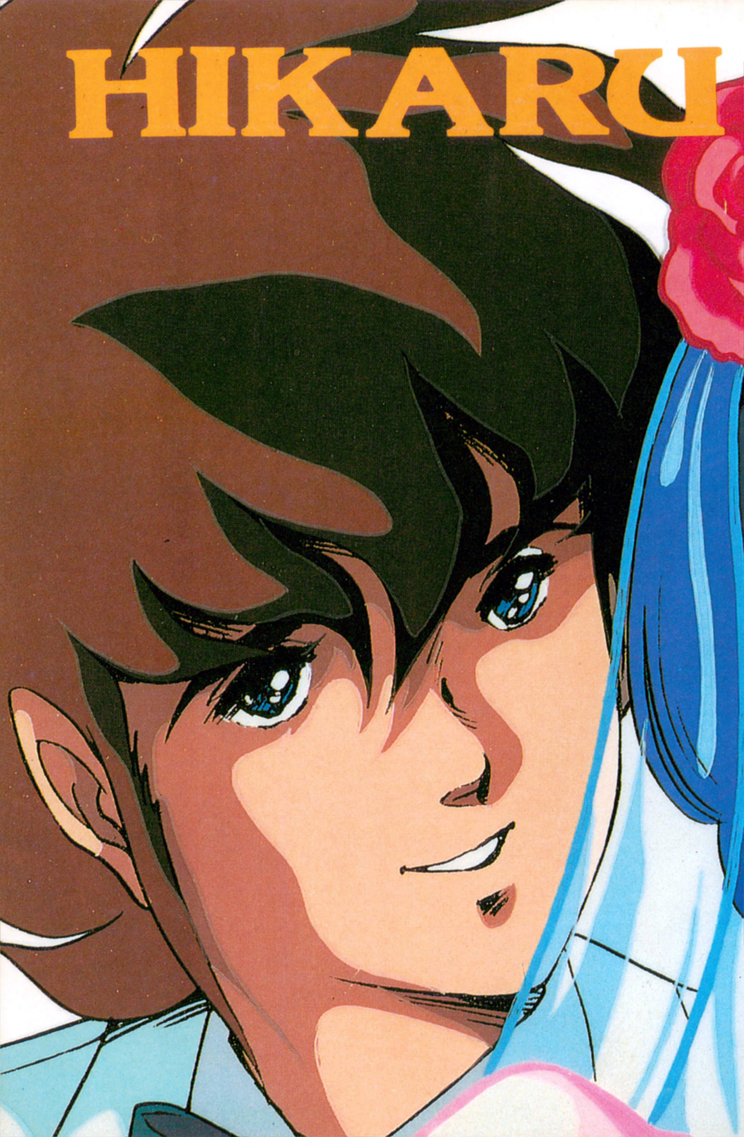


みじめな柿崎速雄
力差大
男
男
男
嫌い
好意
お友達
嫌い!
好意
お友達
ミンメイ
ひがみ
ひがみ
ノン
クミ
おねェさまァん
おぞっ!
ヴァネッサ
死んだ恋人へ
未沙さん
ブリッジの女の子

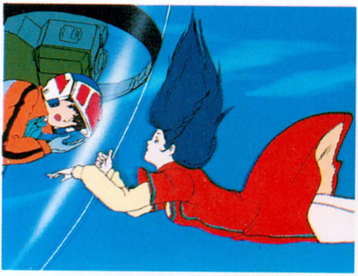

きゃらくたあ相関図（初期）
S.57.5.10 by はる
パイロットの人々
天才、マッ
ブリッジの男の人
ボク…主役…かな？
ライバル
一目
グローバルかんちょう
オレが先輩だから…忘れぬように
輝くん
先輩・後輩
なんとなく恋人
親友
ロイ・フォッカー
クローディア

イラスト／美樹本晴彦

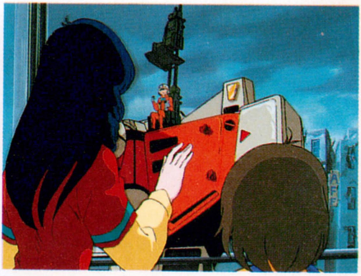

ICHIJYŌ
♯17


HIKARU

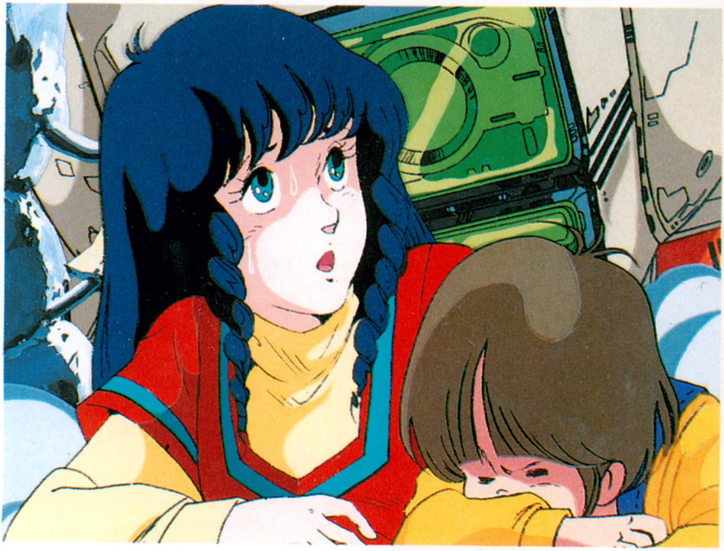
FIRST CONTACT
——出会い——



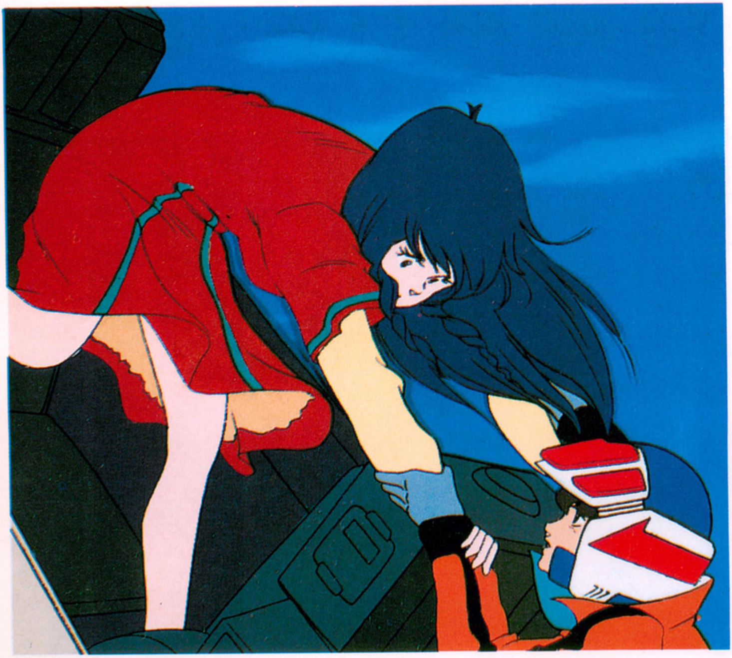
＃２



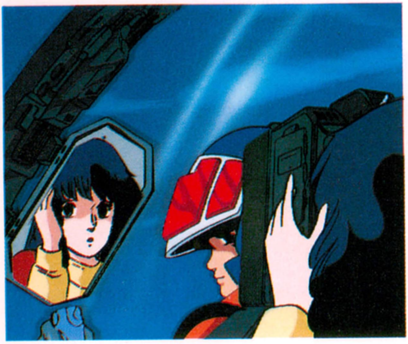
＃２



＃２

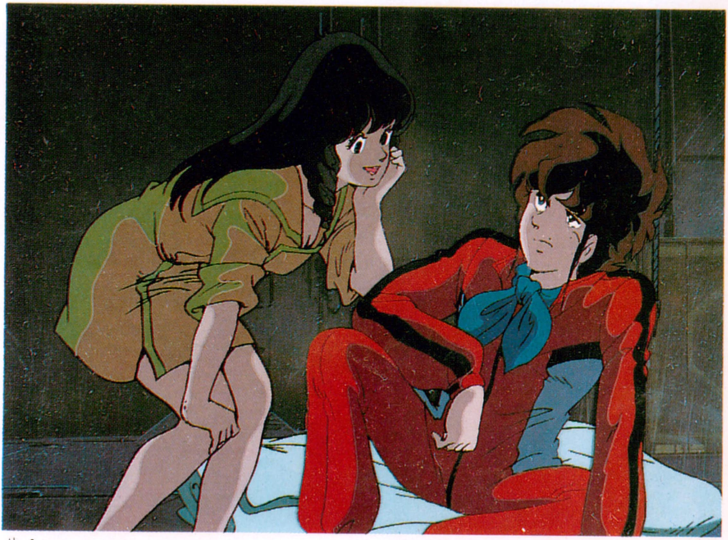


＃ 2

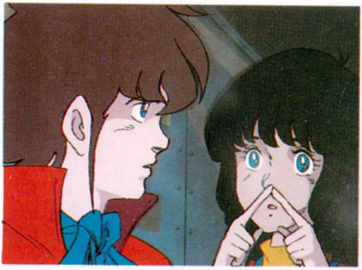


＃ 2

MEETING OF MINDS
——ふれあい——



＃4



＃4



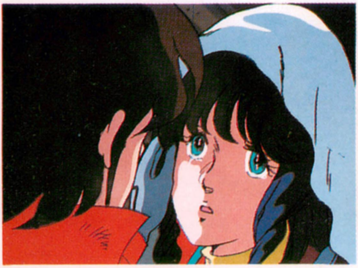
＃3



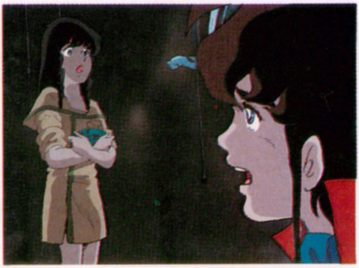
＃ 4



＃ 4



＃ 4



＃ 4



＃ 4

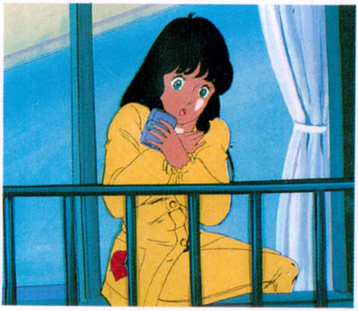


＃ 4

MISUNDER STANDING
——誤解——



＃6



＃8



＃8



＃ 9

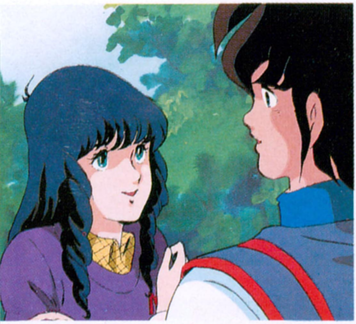


＃ 6

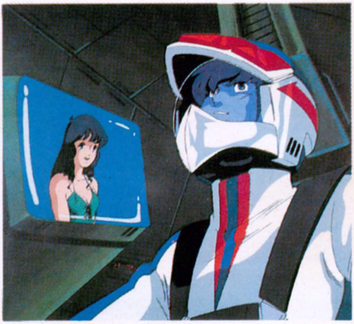


＃ 7

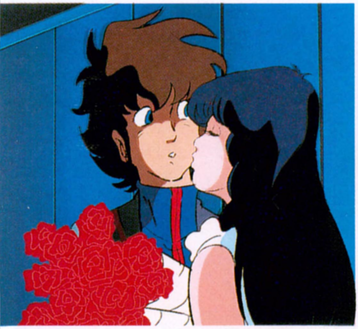
TURNING POINT
——それぞれの道——



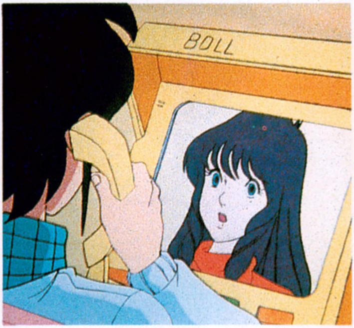
＃11



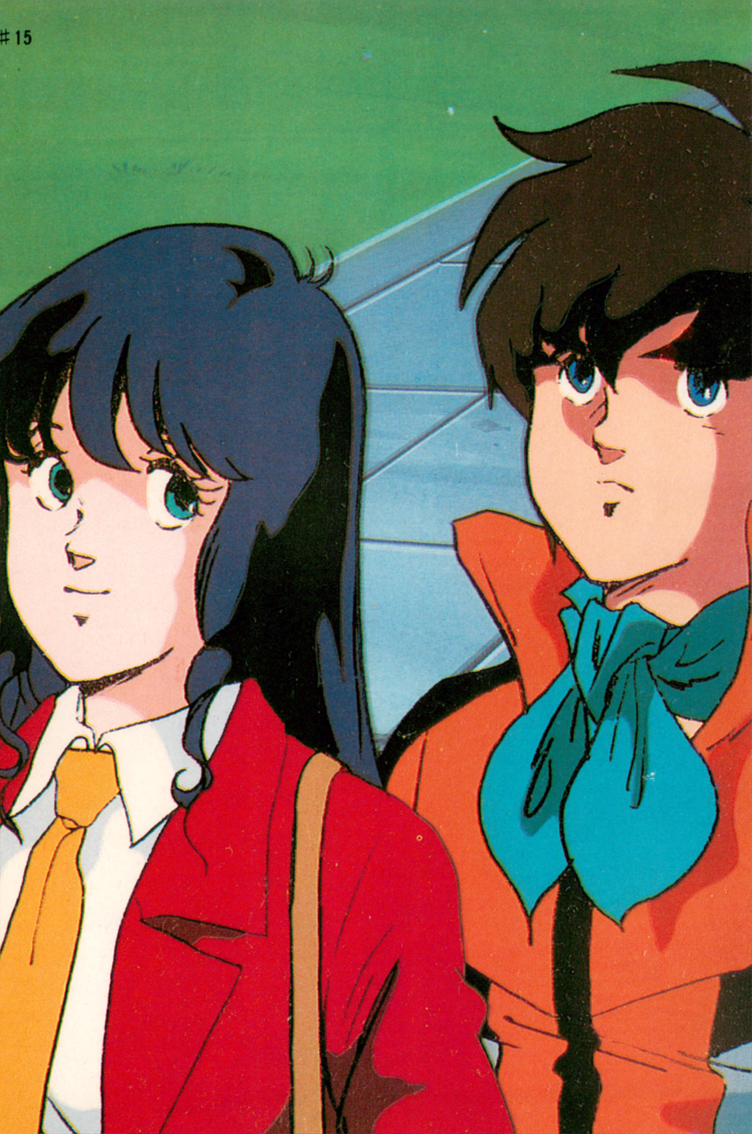
＃ 9

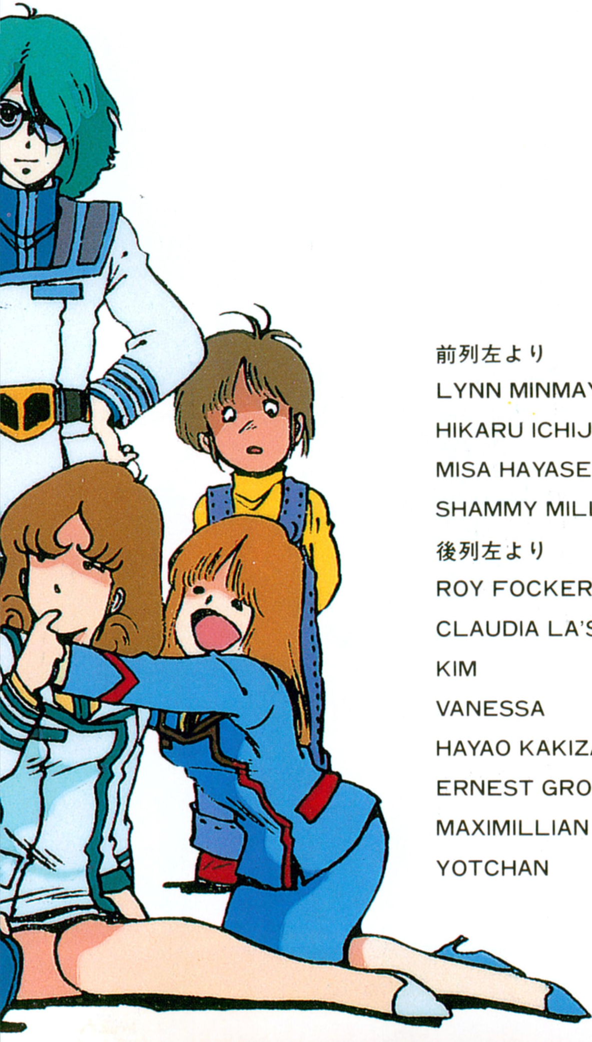


＃13

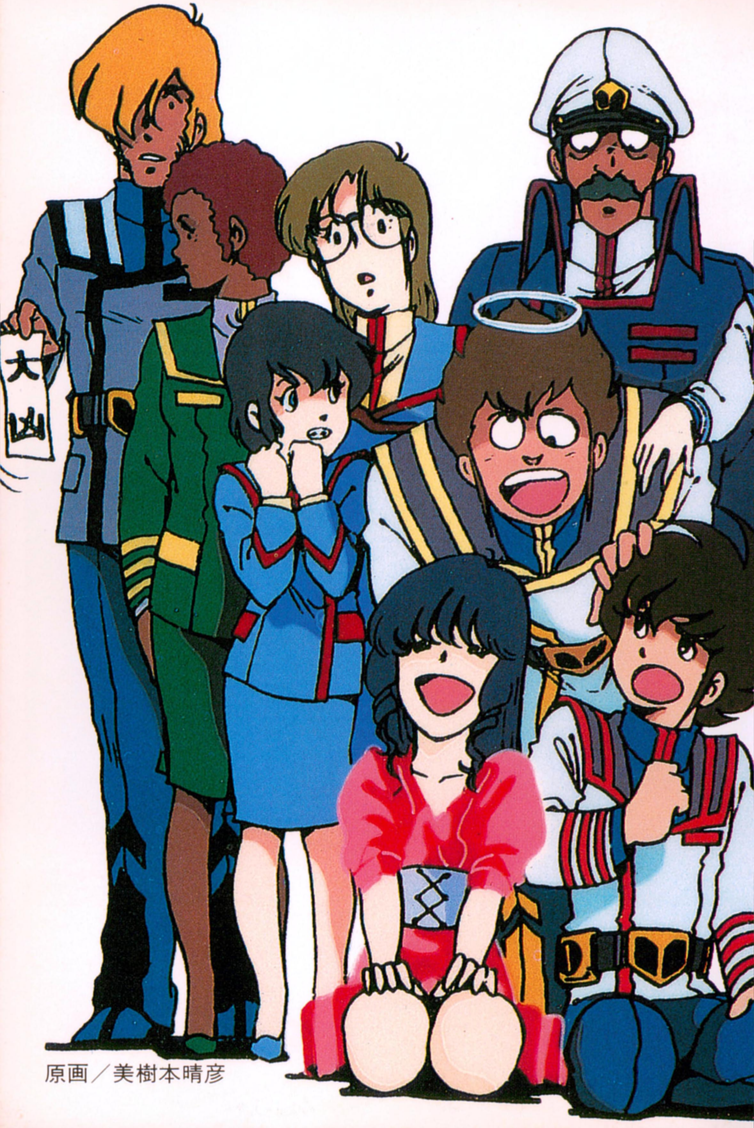


＃10





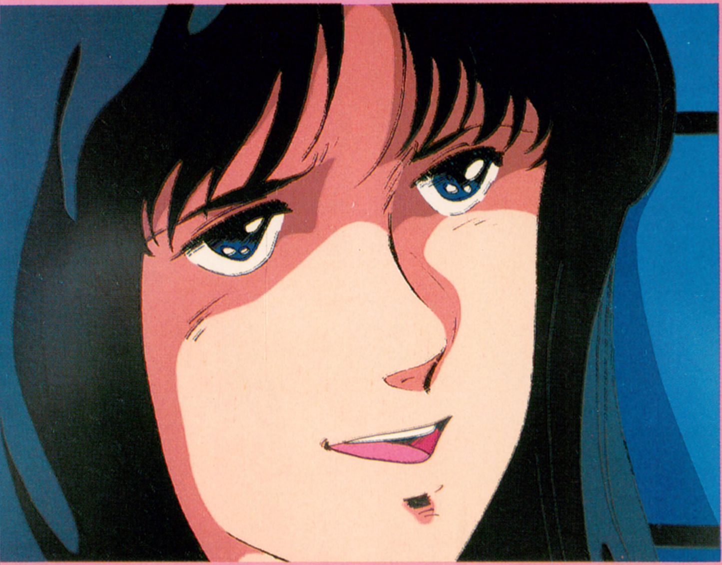
前列左より
LYNN MINMAY
HIKARU ICHIJYŌ
MISA HAYASE
SHAMMY MILLIOME
後列左より
ROY FOCKER
CLAUDIA LA'SUEL
KIM
VANESSA
HAYAO KAKIZAKI
ERNEST GROWBAL
MAXIMILLIAN GENIUS
YOTCHAN



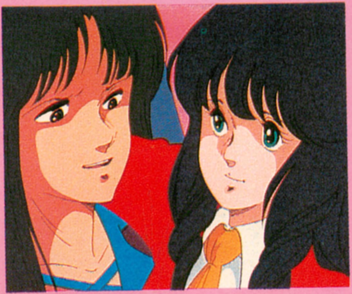
原画／美樹本晴彦

MINMAY'S FAMILY

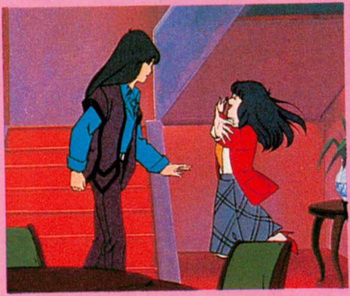
LYNN KAIFUN



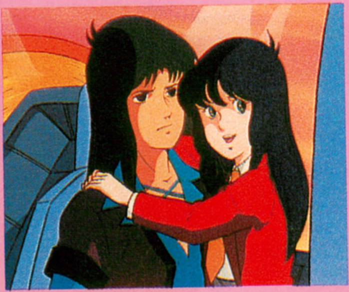
15



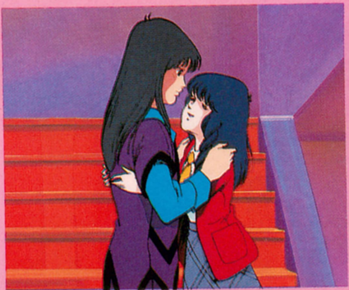
#15



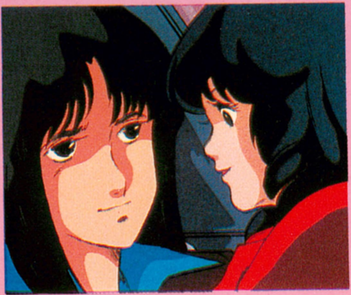
#15



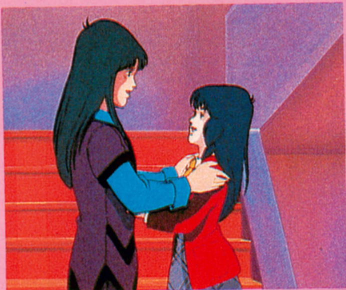
#15



#15

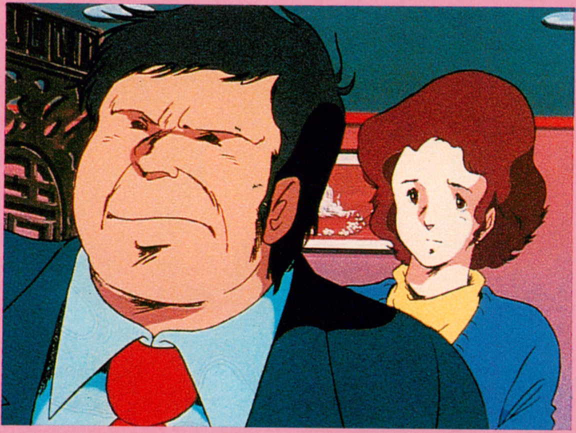


#15



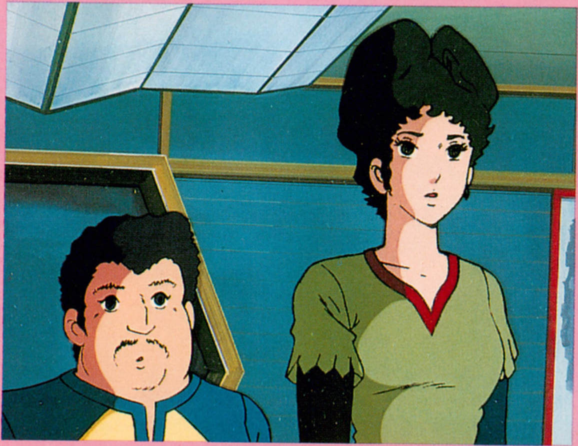
#15

FATHER & MOTHER



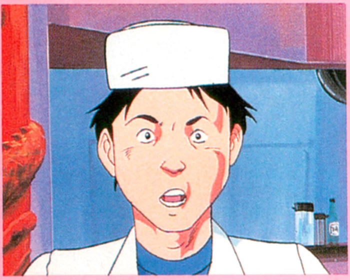
#15

UNCLE & AUNT



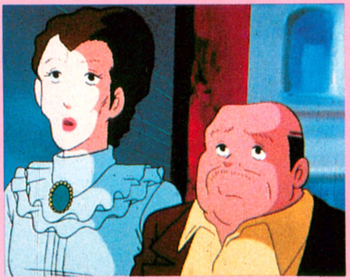
5

PARENTS' EMPLOYER



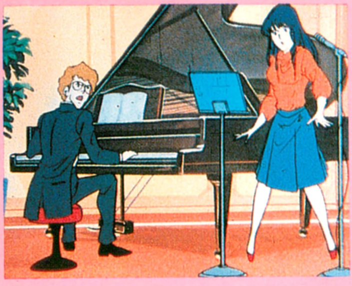
#15

THE CHAIRMAN OF A TOWN ASSEMBLY & HIS WIFE



5

COMPOSER MR.KENT



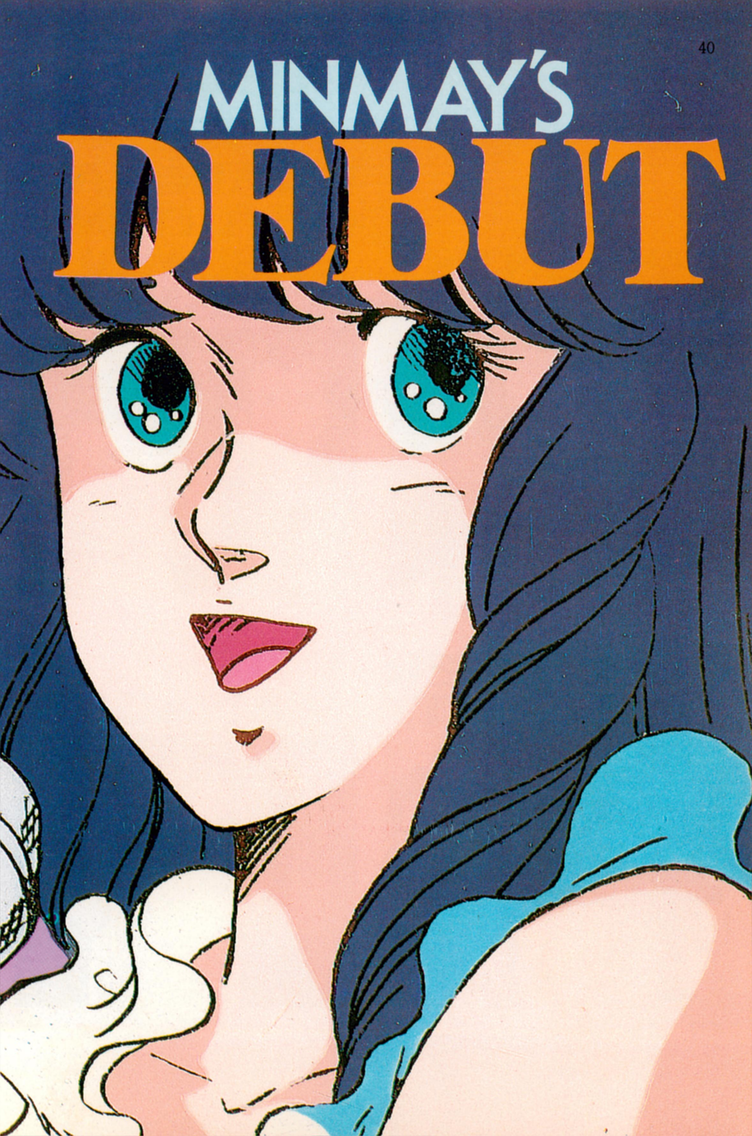
#10

MANAGER



#15

MINMAY'S DEBUT



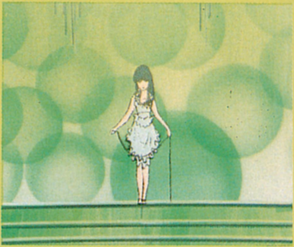
私の彼はパイロット

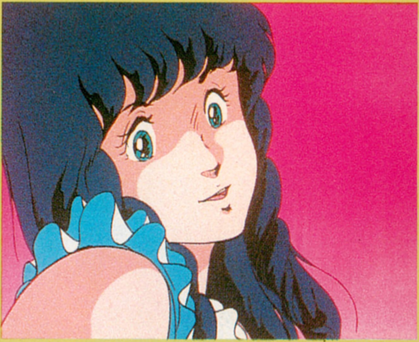
作詞　阿佐 茜　　作曲・編曲　羽田健太郎

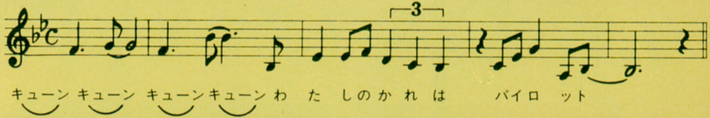
キューンキューン　キューンキューン
私の彼はパイロット
キラリ輝って　急降下
ゴーと噴かして　急上昇
長く尾を引く　飛行機雲で
大きなハートが　重ねて二つ
青い大空　ラブサイン
I love you, You love me ?
だけど彼ったら私より
自分の飛行機にお熱なの
キューンキューン　キューンキューン
私の彼はパイロット

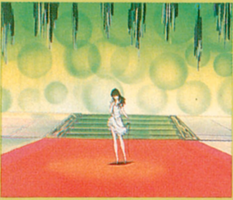


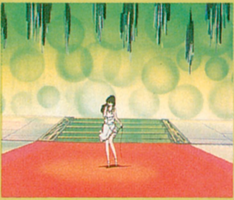
FROM　＃11



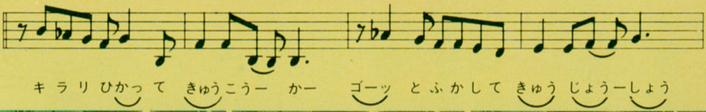



3
キューン キューン キューン キューン わ た しのかれは パイロ ット



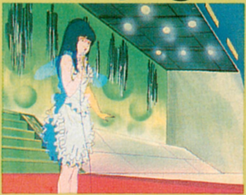


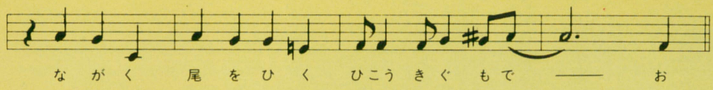



キ ラ リ ひかって きゅうこうー かー ゴーッ と ふ か し て きゅう じょうーしょう
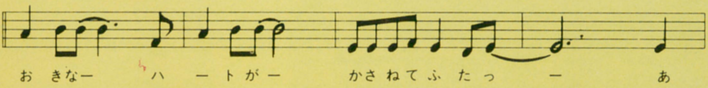




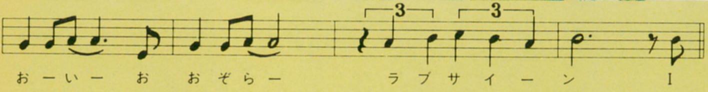



ながく 尾をひく ひこうきぐもで —— お
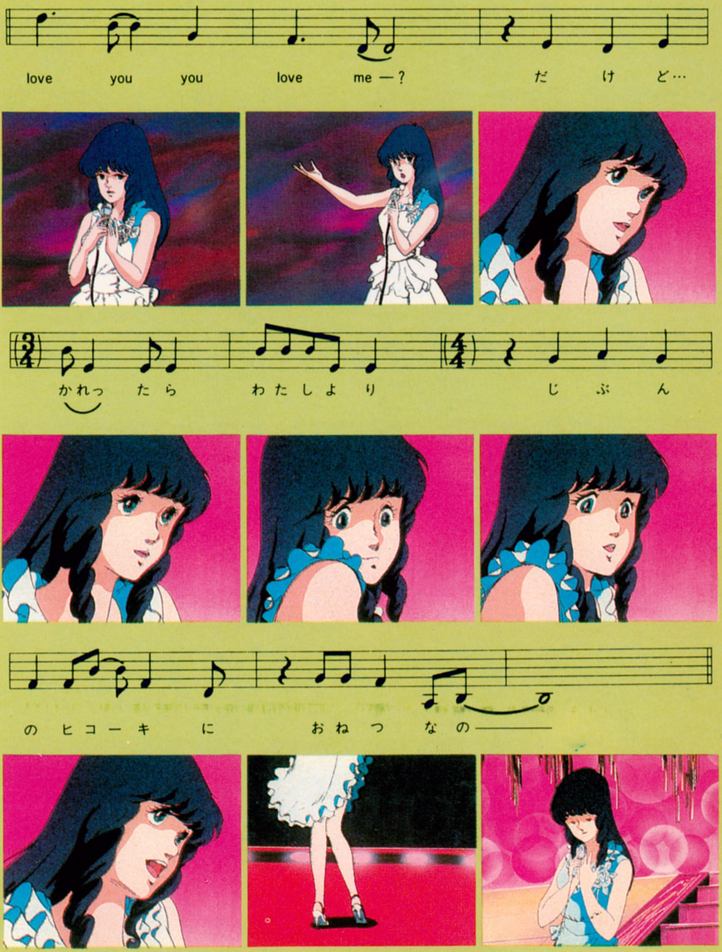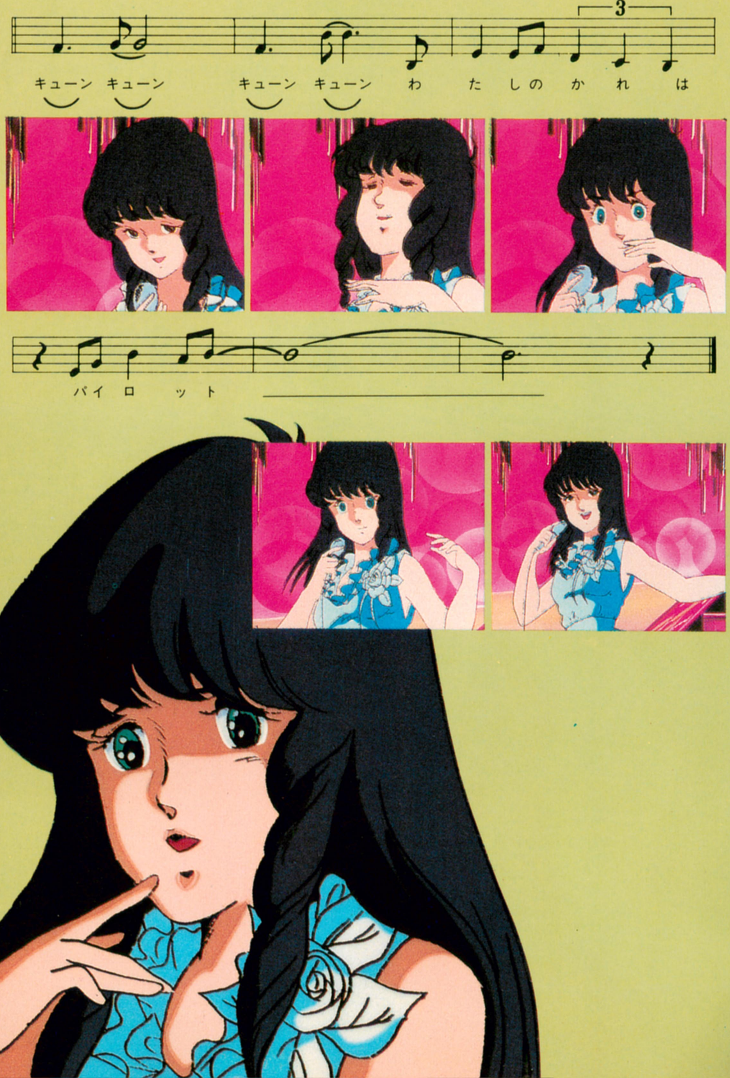



おきなー ハ ートがー かさねてふたっ ー あ




おーいー お おぞらー ラブサイーン I




love you you love me —?
だ け ど…
かれっ た ら わ た し よ り じ ぶ ん
の ヒ コ ー キ に お ね つ な の———


3
キューン キューン キューン キューン わ た し の か れ は
パ イ ロ ッ ト



MINMAY'S FASHION

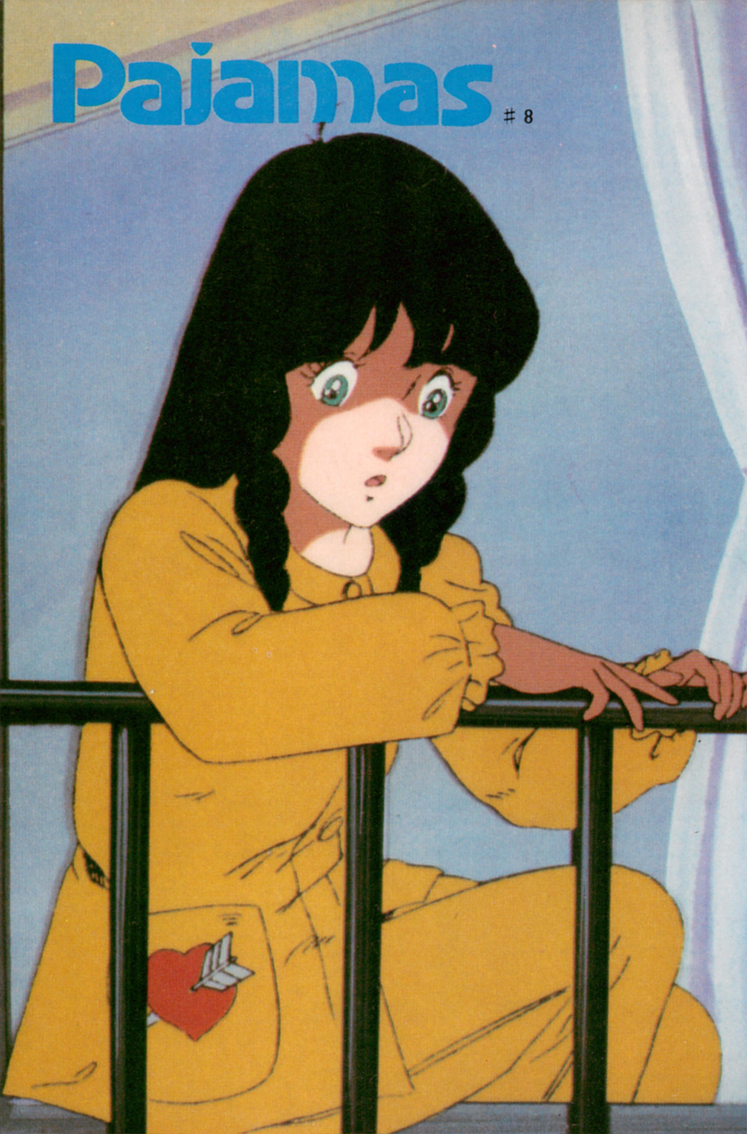


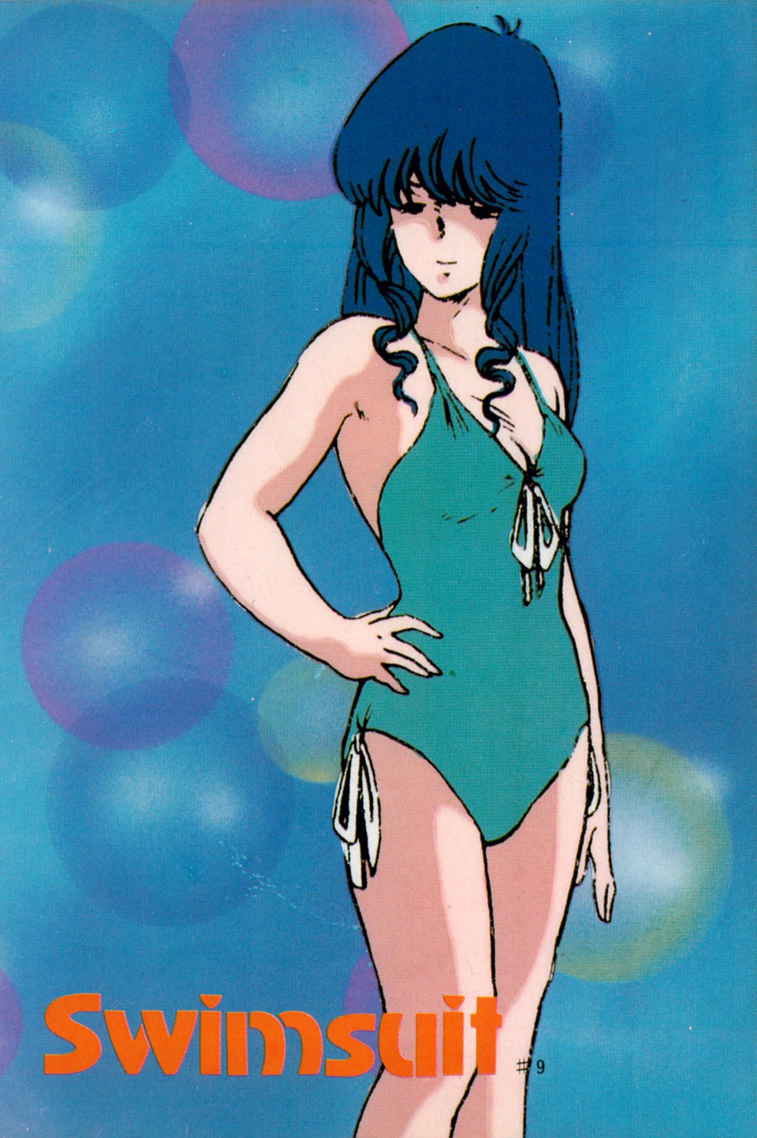
上段左　＃2，上段右　＃11，下段左　＃11，下段右　＃6，右ページ　＃11

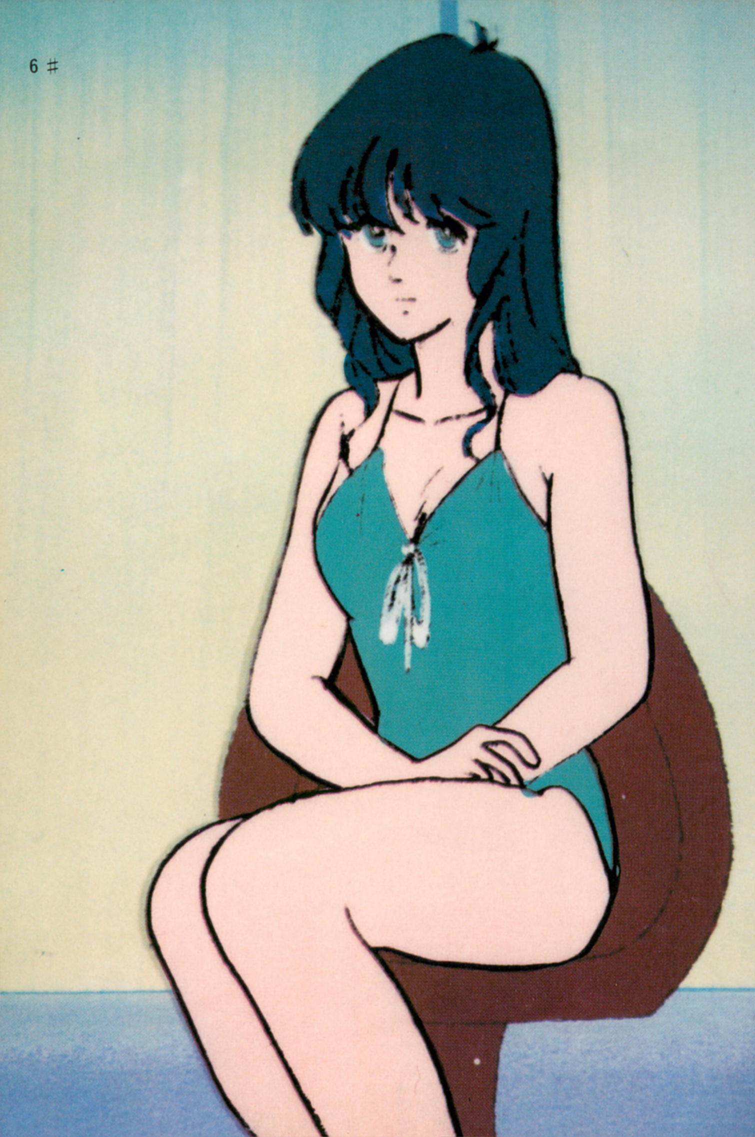

One Piece Dress
#9

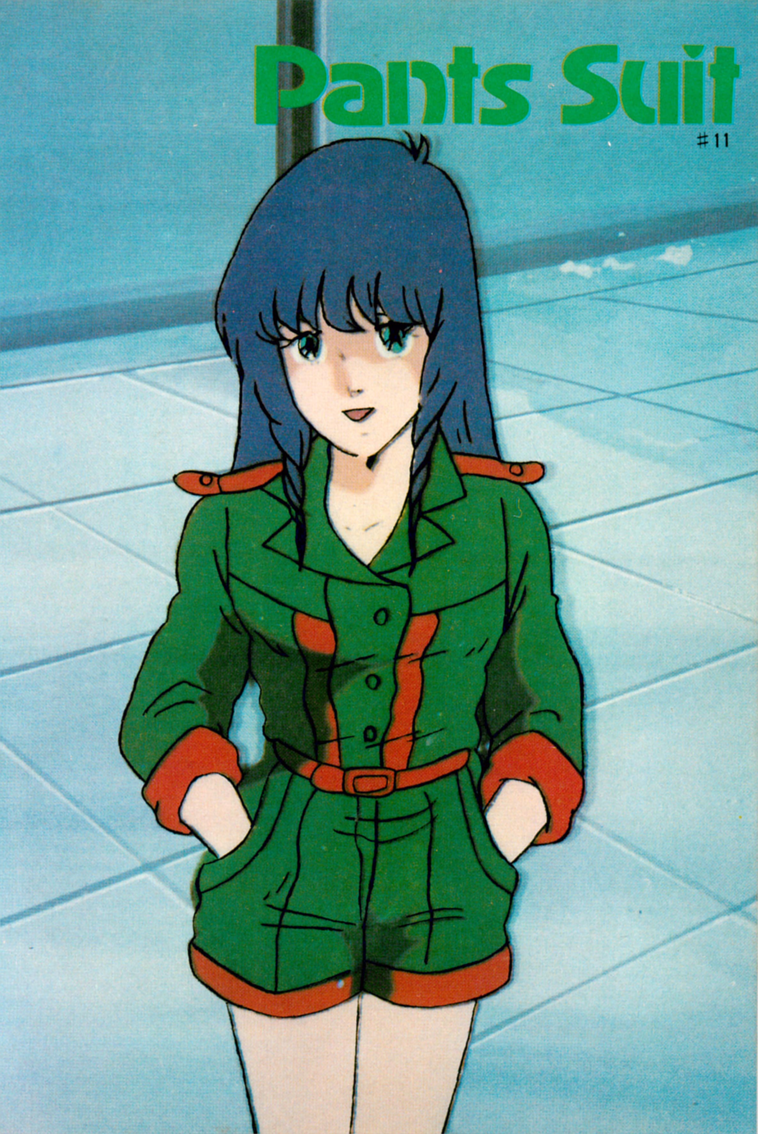
Pajamas

8




Swimsuit
#9

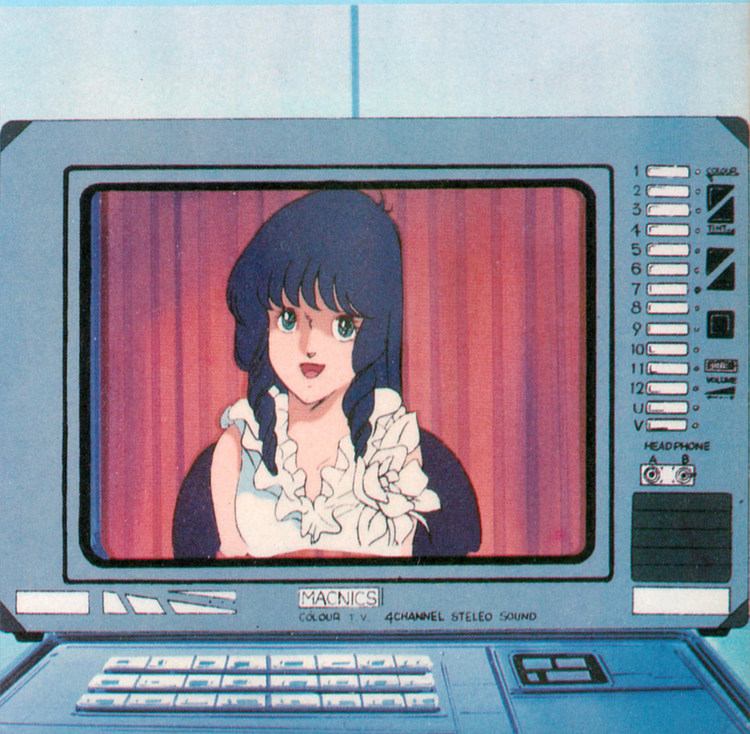

6 #


Pants Suit
#11


One Piece
Dress
4

Stage Dress

#11



Ivy Look

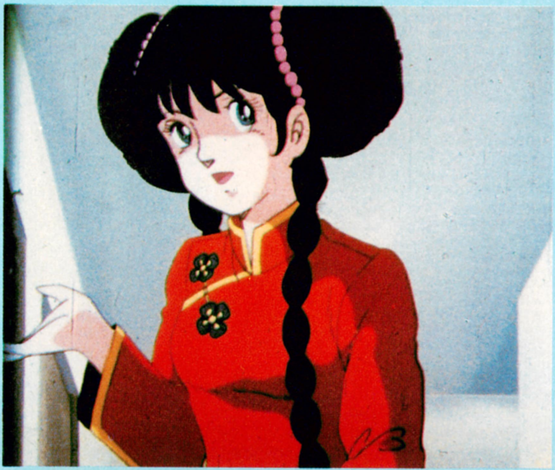
#11



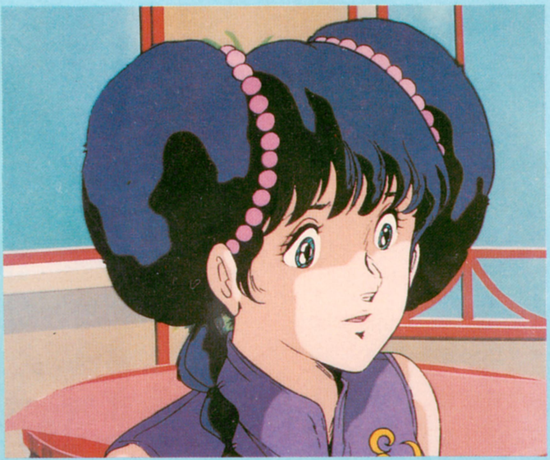
China Dress



6



6

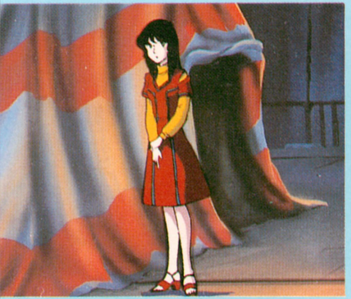


＃ 9



＃ 8

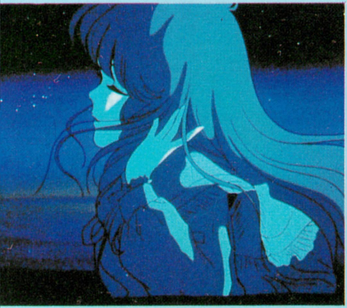
Wardrobe



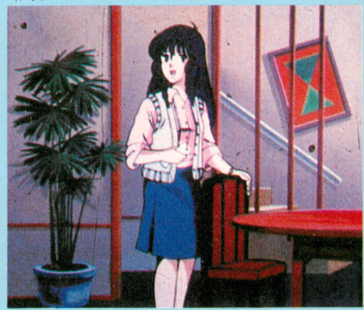
4



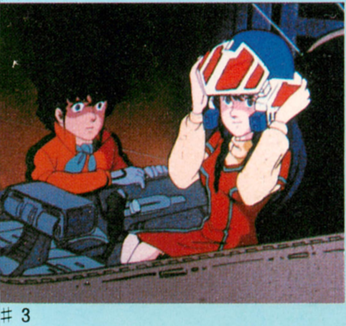
11



12



6

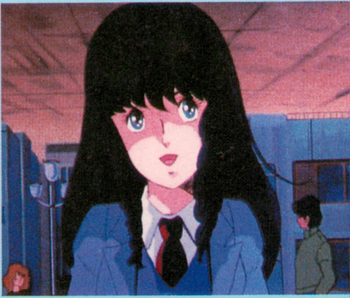


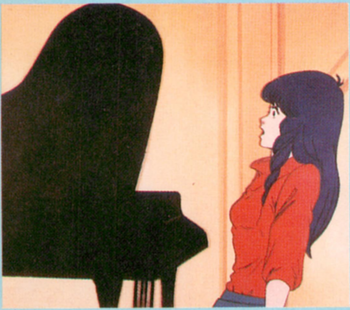
3



12

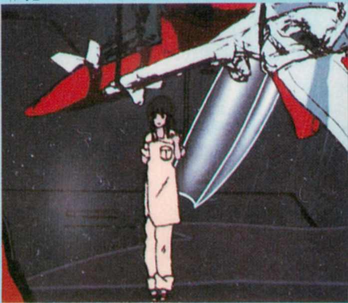

＃15


＃ 7


＃10


＃12


＃ 4


＃ 4

MINMAY'S Dream



不思議の国のミンメイ

by 門上洋子



赤ずきんちゃんに気をつけて

by 門上洋子

ミンメイの人魚姫
by しまだ ひであき



マッチ売りのミンメイ

by しまだ ひであき



4月15日
いま、私は最高に幸せ。
ミス・マクロス、歌手、女優、
そして「夢みるプレリュード」。
つぎつぎと起こったことが、
いまでも夢のようです。
これもファンのみんなの
暖かい応援のおかげです。
いま、私は感謝の気持ちでいっぱい。
ほんとうに、どうもありがとう。



イラスト・文／美樹本晴彦

「超時空要塞マクロス」より

夢みるプレリュード

My Fair Minmay

シナリオ・スタッフ共著

登場人物

リン・ミンメイ
ジャミス・メリン
一条輝
セイコ
アキナ
生徒A・B
蒲池
教師
その他級友達
男子学生
ミンメイ親衛隊の男子学生達
ミンメイの伯父・伯母
町会長

早瀬ミサ
クローディア
ヴァネッサ
シャミー
キム
グローバル
ロイ・フォッカー
マクシミリアン・ジーナス
柿崎速雄
マリ子
審査員A
女の子A・B
アシスタントディレクター
集計係の若者
その助手A・B
芸能事務所の社長

コンナウ・ラボンスキー
インペリアル・レコード社長
芦田らん山
その部下
テレビ局のプロデューサー
テレビ局のフロア・ディレクター

木田
マネジャー
ラディック中佐
防諜部員A・B
防諜部員チーフ
店員
助手

ケント
部長(レコード会社)
スタッフA・B

女史
部長A・B(映画会社)
監督(映画会社)
司会者

その他

アバン・タイトル

「マイ・フェア・ミンメイ――夢みるプレリュード」をお読みになるみなさまへ

これから始まる物語は、スターを夢みるひとりの少女リン・ミンメイが、宇宙戦艦マクロス艦内で催されたミス・マクロス・コンテストの女王に選ばれ、憧れのスターへと第一歩を踏み出すまでの前奏部(プレリュード)を、本編よりもさらにロマコメチックに描いたもので、TVシリーズの9話の直前から12話にいたるまでの裏話的、連作シナリオです。

このシナリオは、TVシリーズの制作手順と同様に、全5話にわたる大まかなストーリー構成を行い、それをもとにシナリオライターの方々と数回にわたる打ち合わせの末、書かれたものです。ここでいう〝シナリオ〟とは、ときおり雑誌などにも紹介される、AR(アフレコ)台本のことではありません。AR台本は、絵コンテをもとにアフレコ用に書きおこされているため、放映されるフィルムとほとんど差はありません。ところが、文字で書かれたシナリオから、絵の動きや音の流れを想定した絵コンテをおこす段階では、様々な変更が加えられるため、各ライター諸氏の個性は薄められ、シナリオが生(なま)な形で、陽の目をみることはめったにありません。

そこで今回は、各エピソードごとの書き方やキャラクター達のセリフの言いまわしのちがいなどは、物語のキーポイント以外、あえて統一を計らず、可能な限り原文に忠実に構成してみました。

今日はひとつ、TVシリーズの演出者にでもなった気分で、フィルムを頭の中に思い描きつつ、お読みいただければ幸いです。

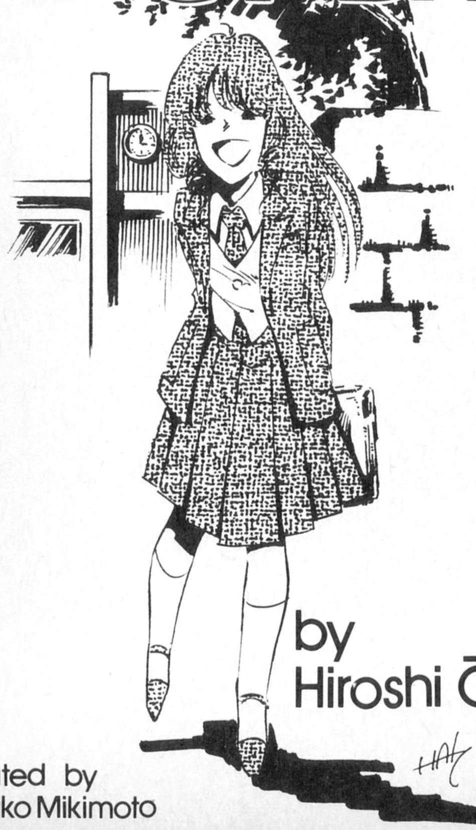
それではみなさま、マイ・フェア・ミンメイ――夢みるプレリュード、最後までごゆっくりごらんください。

構成・河森正治

EXTRA STORY

Part.1

FANCY DAYS



by
Hiroshi Ōnogi

illustrated by
Haruhiko Mikimoto

1

マクロス艦内・聖バレンシア女子学院・ミンメイの教室

西暦二〇〇九年十月十日。
今日はミンメイの誕生日。
机の上には小さな誕生ケーキとプレゼント。
ミンメイを中心に集まっている同級生達。
うれしそうなミンメイ。

同級生達「ミンメイ、お誕生日おめでとう」
同級生達、クラッカーを鳴らす。
それを浴びるミンメイ。

ミンメイ「(うれしそうに) キャッ」
画面静止。タイプ音とともに画面下にテロップ。
「リン・ミンメイ　十六歳　スターを夢みる女の子」

2

宇宙空間

ゆっくりと航行するマクロス(注1)。

3

マクロス艦内・中華料理店〝娘々(にゃんにゃん)〟(注2) 前 (翌朝)

シャッターが半開きになっている。

そこからミンメイが出てくる。

ミンメイ「いってきまーす」

ミンメイ、小走りにバス停へ向かう。

4

〃娘々〃近くのバス停

バスがちょうど来ている。

ミンメイ「まって。乗るわー」

ミンメイ、バスに飛び乗る。

吹きあがるエンジン音とともに発進するバス。

5

バス車内

ハーッと大きく息をつきながら席につくミンメイ。

車内アナウンス「つぎは南ゲート前、南ゲート前」

ミンメイ、驚く。

ミンメイ「いやーん、このバス、行先がちがーう」

6

聖バレンシア女子学院・校門

もうほとんどの生徒は登校したあと。

週番が立っている。

ミンメイ、走ってくる。
ミンメイ、校庭に走りこむ。
その途端に鐘がなる。
ミンメイ、肩で息をしながら、
ミンメイ「ハァ、ハァ、まにあったァ!」

7 同・ミンメイの教室

ミンメイ、居眠りをしている。
各自の机はディスプレイタイプ。
先　生「……であるから、この重力変数がx＝10となったとき……」
終業ベルがなる。
生徒達のあいだにホッとした雰囲気が流れる。
先　生「本日はこれまで」
ミンメイ、やっと目をさます。

8 同・校門

ミンメイ達（ミンメイ、セイコ、アキナ、生徒A）が出てくる。
生徒A「じゃあね――」
ミンメイ「バイバイ、またね」

手をふり、去っていく生徒A。
セイコ、ミンメイに耳うちをする。
セイコ「きょうもあなたの親衛隊がいるわよ」
ミンメイに手をふる男子学生集団（いろいろな学校の制服がありまず）。
ミンメイ「ああもたくさんいると良し悪しよ。バレンタイン・デイのチョコ代がどれくらいかかったか知ってる？」
アキナ「いいわね。ミンメイはもてるから」
アキナ「あげるひとがたくさんいるなんていいわねェ」
セイコ「そうよ」
ミンメイ、話題をそらそうとして、
ミンメイ「ねェ、〝パープル〟にいこうよ。きのうプレゼントもらったから、きょうはおごってあげるわ」
セイコ、アキナ、ニマーッと笑う。
セイコ「そういうことならいきましょ」

9
幸せの森公園

マックスがひとりベンチに座っている。
人待ち顔のマックス。

10 喫茶店〝パープル〟店内

ポップな歌謡曲がかかっている。
窓側の席にミンメイ達は座っている。
ウェイターが立っている。

セイコ「チョコ・パフェ・モンスター（注3）ね」
アキナ「あたしも」
ミンメイ、プッとふくれて、
ミンメイ「もう、あたしがおごると思って、高いもんばっか注文してェ」
アキナ「こういうときじゃなきゃ、食べられないものね」
セイコ「そうそう。……で、ミンメイはなに？」
ミンメイ「あたしもモンスター」
笑いが三人のあいだに広がる。
ウェイター「はい」
ウェイター、立ち去る。
曲がジャミスの「ハイビスカス・レディ」に変わる。
セイコ、思い出したように、
セイコ「ねェ、ジャミス・メリンがミス・マクロス・コンテストに出るって知ってた？」

ミンメイ「ほんとォ？　ジャミスが？」
セイコ「ほんとよ」
ミンメイ「あたし、あの人は審査員になるもんだとばっかり思ってた。……だって、コンテストに出たら、ミス・マクロスはあの人以外考えられないもの」
アキナ「そうでもないわよ」
ミンメイ「えっ？」
アキナ「あなたがいるじゃない」
ミンメイ「（驚き）えーっ。あたしがァ!?」
ミンメイ、両のこぶしを口にあてて驚く（ブリッ子ポーズ）。
ミンメイ「だってェ、応募もしてないのよ」
セイコ「（驚き）エー!!」
ミンメイ「ほんとよ」
アキナ「ウソでしょ」
ミンメイ「ほんとだってばァ」
セイコ「信じられないわ。あなたが応募してないなんて……」
ミンメイ「だって、恥ずかしいじゃない。それにもう応募期間終わっちゃったでしょ」
セイコ「きょうが十一日でしょ。まだ二日もあるわ」

ミンメイ「きょう、十一日だっけ」
アキナ「そうよ」
ミンメイ「なんかあったような気がするなァ」
　　ミンメイ、小首をかしげる。

11 幸せの森公園

　　ベンチに座るマックス。
　　時計を見ながらいらついている。
マックス「おそいなァ、ミンメイさん。パーティのとき約束したのに……」

＊

　　画面ふたつに割り、一方にチョコレート・パフェを食べ、笑うミンメイ。もう一方の画面にいらつくマックス（二人の対比、演出さんよろしく）。

12 〝娘々〟厨房（ちゅうぼう）

　　に顔をのぞかせるミンメイ。
ミンメイ「ただいまー」
伯　母「おかえり」
伯　父

二人ともいそがしそうに働いている。
伯　母「おやつ食べたら、ちょっと手伝ってね」
ミンメイ「わかったわ」
伯　父「そうそう。さっき町会長さんが来てな。タウン誌の表紙に使うとかいって、お前の3D写真（注4）持ってったね」
ミンメイ「ふーん」
伯　母「いけなかったかしら？」
ミンメイ「ううん。表紙に使うんだったら、普通の写真でいいのがあったのに……」

13
人工の朝焼け（注5）

14
聖バレンシア女子学院・ミンメイの教室

昼休みでざわついている。
教室へ生徒（ニーナ）がかけこんでくる。
ニーナ「タイヘンよ。タイヘン！」
セイコ「またニーナの〝大変〟がはじまったわ」
生徒A「こんどは誰？」

ニーナ「B組のカーラよ」
生徒B「えー、あのカーラが!?」
それっとばかり十名ちかくの生徒（アキナやセイコもいます）がかけだす。
ミンメイ、話相手がいなくなって、ポツンと残される。
その集団を軽蔑の目で見る優等生。
翔んでる生徒達も残っている。

＊

ややあってもどってくる生徒達。
セイコやアキナがニヤニヤしながらミンメイのところへやってくる。
ミンメイ「カーラがどうかしたの？」
セイコ「貴重なことをしたのよ」
ミンメイ、興味をいだいて、
ミンメイ「へえ、どんな？」
アキナ「ミンメイ、こうやってみなさいよ」
アキナ、自分の口に指を二本つっこみ、イーッと広げる。
ミンメイ、なんだかわからないが、イーッと口を広げる。
しかし、すぐやめる。

ミンメイ「イターイ。口が裂けちゃうわよ」
　　セイコとアキナ、ニヤリと笑う。
セイコ「そういう痛みのこと」
アキナ「いずれわかるわ」
ミンメイ「(ハッとして) あっ！　やだァ」
　　ミンメイ、嫌そうな顔をする。
　　見ると、ニーナについていった生徒達はみんな口をイーッとやっている。

15　聖バレンシア女子学院近くのクレープ屋

　　学院の生徒でにぎわっている。
ミンメイ「ブルーベリー・ジャムとチョコレート・クリーム」
店　員「はい、ブルーベリーとチョコね」

16　歩道

　　に立つ純情そうな男子学生 (ブレザー姿)。
　　道をへだててクレープ屋が見える。
　　クレープ屋からミンメイがかけてくる。
ミンメイ「はい、チョコレート・クリーム」

男子学生「ありがとう」
　　二人、食べながら歩きだす。

17　中央公園

（マックスがまちぼうけしていた公園とはちがいます）
ベンチに座っているミンメイと男子学生。男子学生の方は恥ずかしそう。
ミンメイの方はつまらなそう。
なんとなく気まずい沈黙。
男子学生「い、いい天気ですね」
ミンメイ「そうね」
　　また気まずい沈黙。
　　ミンメイ、時計を見る。
男子学生「ミンメイさん、実は僕は以前から……」
　　ミンメイ、立ちあがる。
ミンメイ「じゃ、わたし、そろそろ帰るわ。ありがとう。ほんとにきょうは楽しかったわ」
　　ミンメイ、立ち去る。
　　呆然（ぼうぜん）としてそれを見送る男子学生。

ミンメイ、肩越しに彼を見て、
ミンメイ「つまんないひとね。もうデートしてあげないから……」

18 〝娘々〟内・ミンメイの部屋

ベッドに寝転がって、アイドル写真集を見ているミンメイ。
伯 母「(部屋のそとから) ミンメイ、輝ちゃんからお電話ですよー」
ミンメイ「はーい」
ミンメイ、ベッドから起きあがり、部屋を出る。
誰もいないミンメイの部屋。
しばらくして、ミンメイがもどってくる。
ミンメイ「輝ったら急にデートだなんて」
ミンメイ、衣裳ダンスをあけ、服を選ぶ。
ミンメイ「デートの連チャンもつかれるなァ。映画も見あきたし、……もし、映画にいこっていったらことわっちゃお」

中 C M

19

〃娘々〃前

夜。

ミンメイの伯母が看板をしまおうとしている。

そこへあらわれる町会長。

伯　母「あら、町会長さん」

町会長「ちょいとよろしいやろか」

伯　母「ええ、かまいませんとも。（店の奥に）あなたァ、町会長さんがみえたわよ」

20

同・店内

店の椅子に座っているミンメイの伯父、伯母、町会長。

ミンメイがやってくる。

ミンメイ「なーに、重要な話って？　あら、町会長さん、こんばんは」

町会長「こんばんは」

ミンメイも椅子につく。

町会長「実はな、ミンメイちゃん。この間、３Ｄ写真、借りたやろ」

ミンメイ、うなずく。

町会長「あれな。実は……ミス・マクロス・コンテストの応募に使ったんや」

ミンメイ「(驚き) えーっ!! うそー」
町会長「ほんまやで。そいでな、うちとこの町内に住んどるＴＶ関係者に聞いたんや。そしたら! なんと、ミンメイちゃん、第一次書類選考に残ったそうやで!」
ミンメイ「(さらに驚き) えーっ!!」
町会長「このままいけば、今週の土曜にはコンテストに出場や!」
しかし、ミンメイ、黙ってしまう。
伯母「わたし達はかまわないのよ。あなたが出場したいのであれば……」
伯父「地球にいる両親 (注6) のことは心配することないね。事後承諾させればいいのね。……もっともそうするしかないんだがね」
町会長「ま、なんの相談もせんと勝手に応募したのは悪かったと思うとるが、これはチャンスやで、ミンメイちゃん」
ミンメイ、まだ黙っている。
間。
ミンメイ「すこし考えさせてください」
ミンメイ、立ちあがり、出ていく。
残された町会長達、しんみりとなる。
町会長「ほんまにどうもすいまへんでした」
町会長、頭をさげる

伯　父「頭をあげてください、町会長さん。あの娘は人の善意がわかる娘ですよ」

21
同・ミンメイの部屋

書類選考通過通知を見るミンメイ。

ミンメイ「夢に一歩近づいたってことかしら……。でもまだ二次があるし……」

間。

ミンメイ「(ハッとして) そうだ。土曜の夜は輝にお夜食とどけてあげるって、さっき約束したんだ (注7)」

ミンメイ、立ちあがろうとするが、すぐまた座りこむ。

ミンメイ「やーめた。電話は二次が通過してからにしようっと」

22
聖バレンシア女子学院・ミンメイの教室

椅子と椅子の間アップ。

手から手へと折りたたんだ紙が渡される。

紙を受けとり、なかをみるミンメイ。

ミンメイ、机をいくつかへだてたセイコの方を見る。

セイコ、ニヤッと笑い、手を小さくふる。

ミンメイ、嘆息をもらし、手紙を書く。
手紙がとなりの娘に手渡される。
ふたたび手から手へと渡る手紙。
先　生「(突然)こらっ！　蒲池！」
蒲池、首をすくめ、手紙を後ろ手に隠す。
しまったという表情のミンメイとセイコ。先生、つかつかと蒲池に近づき、
先　生「こらっ！　その手に持っているものを出してみろ」
蒲池、おずおずと手紙を差し出す。
セイコ「(小声で)万事休す」
先生、手紙を広げ、
先　生「なになに。明日、出場するの？　セイコ。……不本意ながら出場するわ。ミンメイ」
生徒A「えーっ！　ミンメイ、ミス・マクロス・コンテストに出場するの!?」
生徒達「えー、ほんと！」
「おめでとう」
など、口々に。
先　生「こらっ、黙らんか！」
生徒達、黙らず、ミンメイのまわりに集まる。

生徒達「ほんとにおめでと」
「やったわね、ミンメイ」
ミンメイ「(ドギマギ)あ、ありがとう。ええ、ガンバるわ……」
セイコ「これも、あたしが推薦したからよ」
アキナ「えっ！　あなたも？」
生徒B「まさかあなた達も推薦したの？」
生徒達「あら、あたしも推薦したわよ」
「あたしだって」
生徒達、大騒ぎ。
ややあって、
ミンメイ「じゃあ、みんな、あたしを推薦してくれたの？」
生徒達うなずく。
ミンメイ、なにもいえなくなるほど感動する。
先生がミンメイの肩をたたく。
先　生「(恥ずかしそうに)ミンメイ、実はわたしもきみを推薦したんだ。がんばれよ。みんな応援してるんだからな」
ミンメイ「ええ……」
ミンメイの目に涙があふれる。
ミンメイ「(涙声)ありがとう。……みんな」

アキナ「いいのよ、お礼なんか。それよりがんばってね」
ミンメイ「(涙声) ええ、ええ」
　　ミンメイ、涙を流しながらうなずく。
セイコ「泣かないでよ、ミンメイ」
ミンメイ「だって、涙がとまらないんだもの」
　(演出さん、ここらへん、それとわかるように思いっきりクサくしてください)

23　同・校門

下校するミンメイ達。
校門の前に男子学生の集団。
ミンメイの姿を認めると、一斉にプラカードや横断幕がかかげられる。
それには「ミンメイさん、出場おめでとう」「ガンバレ!!　われらがミンメイ」とか書かれている。
それを見てあきれるミンメイ。
歩きはじめるミンメイ達。
その後ろから男子学生の声。
男子学生達「L・O・V・E、ラブリー・ミンメイ!」

のフレーズがくりかえされる。
ミンメイ「バッカじゃないの？」
セイコ「いいじゃないの、みんなあなたのファンよ」
アキナ「ファンは大切にしなきゃ」
ミンメイ「そうね」
ミンメイ、後ろをふり向き、
ミンメイ「みんなー、応援ありがとう」
といって手をふる。
男子学生達「オーッ！」
一段と盛りあがる男子学生達。

24

〃娘々〃内・ミンメイの部屋

ミンメイ、うれしそうに電話のプッシュ・ボタンを押している。
ミンメイ「バーミリオン小隊（注8）の一条少尉を呼び出してください」
ミンメイ、輝が出るのを待つ。
ミンメイ「輝も推薦してくれたのかなァ？（電話口に輝が出る）……あっ、輝？ごめんね。土曜の夜いけなくなっちゃった」
輝「（驚き）えーっ!! どうして」
ミンメイ「なぜでしょう。……それはだねェ。なんとあたしはミス・マクロ

ス・コンテストに出場するの。……どうだ、驚いたか」
ミンメイ、喜んでくれる輝を期待している。

25
兵員宿舎
電話している輝。
輝「なに、ミス・マクロス？　なんでおたくが出るんだよ」
ミンメイ「町会長さんが勝手に応募しちゃったの」
（ここまでＴＶシリーズ九話のデュープ）
輝「そんなの……出るなよ」
ミンメイ「でも、いまさら……」
輝「断っちゃえ、断っちゃえ」
ミンメイ、輝のいい方にカチンとくる。
ミンメイ「約束が守れないのは悪いけどさ、なにもそんなに怒ることないじゃない。あなたが一番喜んでくれると思ったのにィ！」
ガチャンと電話が切れる。
輝「（怒気をふくんで）ううん、もう！」

26
同・ミンメイの部屋
パジャマ姿にカーディガンをはおり、椅子に座っているミンメ

イ。
　ミンメイ、大きなクマのぬいぐるみ（名前はパム）を抱いている。
ミンメイ「ねえ、パム。みんな、あたしに期待してくれてるのよ。町会長さんでしょ。学校のみんな、それに親衛隊の人達。……あなた、あたしに親衛隊がついてるって知ってた？」
　ミンメイ、ぬいぐるみにうなずかせる。
ミンメイ「それなのに輝ったら、ひとりで怒っちゃって……。……輝、見にきてくれないのかなァ」
　ミンメイ、ぬいぐるみを見つめる。
ミンメイ「あいつにも少しはいいとこがあるから、見にくるだろう、ですって？　なにマセたこといってるの」
　ミンメイ、ぬいぐるみの頭を軽くたたく。
ミンメイ「やっぱり輝には見にきてもらいたいなァ……」
　間。
　ミンメイ、机の上からミス・マクロス・コンテストの出場通知をとる。
　出場通知をぬいぐるみに見せるミンメイ。
ミンメイ「パム、これが出場通知だぞォ。オーディションの合格通知とは違うんだから。……ねえ、あたし、何位ぐらいまでいけると思う？」

ミンメイ、ぬいぐるみを見る。

ミンメイ「優勝まちがいなし？　ダメよ。ジャミスがいるもの。……二位もあぶないんじゃないかな。あたしより美人のひとっていそうだもん。まあ、運がよくて三位、万が一の奇跡で二位。……悪くすると二次落ち……。あんまり考えたくないなァ。みんなの期待には少しでもこたえなくちゃいけないでしょ」

ミンメイ、立ちあがり、かわりにぬいぐるみを椅子に座らせる。

ミンメイ、衣裳ダンスに近づき、清楚な服を一着選び出す。

ミンメイ、ハミングしながら、服を肩にあててみる。

ステージのうえに立ったつもりで、きどった足どりで歩きだすミンメイ。

ミンメイ「あしたはこれ着てこうかなァ」

27

同・ミンメイの部屋

すでに明りは消えている。

ノブが回り、ドアが少し開けられる。

廊下の光がもれてくる。

のぞきこむ二つの顔（ミンメイの伯父、伯母）。

ミンメイはやすらかな顔で眠っている。

＊

ミンメイの部屋の前。

部屋をのぞく寝巻き姿の伯父夫婦。

伯　母「あの娘ったら、ちゃんと眠ってるわよ。……興奮して眠れないんじゃないかと思ってたのに……」

伯　父「あの娘はわしらが思っている以上に胆が太いのかもしれんな」

伯　母「そうらしいわね」

＊

ミンメイの部屋。

ミンメイの伯母、ドアをそっと閉めながら、

伯　母「おやすみ。未来のスターさん」

パタンと閉じられるドア。

軽い寝息をたてるミンメイの寝顔アップ。

つ　づ　く

注1　航行するマクロス——地球発進から約八カ月後。火星・上陸戦闘を終え、今もなお、地球帰還めざして航行を続けるマクロス。その艦内に再建された元南アタリア島の市街地では、地球上とほとんど変わらぬ生活が営まれるようになっていた。

注2　中華料理店〝娘々〟――マクロス左舷エンジンブロックの市街地にある中華料理店。ミンメイの伯父・伯母が経営。マクロス艦内では最初に営業を開始した。名物は、ダイナマイトラーメン・流星チャーハン・五目パフェ等。

注3　チョコ・パフェ・モンスター――マクロス艦内の軍事メーカー工場において、デストロイド・モンスターの量産が開始された事を記念して生まれたチョコレート・パフェ。アイスクリームの上に、四本の太めのチョコスティックが差してある所が特徴。

注4　3D写真――立体映像写真。

注5　人工の朝焼け――特殊な立体映像を使って、マクロス艦内の空間に、朝焼けや夕焼けを映し出す。また、公園等の区画では、昼間でも、人工の天気が映し出されている。

注6　地球にいる両親――ミンメイの両親は、地球の横浜・中華街で、中華料理店〝明謝楼(ミンシャロウ)〟を経営している。

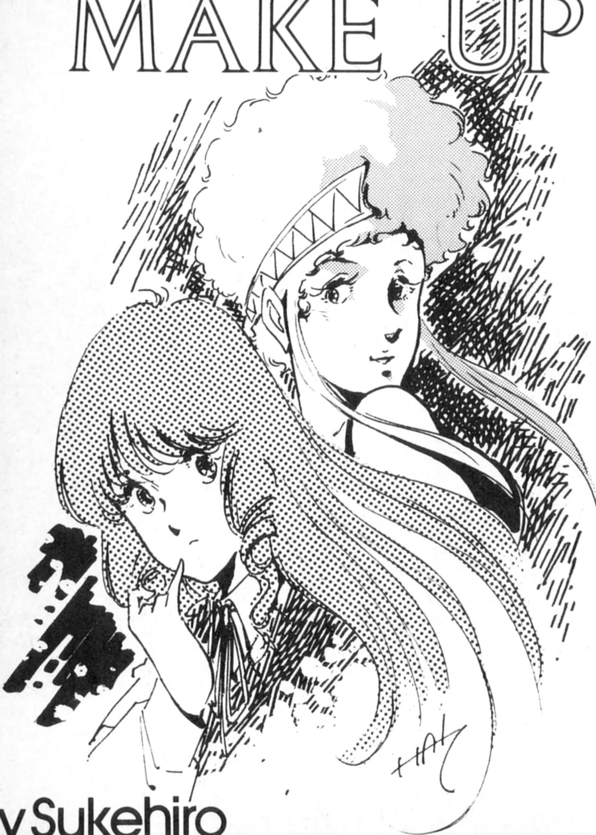
注7　ミンメイの約束――喫茶店〝バリエーション〟で輝と会った時に、ミンメイの交わした約束（TVシリーズ#9話参照）。

注8　バーミリオン小隊――一条輝を小隊長とする、バルキリー三機の戦闘小隊。二番機には柿崎速雄、三番機にはマクシミリアン・ジーナスが搭乗する。

EXTRA STORY

Part.2

MAKE UP



by Sukehiro Tomita

illustrated by Haruhiko Mikimoto

1

マクロス艦内・ＭＢＳ・大ホール（注1）コンテスト会場

会場に集まっている観客たち。

カラフルにレーザー光線が飛び交う。

レーザー光線は「ミス・マクロス・コンテスト」と、光の文字を描き出す。

声「ミス・マクロス・コンテスト！　栄冠に輝くのは誰か？　ＭＢＳマクロス放送局開局記念特別番組ミス・マクロス・コンテスト。アイドルに選ばれるのは誰!?」

ステージ傍に、審査員が着席する。

その中に、グローバルの姿もある。

移動カメラが審査員たちに向けられる。

声「応募総数四百四名の中から、書類選考を通過した二十八名の若く美しいお嬢さん方が、まもなく始まる第一次審査に向けて仕度をしています。あなたの選んだ一票が、明日のスターを決める、ミス・マクロス・コンテスト、もうまもなくで開始です」

ざわめく観客席。

客席の中に、マックス、柿崎の姿。

町会長と夫人の姿もある。

柿　崎「（興奮して）ボクのミンメイちゃん、優勝するといいな」

マックス「（呆れて）いつからミンメイちゃんはお前一人のものになったんだ？」

柿　崎「えっ？　あはははは（誤魔化し笑いをして）ボクらのミンメイちゃんって言わなかったか？　あはははは……」

2

コンテスト会場・控え室

観客の笑い声が聞こえてくる。

書類選考に残った女の子たちが、華やかな民族衣裳で待機している。

その中で、ひときわ美しい女の子ジャミス。

傍にはお付きのマリ子が居る。

「ねえ、ジャミスよ」

「わッ、ホント！」

「やっぱり女優ね。綺麗～ィ」

と、ささやき声が聞こえて来る。

ん!?　と、ジャミスの方を見るミンメイ。

ミンメイ「（輝いて）わッ、ジャミスさん!!（と、駆け寄り）すみません。私、あこがれているんです。サイン、いただけませんか？」

ハンカチとサインペンを差し出す。
えっ？　と、ミンメイを見るジャミス。

ジャミス「仕度で忙しいのよ。後でね」
軽くいなして、その場を去る。

ミンメイ「(ガッカリして)――」

マリ子「お嬢(じょう)のサインが欲しければ、キチンとサイン帳を持っていらっしゃい」

プイッと、その場を離れて行く。
呆然(ぼうぜん)とたたずむミンメイ。

ミンメイ「――」

3

同・個人楽屋

化粧鏡の設置された一人用の楽屋。
ドアを開けて、中に入って来るジャミス。
続いて入って来るマリ子。
鏡の前に座るジャミス。
少しほつれた髪を直すジャミス。

ジャミス「根回しは全て済んだのでしょうね」

マリ子「はい。五人の審査員のうち四人までは、お嬢を選ぶ確約を取りつけて

あります」
ジャミス「口説き落とせなかった一人は誰？」
マリ子「グローバル艦長です」
ジャミス「あの堅物か……」
マリ子「事務所でも、軍の人たちだけは下手にさわれないからって――」
ジャミス「私が直接行けば別かもね。部屋に呼び込んでしまえば、否が応でも、私を選ばざるを得ない状況に出来るのに」
手持ちの香水を項に吹きつける。
ジャミス「まあ仕方無いわ。あと問題は一般の観客たちね」
マリ子「それは大丈夫でしょう。お嬢のファンクラブや親衛隊、それに〝ジャミスを守る中年商店連合会〟のメンバーが票集めに駆け回ってくれました」
ジャミス「わかってるわ。私が知りたいのは、投票してくれる確実な数なのよ」
マリ子「組織票を持っているのは、お嬢だけです。他の連中は浮動票をあてにするしかありません。得票がそれぞれ分散するでしょうから、お嬢の優勝は目に見えていますわ」
ジャミス「（苛々して）勝つのは当たり前よ。無能なマネジャーね、あなたは」
マリ子「（うなだれて）――」

ジャミス「私は他の娘たちにどれほどの大差をつけて勝てるかを心配しているんじゃないの」
マリ子「すみません」
ジャミス「気になるのは、私にサインを求めたミンメイって娘ね。あの娘、なかなかいいフィーリングしてたわ、意外と得票を延ばすかもしれなくってよ」
マリ子「平気ですよ、あんなイモ！（心の声で）あんなのだったら、私の方がずっと可愛いわよ」
目の前の鏡を見つめるジャミス。
ジャミス「（心の声）やだわ、目立つ……」
目尻の小皺を気にする。

4

同・別の三人用楽屋
鏡の前で化粧している、書類選考に残った女の子二人。
部屋の隅にミンメイがポツンと独り。
女の子A「（顔をパフで叩きながら）あんた、コンテストに出る資格あんの？」
女の子B「どーいう意味よ？」
と目張りを入れる。
女の子A「だって、あんた、定期券（注2）とパート（注3）で暮らしてるって

女の子B「バカみたい。扇子（注4）届けをしてなきゃ、何をしようと法律的にはミスじゃないのさ」
うわさじゃないのよ。それで、ミスなんて言えんの？」
女の子A「毎晩がんばっちゃってるくせに、よく言うわよ」
女の子B「何言ってんのよ。そんならあんただってミセスだろうが！　それとも、いつも独り遊び（注5）!?」
女の子「（カッとなり）バカにしないでよ。あたいがロッペンギ街のディスコ・クイーンって言われてるの知らないの？　カッペ！」
女の子A「うるさい、かす！」
女の子B「ナフタリン（注6）！」
激しく胸倉を摑み合う二人。
息を飲んで見つめるミンメイ。
その時、ドアが開いてA・D（アシスタント・ディレクター）が顔を覗かせる。
A・D「始まります。スタンバイ、よろしく！」
パッと、手を離す二人。
一瞬にして明るく可愛い少女に戻る。
二　人「（同時に）はーい。お願いしまーす」
呆れて見つめるミンメイ。
ミンメイ「（心の声）怖～い。みんな、凄いんだ。私だけね、何にも知らない

の……」

自分の映った鏡を見つめて、

ミンメイ「ボーイフレンドのせいなのかしら……輝も、他の子も真面目だもんね」

と、ため息を吐く。

5 同・コンテスト会場

「うわ～ッ」と、高鳴る歓声。

声「お待たせ致しました。ミス・マクロス・コンテスト、いよいよ開幕です。まずはエントリーNo.2、イーヨン・松本嬢、趣味は編み物、洗濯、庭掃除とおっしゃる家庭的なお嬢さんです」

可愛い女の子がムームーを着て登場する。

6 マクロス・ブリッジ

TVモニターに映るコンテスト会場。見つめるクローディア。

興味ないとばかり、マガジン雑誌を読んでいるミサ。

クローディア「ちょっと、ご覧なさいよ。艦長、なかなか審査員然としているわよ」

ミサ「(ふっと顔をあげて) そう?」

クローディア「ミサも応募すればよかったのに？」
ミ　サ「興味ないもの」
クローディア「軍人としての気質が根っからしみ込んでしまっているのね」
　ＴＶにNo.２の女の子が映る。
クローディア「まあ、この程度なら、あなた、勝てるわ（と、ＴＶを観る）」
　チラッと、流し目でＴＶの方を見るミサ。思わず、微笑を隠せずに――、
ミ　サ「（心の声）勝てそう――」
　その時、探知レーダーに反応。
ヴァネッサ「敵機です」
クローディア「（はッとなり）ホント！　あなたたち、コンテストに浮かれずに、勤務に励んで、見直したわ」
　顔を見合わせる三人娘。
シャミー「だって……」
キ　ム「ねえ（他の二人に同意を誘う）」
　と、秘密めいてうなずく三人娘。
クローディア「どうしたの？」
シャミー「あの……あたしたち、応募したんだけど、書類選考で落ちちゃったんです」

クローディア「えッ？」
キ　ム「シャミー」
ヴァネッサ「余計なこと言うな」
キムとヴァネッサ、シャミーに肘鉄。
ウッ！　と、痛みで顔をゆがめるシャミー。
プッと、吹き出すクローディアとミサ。

7　コンテスト会場・場外観覧場

独りでステージを眺めている輝。
輝「(ブップッとつぶやく) くだらないよ、美人コンテストなんて。顔がいいとか、スタイルがいいとか、そんなことで人間の価値を決めるなんて、バカげてるよ」

8　同・別の一角

やって来たフォッカーが輝の姿を見つける。
フォッカー「ん？　輝じゃないか。あいつもやっぱり見に来たか。健康な男の証拠だ」
近寄ろうとするが、ふっと歩みを止める。
フォッカー「そっとしといてやるか――」

9

同・場外観覧場

なおもブツブツとつぶやいている輝。

輝「最終審査は水着姿になるっていうじゃないか。ミンメイの水着姿をこんな大勢の目の前に晒(さら)すなんて……もったいないよ」

大観衆を見おろす。

10

同・舞台袖(そで)

声「次は、エントリーNo.12、リン・ミンメイさん。十六歳のお嬢さんです」

舞台袖で、チャイナ・ドレスの裾(すそ)を気にしているミンメイ。

ミンメイ「困っちゃうな。伯母さんが選んでくれたの……、太腿がこんな所まで見えちゃう……」

声「リン・ミンメイさん！」

ミンメイ「は、はーい！」

あわてて大きな声を出すミンメイ。歩幅に気をつかいながら、舞台裏の中央へと進み行く。

11

同・場外観覧場

舞台中央から登場するチャイナ・ドレスのミンメイを見つめる輝。

輝「!! 可愛いよ、ミンメイ……」

12 同・舞台

舞台中央に立つミンメイ。
大観衆がミンメイに迫り来るように見える。

ミンメイ「カボチャ、ナス、トマト。あがっちゃいけないおまじない。観客はカボチャに、ナスに、トマトです」
と、つぶやいているが、わずかに足が震えている。
その時、艦内放送が聞こえてくる。

放送の声「一条輝少尉、至急、ブリッジまでお電話下さい。一条輝少尉、至急、ブリッジまでお電話下さい」(注7)
はッと、瞳を輝かすミンメイ。

ミンメイ「輝!? なあんだ、来てたの? コンテストなんか出るなって言ってたのに、……ウフッ、応援に来てくれたのかしら?」
場外観覧場から去って行く輝の姿が、チラッと見えたような気がするミンメイ。
足の震えが自然にとまっている。

審査員Ａ「ミンメイさん、ミンメイさん！」
　　と、大きな声で呼んでいる。
ミンメイ「(我に返って) は、はい」
審査員Ａ「あなたは自分の体でどこが一番好きですか？」
ミンメイ「あ、あの……好きな所は……背中です」
審査員Ａ「背中!?　どうして？」
ミンメイ「見えないので欠点に気付きませんから」
審査員Ａ「なるほど。では、見える部分で好きな所はないという訳ですか？」
ミンメイ「は、はい。脚は太いですし、顔もベビーフェイスであまり好きではありません。でも、親からもらった顔ですし、これから一生お付き合いしなくちゃならない顔ですから、愛着は持っています」
審査員Ａ「わかりました、結構です」
ミンメイ「ありがとうございました」
審査員Ａ「後で、水着になられた時に、あなたが大好きだって言う背中をじっくり見せていただきますよ」
ミンメイ「(思わず) そんな、ヤダァ〜」
　　と叫んで、あッと口をつぐむ。
ミンメイ「失礼しました」
　　ダッと奥へ駆け込むように入って行く。

大爆笑の観客たち。

13

同・舞台袖

駆け戻って来るミンメイ。

ミンメイ「(大きくため息を吐く) ハーッ。もう駄目だわ。失格ね……」

とつぶやく。

その近くに、集計コンピューター係の若者が居て、ミンメイに声を掛ける。

若　者「可愛いかったよ」

ミンメイ「えッ？」

若　者「袖で見てたけど、とっても良かった」

ミンメイ「ありがとう、なぐさめてくれて」

若　者「そんなんじゃない。本当だよ」

ミンメイ「一人でもそう言ってくれる人が居てくれるだけで充分よ」

その時、通路にジャミスとマリ子が来る。

マリ子「邪魔よ、どいて！」

はッと、道をあけるミンメイと若者。

ジャミス「自分の出番が終わったからって、はしゃいでいてもらっては困るわね。まだ、後の人が居るのよ。あなたには思いやりってものがない

ミンメイ「(気付いて) ごめんなさい」
　　　ジャミス、答えずに舞台袖へと進む。
マリ子「あなたみたいな身勝手な人、決勝に残る資格なんかないわね」
　　　嫌味の捨て台詞(ぜりふ)を言って、去る。
　　　うなだれて、肩を落とすミンメイ。
若　者「チェッ、ほんのちょっと立ち話してただけじゃないか。売れッ子ぶって、後でみてるがいいや。(ミンメイに) 気にするなよな」
ミンメイ「いいのよ。心遣いが足りなかった私が悪いんですもの……」

14　同・舞台

　　　「わーッ」と、歓声があがる。
　　　舞台中央に立つジャミス。
声　「皆さん、すでにご存知、ジャミス・メリン嬢です。地球では、歌手として、女優として大活躍、二十二歳のお嬢さんでーす」
　　　「うわ〜ッ」とさらに高鳴る大歓声。
　　　場慣れた雰囲気で挨拶するジャミス。
　　　見つめる審査員たち。
審査員A「さすがジャミスだ。これなら俺が票を入れなくても、優勝は間違い

ないか……ひとつ、気に入った娘に俺の票を入れるかな……」

中　C　M

15

同・舞台裏・水飲み場

水道で顔を洗っているミンメイ。
一方からA・Dが駆けて来る。

A・D「あッ、いたいた」
えッと、濡れた顔をあげるミンメイ。
A・D「何してるんです。早く水着に着替えて下さい」
ミンメイ「でも……」
A・D「もうすぐ出番なんですよ」
ミンメイ「私なんか、落ちた方がいいのかもしれない」
A・D「それはみんなが決めることです。一人でも途中で棄権（きけん）すると、ボクが困るんです。ボクの立場も考えて下さいな。さあ！」
ミンメイを強引に引っ張って行くA・D。

16

同・三人用楽屋

ミンメイがあわただしくチャイナ・ドレスを脱いで、水着に着替え始める。
トントン！　と、ドアを叩く音。

ミンメイ「はーい」

A・Dの声「急いで下さい。次が出番です」
ミンメイ「は、はい。今、すぐ！」
紺色のワンピースの水着を着るミンメイ。あわてて部屋を出て行く。

17 同・舞台袖

水着姿の女の子たちが出番を待って並んでいる。
その列の前を走るミンメイ。
ミンメイ「ごめんなさい！」
軽蔑的な顔でミンメイを見るジャミス。
声「続いてエントリー№12、リン・ミンメイさん」
BGMが鳴る。
あわてて舞台袖から舞台へと向かうミンメイ。

18 同・舞台

大きく深呼吸するミンメイ。
あわてて水着を着たので、お尻の部分がしっくりしないので、裾をつまんで直すミンメイ。
BGMの高鳴る中、水着姿でミンメイがポーズを取る。

柿崎の声「イヨッ、ミンメイちゃん、可愛いよ！」
ミンメイ「あーん」
　　思わずつんのめり、
ミンメイ「キャーッ」
　　倒れるミンメイ。
　　一瞬、あっと見る客たち。ドッと笑う。真っ赤になるミンメイ。
　　立ち上がる。
グローバル「大丈夫ですか？」
ミンメイ「(顔を赤らめて) はい」
審査員A「後ろを向いて下さい」
ミンメイ「えッ？」
審査員A「(ニコッとして) 約束通り、背中を見せて欲しい」
ミンメイ「(素直に) あッ、はい」
　　クルッと背を向けてポーズする。
審査員A「うーむ」
　　ニンマリ見つめるグローバル。
　　観客席で、思わずため息をつくフォッカー、柿崎、マックス。
マックス「うむ。悪くない。いける」
柿　崎「可愛い……」

審査員A「いいでしょう。正面を向いて下さい」
ミンメイ「はい（正面を向く）」
審査員A「背中も可愛いが、お尻もなかなか魅力的だ。チャームポイントはお尻かな」
うつむいて真っ赤になるミンメイ。
再度、爆笑が起こる。
ミンメイ「もう……穴があったら入りたい……輝がいうように出ない方がよかったみたい……」
泣きそうな顔になる。

＊

ミンメイのその顔のUPに、水着姿の女の子たちの審査模様が次々と重なっていく。

＊

効果音が高鳴る。
ざわめく会場。
水着姿の女の子たちがステージに並ぶ。
声「只今より、二次発表を致します」
さらに高鳴るBGM。
水を打った如く静まる場内。

声　「エントリーNo.1、ジャミス・メリンさん！」
　　うわっと、どよめく観客。
　　ジャミスの立つ床がスライドして、移動椅子の方に運ばれる。
声　「続いて、エントリーNo.8、ミカ・ドーラさん」
　　同じくスライドして、最終決戦のパネル前まで移動椅子で運ばれるミカ。
声　「次に、エントリーNo.12、リン・ミンメイさん」
ミンメイ「えッ!?」
　　瞳を輝かすミンメイ。
ミンメイ「私が……最終審査に残った!?……」
　　うわっとどよめく歓声。
　　ステージを見つめるフォッカーたち。
町会長「ミンメイちゃん。やったでえ！」
　　興奮して叫ぶ。
柿崎「凄い。ミンメイちゃん、絶対優勝だ」
フォッカー「恐らく無理だな」
柿崎「(怒って) どうしてですか？」
フォッカー「どうせ優勝者は初めから決まっているんだ」
マックス「えッ？」

フォッカー「女優のジャミスだ」
柿　崎「そりゃあ、彼女は有利だけど、まだわかりませんよ」
フォッカー「いや、恐らく彼女は審査員たちに初めから根回ししてあるはずだ」
マックス「!?」
フォッカー「彼女ほどの女優なら、普通だったらゲスト審査員になるはずだ。それなのにわざわざコンテストに出場した。これはどういうことだと思う？」
柿　崎「どういうことだ？（と考える）」
マックス「そうか。売名行為か！」
うなずくフォッカー。
マックス「そうだよな。シロウトに混って負けたとなれば、恥だもんな。くそ、初めから優勝出来るように仕組んであったか——」
柿　崎「クェーッ！　そんな汚ねえことがあるのかよ!?」
フォッカー「芸能界とは、そういうものさ」
その間に、後二人が決まる。
舞台中央奥に設置された得票パネル。
その前の五つの椅子に腰かけるジャミス、ミンメイ、他三人の女の子。

三人の中の一人は、ミンメイと楽屋が同室になった女の子Bだ。
盛り上がるＢＧＭ。
激しく飛び交うレーザー光線。
声「いよいよ、最終結果の発表でーす」
照明が五人の女の子に集中する。
声「会場の皆さん、さらに、審査員の得票の総合点が集計コンピューターに表示されます。集計コンピューター、スイッチ・オン！」
五人の女の子の後部パネルのコンピューター数字がめまぐるしく増えていく。
息を飲んで目を閉じるミンメイ。
ふっとミンメイを見るジャミス。
ジャミス「そんなに緊張することないわよ」
ミンメイ「えッ？」
ジャミス「どうせ、結果は決まっているんだから――（ニンマリと嗤う）」
ミンメイ「――」
その時、三人の女の子のパネル数字が次々と停止する。
声「エントリーNo.8、39、48！　残念、脱落です。残るは二人にしぼられました」
ガックリとうなだれる三人の女の子。

声「エントリーNo.1のジャミス・メリンさんか、エントリーNo.12のリン・ミンメイさんか!?」

19 同・舞台袖

集計コンピューター係の若者三人が、驚いて掲示数字を見ている。

ジャミスとミンメイの得票数が六千五百八十六対六千五百八十六の全く同数なのだ。

若者「お、おい。同点だよ」

助手A「どうしましょう?」

助手B「ゴルフみたいにプレイオフにしますか?」

若者「そうだなあ……」

助手A「ちょっと待って下さい。そう言えば俺、まだ一票の投票をしてませんよ」

助手B「あッ、俺もだ」

若者「忙しさにかまけて、俺も忘れてた」

助手A「審査員は持ち点百点、それ以外の会場にいる全ての人には一点が与えられているんです。俺たちだって、投票する権利があるんです」

若者「よし、一、二の三で、票を入れよう」

助手A・B「はい」

20

同・舞台

ミンメイとジャミスの数字がなおも集計されずに表示されぬ状態である。

目を閉じるミンメイ。

ミンメイ「(心の声) ここまで残れただけでも充分だわ……」

余裕で、不敵な微笑さえも浮かべているジャミス。

一瞬後、ジャミスの数字が止まる。

声「あッ、決まった、決まりました！」

思わず立ち上がるジャミス。

自分が勝ったと信じ切って、両手を高々とあげようとする。

声「優勝は、エントリーNo.12、リン・ミンメイさんでーす」

ギョッと、後ろを振り向くジャミス。三票差で、ミンメイの数が勝っている。

ジャミス「(びっくりして) そ、そんな……バ、バカな……(蒼白となる)」

ガックリと椅子に座るジャミス。

声「おめでとう。栄光のアイドル、ミス・マクロス！　おめでとう、リン・ミンメイ！」

はッと、目を開けるミンメイ。
ミンメイ「(初めて気がつき) 私が……まさか!?」
ミンメイの頭に審査員席から歩み寄ったグローバルが王冠を被せる。
グローバル「おめでとう、ミンメイさん」
呆然とたたずむミンメイ。
うわ〜ッと、嵐の如くどよめく会場。
バラバラッと、記者団やカメラマンがステージに駆け上がる。
我先に、ミンメイを撮影するカメラマンたち。
町会長「やったで、ミンメイちゃん!」
興奮して叫ぶ町会長。
フラッシュの焚かれた閃光の中で、晴れやかな笑顔を見せるミンメイ。
屈辱で歯噛みしているジャミス。

21 高級マンション・全景・夜

夜の静寂の中を大型高級車が走り来て、停車。
中から降り立つジャミス。
ジャミス「(興奮して) 誰なの?　裏切ったのは誰なのよ!?」

スタスタとエレベーターに歩いて行く。運転席から降り立つ中年紳士（ジャミスの事務所の社長）が追う。

社　長「待ちなさい、ジャミス、ジャミス」

22　同・エレベーター・中

乗り込むジャミス。

飛び込んで来る社長。

ジャミス「帰って！」

社　長「ジャミス！」

と、腕を摑む。

ジャミス「イヤ！」

腕を振りほどこうとする。

強引にジャミスの体を引きつける社長。

ジャミス「（もがいて）痛い、離して！」

グイッと抱き寄せる社長。

社　長「（優しい声で）誤算だ。これは想像を絶する大きな誤算だ。何かの間違いとしか考えられない」

ジャミス「（歯嚙みして）――」

社　長「どうしてこんな結果になったのか、私にも信じられん。ジャミス、許

して欲しい。この通りだ」
ジャミスの両腕を摑みつつ、頭を下げる社長。
ジャミス「（やや興奮が鎮まって）——」
エレベータが停止し、ドアが開く。

23 同・ジャミスの部屋

暗い部屋がパッと明るく輝く。
ジャミスが照明スイッチをつけたのだ。
豪華な家具、電器製品、ジャミスが熱唱している大ポスター、シャンデリア等がまぶしく輝いている。
三点セットのソファに、崩れるようにうずくまるジャミス。
社長「やはり、キミを審査員として出場させるべきだった。キミはマクロスーのアイドル・スターだ。ミス・マクロスに優勝させて、さらに人気を高めようともくろんだが、こんな裏目にでようとは——」
ジャミス「誰だって……」
社長「ん？」
ジャミス「誰だって、ベターよりもベストを望むものよ」
社長「その通りだ。ジャミス、この埋めあわせは必ずしよう。キミは歌唱力がある。演技力もすばらしい。なあに、リン・ミンメイなど、一時的に

はもてはやされるかもしれんが、タレント性はキミの方が数段上だ。気に病むことはない」

ジャミス「(屈辱感を抱いて)それ、なぐさめてるつもり？」

社　長「(眉をひそめて)——」

ジャミス「ミンメイは、若いわ」

社　長「えッ？　キミだってまだ二十二歳じゃないか」

ジャミス「……もう二十二歳よ。芸能界じゃ、オバンなのよ」

社　長「(言葉を失して)——」

ジャミス「私は、オバンよ——」

と、泣き崩れる。

歩み寄り、優しくジャミスを抱き寄せる社長。

社　長「バカだな。女の魅力は三十路を過ぎてからだ。キミはこれからじゃないか。ほら、涙を拭いて」

ジャミスの目からこぼれる涙を指で拭ってやる社長。

社　長「初めて涙をこぼした顔を見せてもらった。可愛いよ(と微笑する)」

ジャミス「ボス……」

うるんだ瞳で社長を見る。

社　長「ん？」

と微笑しつつジャミスの顎を指で持ち上げる。

ジャミス「私、ホントは怖いの」
社　長「何が？」
ジャミス「年のことだけじゃないのよ。ミンメイって娘、磨けば磨くほどキラキラと輝く才能を秘めているような気がするの」
社　長「――」
ジャミス「お願い。今のうちに芽を摘み取って！」
社　長「もうその事は忘れよう。人生は長い。が――二人でこうしていられる夜は短いのだ」
ジャミスの唇に唇を合わせようとする社長。
ジャミス「（顔をそむけて）今夜は嫌！」
社　長「――」
わずかに開いた窓から夜風が吹き込んで来て、隣室を仕切ったピンク色のカーテンを揺らしている。

24 マクロス・外景展望室（注8）

独りで宇宙空間を見つめているミンメイ。
窓の外には、流星群か？　美しい光が群れになって流れて来る。
ミンメイ「私が優勝しちゃうなんて夢みたい……。これからどうなるのかな、私？」

25

宇宙空間

ミンメイが見た光の流れは、枢軸軍の偵察艇と戦って破壊された（注9）輝のバトロイドを牽引するバルキリー部隊の識別灯だ。
壊れたバトロイドに乗った輝がうつろな顔でつぶやく。

輝「ミンメイが、ミス・マクロスか――」

26

マクロス・外景展望室

宇宙空間をじっと見つめてたたずむミンメイ。

つづく

注1　MBS・大ホール――マクロス艦体中央ブロックに作られた（艦内）屋外ホール。観客一万二千人を収容する。
注2　定期券――決まった恋人（肉体関係がある）。
注3　パート――アパートの短縮語。
注4　扇子――結婚（末広がりの意味から使われる）。
注5　独り遊び――小人閑居して不善を成す。
注6　ナフタリン――臭くて虫も寄りつかぬほどの嫌な奴。
注7　呼び出される輝――コンテスト当日、輝は本来、当直に当たり、マクロス左舷の空母プロメテウス艦内でスクランブル発進に備えて待機していなければならなかった。

注8　このあと、ゼントラーディ軍偵察艇の迎撃を命じられた輝は、自分のバルキリーに、無断でアーマード装備を装着して出撃した（TVシリーズ＃9話参照）。

注9　マクロス・外景展望室――マクロスの艦体外壁部に張り出すように作られた巨人用（マクロスのもとの持ち主であった監察軍の巨人達）の観測窓（オーバーテクノロジーを利用した透明構造材で作られているため、一般的な金属よりも、はるかに強度がある）を利用した、宇宙空間の見える展望室。

偵察艇との戦闘――ゼントラーディ軍は、マクロス艦内から流れて来る微弱な中波通信（ミス・マクロス・コンテストの中継）を調査すべく、偵察艇を送り出し、輝は、この偵察艇の撃破に成功するが、その爆発に巻き込まれ自分のバトロイドも大破した。

偵察艇の乗員達は救命カプセルで脱出し、ブリタイ艦へと帰還。彼らの見たコンテスト中継の内容は、ブリタイ司令やエキセドル記録参謀の頭を混乱させた（TVシリーズ＃9・10話参照）。

EXTRA STORY
Part.3
PINK LADY



illustrated by
Haruhiko Mikimoto

by Noboru
Ishiguro

1　宇宙空間

航行するマクロス

2　マクロス艦内・聖バレンシア女子学院・ミンメイの教室

ガヤガヤとうるさい授業風景。

先　生「昨日のテストの結果は、ありゃなんだ。六十点以上は三分の一しかおらん。私は担任として恥ずかしい」

一向に静かにならない生徒達。

先　生「(ついに我慢の限界を越え、机をバーンと叩く) 真面目に聴かんか！」

一瞬にしてシーンと静まり返る教室。

先　生「大体、ふだんそんな態度だから、テストの成績もこのていたらくなんだ！」

なおも先生のお説教はつづく。

頭をたれて聴いている生徒たちの中で一人落ち着かぬミンメイ。

隣のセイコが気がつき、

セイコ「(小声で) ミンメイ、どうしたの」

ミンメイ、メモを書いて見せる。

『P.M.3:00、MBS、トワイライト・シティ（注1）、インタビュー』

セイコ「(目を丸くして) もう二時半よ、先生には言ってあるの?」
うなずくミンメイ。
セイコ「あの先生、怒るとお説教長くなるからね。私にまかせて。(手を上げて) 先生!」
立ち上がるセイコ。
セイコ「ミンメイが気分悪いって言っています。衛生室へ連れて行っていいですか?」
先生の返事も待たず、言いながらミンメイの手を引き、教室を出てしまう。

3　同・廊下

二人、出て来る。
ミンメイ「ありがとう、助かったわ」
セイコ「今ならバスに乗れば充分間に合うわよ。チョコ・パフェ・モンスターね」
ミンメイ「わかってるわよ、バイバイ!」
外へ出ていくミンメイ。見送るセイコ。

4　MBS・スタジオ

ショーのセットが組まれている。
とびこんでくるミンメイ。

ミンメイ「おはようございま～す。遅れてすいませーん！」

A・D「おはよう、ミンメイちゃん。あ、君に面会の人が待ってるよ」

五十がらみの頭の禿げ上がった大男が、傲慢そうにステッキをついて近づく。
その部下らしい若い男もついて来て、

男「君かね、リン・ミンメイという娘は？」

ミンメイ「ハイ？」

男「こちらはインペリアル・レコード（注2）の大プロデューサー、ラボンスキーさんだ」

ミンメイ「えっ？　あのジャミス・メリンさんを歌手として売り出した、あのプロデューサーのラボンスキーさん？」

名前を知られていたのでまんざらでもないラボンスキー。

ラボンスキー「名前を知ってもらえたとは光栄じゃよ」

ミンメイ「そのラボンスキーさんが何のご用で？……私に……（用件の見当がついて、はッとなる）」

男「ラボンスキーさんは、君が歌手を志望している事をお知りになって、ひとつ艦内最大手の我がインペリアル・レコードから、新人歌手として

大々的に売り出そうと決めたのだよ」

ミンメイ「(目を輝かす) ウワーッ!! 本当ですか? あのインペリアルから? ウワーッ、夢みたい! ありがとうございます! ラボンスキーさん!」

いつの間にか傍に来ているテレビのプロデューサー。

プロデューサー「よかったね、ミンメイちゃん。憧(あこが)れの歌手になれるんだよ」

ミンメイ「ウワーオ、信じられない!」

フロア・ディレクターが叫ぶ。

フロア・ディレクター「ミンメイさーん。ちょっとカメラ・テスト、お願いします!」

ミンメイ「ハーイ」

ピョコンとラボンスキーに頭を下げると、セットの方に走っていく。

それを見送るラボンスキーのいやらしげな目つき。

5　艦内市街地・裏通り

ゴミ箱をあさるノラ猫などの姿。

6　古びたビル

そのひとつの窓に『ビッグ・スター・レコード』と大書してあ

る。カメラ、そこにT・U（注3）。

7 同・室内

二人の男が所在なげに椅子に座ったり、ソファに寝ころがって煙草をふかしながらテレビを見ている。

テレビの司会者「今日は特別ゲストとして、一夜にして大人気者になりましたシンデレラ・ガール、リン・ミンメイさんをお招きしております」

カメラ、ミンメイを大写し。

ミンメイ「こんにちは」

司会者「今、ミンメイちゃんは高校生でしたね？」

ミンメイ「ええ！　この頃お仕事が忙しくて学校にあまり行けないのがつらいんですけど」

司会者「学校は好き？」

ミンメイ「大好き、だって仲の良いお友達もいっぱいいるし。でも今日は先生にお説教されてるところをエスケープして来たんですよ。明日、先生にあやまらなくちゃ」

ちょっと首をすくめ、舌を出す。

テレビを食い入るように見つめていた男、芦田らん山（三十八）が身を乗り出して、

芦　田「……いける。この娘はいけるぞ！　この声質、このパーソナリティ。この娘は絶対歌手になったら、大きく伸びるぞ。賭けてもいい。俺にプロデュースさせてくれれば、大歌手に育ててみせる自信がある！」
男（部下）「でも、このリン・ミンメイには、もうすでにインペリアル・レコードの手が伸びてるってウワサよ、部長」
芦　田「部長ってのはもう止せって言ったろう。俺はもうあのクソいまいましいインペリアルを辞めて来たんだ」
部　下「ごめんなさい、社長。でもこの娘をどうする事も出来ないわよ、今の我が社の力では」
芦　田「インペリアルこそ過去の遺産で食ってるようなもんだ。社長はすっかりジャミスの言いなりだし、プロデューサーのラボンスキーの女ぐせの悪さはお前もよく知ってるだろう。あんなとこへこの娘を入れたら売れるものも売れなくなる」
部　下「でも、うちみたいにオケラの会社で何をどうやろうってんです？」
芦　田「とりあえず自分から動かねば何事も動かんよ。ようし、どうせインペリアルとけんかして追ん出た身だ、やるだけやってだめでもともと。うまくすりゃ我がビッグ・スター専属第一号だ！」
部　下「奇跡が起きればね」
テレビのミンメイをみつめる芦田の瞳が燃えている。

8

MBS・スタジオ

セットでインタビューのやりとりをするミンメイ。
それをじっと見るラボンスキー、傍らの部下に耳打ち、
ラボンスキー「……いいな、いつもの所だ、わかってるな！」
部　下「（薄笑い）はい、万事心得ております。おまかせ下さい」
ラボンスキー、ニヤリと笑ってスタジオを去る。
見送る部下、そこへフロア・ディレクター通りかかり、部下と顔を見合わせる。
フロア・ディレクター「かわいそうに」
部下、肩をすくめる。
ラボンスキーと入れ違いに軍服の男がスタジオに入ってくる。
兵　士「（敬礼して）リン・ミンメイさんはいらっしゃいますか？　軍本部からお迎えにまいりました！」
と大声で言う。あわてて兵士の口を押えるフロア・ディレクター。
フロア・ディレクター「シッ！　今、本番です」

9

街のメイン通り

サイレンの音と共に他の車を追い抜いていく軍の乗用車。
後ろの席にはミンメイがチョコンと座っている。

ミンメイ「すごーい、私、えらくなっちゃったみたい」

10 艦長の迎賓室（げいひんしつ）

グローバル、ミンメイにたすきをかけてやる。『一日艦長』と書いてある。さらに艦長の帽子をかぶせてやる（あらかじめミンメイの頭に合わせて作った特別製）。

グローバル「（ニコニコと）それでは、リン・ミンメイさん、艦長の仕事をくれぐれもよろしく」

ミンメイ「ハイ！」

可愛く敬礼。返礼するグローバル。記者達のカメラのフラッシュが光る。

11 ブリッジ

ミサや三人組と交歓するミンメイ。

12 一般兵士用食堂

兵士達と飲み物を飲むミンメイ。

13 格納庫

バルキリーの前に立って軍の入隊勧誘ポスターの撮影をするミンメイ。一般兵士達も自分のカメラで撮影したりしている。

14 格納庫への通路

パトロールを終えた輝、マックス、柿崎が歩いてくる。軍用ジープが後から追って来て輝の脇にストップ。運転しているのはフォッカーである。

フォッカー「三人そろってなにシケた面して歩いてるんだ」
輝「そういう先輩こそ、ばかにうかれてますね」
フォッカー「ヘッヘヘ、ちょっとした臨時収入が入ってな、今日は大金持さ」
柿崎「(うれしそうに)先輩、ごちそうさま」
マックス「一体、何をなすったんです？」
フォッカー「ヘッヘッヘ(笑って答えず)、おお、そうだ。今夜四人で色街へ繰り出すか」
マックス「本当ですか」
柿崎「ヒエエッ、夢みたい。よかったですね、隊長！」
輝「……俺……(うかない顔)」

フォッカー「輝、お前もつき合うだろ。ミンメイもいいけど、男には男のつき合いがある」
マックス「そうですよ、隊長も行かなきゃつまらない」
柿　崎「まったくつき合いが悪いんだから」
輝　「んー、でも俺、どうもそういう所苦手だから……」
四人、話しながら格納庫まで来る。

15　格納庫

ミンメイを中心に撮影会が続けられている。
群集の中にいる輝を目ざとく見つけるミンメイ、手を振って、
ミンメイ「輝！」
まわりの兵士が一斉に輝の方を見る。
輝　「(ちょっと赤くなり) ヤ、ヤァ」
ミンメイ「(輝に近づき) すごくいい事があるの。後で会える？」
輝　「う……うん、いいよ」
ミンメイ「じゃ、七時に例のとこでね」
言って戻っていくミンメイ。
柿　崎「ヒエーエ、あてつけてくれますねェ、隊長」
マックス「ぼくも見習わねば」

フォッカー「ヤレヤレ、これじゃ輝は色街どこじゃねえな。しようがない、俺達三人だけで繰り出そうぜ」
マックス、柿崎「やったー！」
輝は心なしかホッとしている。

16 喫茶店〝バリエーション〟店内

客が数組、ミンメイがテーブルで待っている所へ輝がくる。

輝「ごめん、待った？」
ミンメイ「私も今来たとこ。(ウェイトレスが水を運んでくる)私、アイリッシュ」
輝「ホットひとつ。(ウェイトレス去り、ミンメイの方に向き)さっきはびっくりしちゃったよ」
ミンメイ「アハッ、一日艦長、来週は一日消防署長さんやるんだから」
輝「ミス・マクロス以来えらい変わりようだなァ」
輝にはミンメイの人気がうとましい。
ミンメイ「ネ、ネ、ミス・マクロスはちゃんと見てくれた？」
輝「う……うん、バルキリーの中で見てた」
ミンメイ「？」
輝「(あわてて)忙しかったんだ、あの時とっても。それより、何？　うれしい事って」

ミンメイ「あのね、今日インペリアル・レコードの人が来てね、歌手にならないかって」
輝「えーッ、本当。じゃプロの歌手だ」
ミンメイ「そうなの、すごいでしょう」
輝「おめでとう、よかったね。君なら一発で人気歌手だ」
ミンメイ「うん、ミンメイがんばる」
輝「でも芸能界で生きていくって大変なんだろう」
ミンメイ「きびしい実力の世界だものね」
輝「ますます忙しくなっちゃうね」
輝は、ミンメイがもうひとつ遠くの世界へ行ってしまうような淋(さび)しさを覚える。
ミンメイ「今日だって、これからまた打ち合わせなのよ。大変なんだから」
輝「えーっ、これから？」
ミンメイ「ああいう世界って夜更かしの人が多いみたい。相手のプロデューサーさんも忙しい人だから」
輝「こんな夜遅く大丈夫なの？」
ミンメイ「大丈夫よ。やーね、みんなとっても親切なんだから」

17	
中華料理店〝娘々(にゃんにゃん)〟店内	

ミンメイの伯父、伯母と話す芦田。

芦　田「そうですか。インペリアルが話を持って来ましたか」

伯　父「ええ、ミンメイも大変喜んでおりまして」

芦　田「そうでしょう、インペリアルといえば艦内最大手のレコード会社だ」

伯　母「あの子は歌手になるのが夢でしたから、大はりきりですよ」

芦　田「いや、よくわかりました。結局は人間同士の問題です。でも、歌手を育てるのは会社ではありませんよ。私はミンメイさんに惚(ほ)れこんでいます。またお邪魔させてもらうつもりですのでよろしく」

18　〃娘々〃前の通り

芦田が店から出て来て、歩き去る。

その後ろ姿を見送る一人の怪しげな男、小型無線機をとり出し、どこかへ報告する（ラボンスキーの部下とは違います。キャラを区別して作画して下さい）。

中　C　M

19

ホテル〝センテニアル〟ロビー（夜）

ラボンスキーがニヤリと笑い、椅子から立ち上がる。
よそゆきの服に着替えたミンメイがおずおずと入って来たのだ。

ラボンスキー「ミンメイ、すごくきれいだよ」
ミンメイ「あの、他の方は？」
ラボンスキー「なに、ちょっと用があってな。心配ない、後で来るからな。それより腹がすいてるだろう。何か食べに行こうか」
ミンメイ「え……ええ」
彼女は一瞬不審そうな顔をするが、
ラボンスキー「ミンメイちゃんは何が好きかな？　最高級のビフテキを食べさせるところがあるんだが」
ミンメイ「うわー、私、ステーキ大好き！」
食べ物に目がくらむミンメイである。

20

色街通り

バー、キャバレー、ピンサロ、トルコ等々がケバケバしいネオンを並べたて、夜を知らない街である。
一軒のキャバレーからホステス達に送られて、よたり出てくるフ

オッカー、マックス、柿崎、いいご機嫌である。

柿　崎「ギャッハハハハ！　あのよしえって子、ぞっとするような美人でしたね」

マックス「あれが？　ぼくは柿崎くんの美意識をうたぐっちゃうなァ」

フォッカー「ようし！　じゃ、次は絶世の美女ぞろいのトルコへ行こうぜ！」

マックス、柿崎、歓声を上げながら夜の町を練り歩く。

21　高級ナイトクラブ〝プロメテウス〟

趣味の良い店内に静かな音楽が流れ、キャンドル・ライトに照らされて何組かのアベックが談笑している。大人の雰囲気。

ラボンスキーに連れられて、ソファに座るミンメイ。キョロキョロ見廻して、

ミンメイ「すごーい！　ゴーカ。こんな所、映画でしか観たことなかったわ」

ラボンスキー「ここはわしの行きつけの店だ。遠慮することはない。好きなものをお飲み」

ミンメイ「本当にいいんですか。じゃァ、チョコ・パフェ・モンスターなんて、ここにはないかしら」

ラボンスキー「いやいや、ここではそういうものは飲まないの。じゃ、わしが決めてあげよう。そうだな。（ボーイに）彼女にピンク・レディ、わしは

いつもの奴を」
ボーイ「かしこまりました」
と去る。
ミンメイ「ピンク・レディって何ですか？」
ラボンスキー「いいから飲んでごらん。女性向きの飲み物だ、おいしいよ」
ボーイが飲み物を運んで来る。
ラボンスキー「(グラスを手にして) では、未来の大歌手、リン・ミンメイの成功にカンパイだ」
ところがミンメイは、目の前に置かれたピンクの飲み物に注意が集中している。
ミンメイ「これがピンク・レディっていうんですか？　とってもきれい」
ラボンスキー「一口飲んでごらん」
ミンメイ、ちょっと飲み、
ミンメイ「おいしい！」
と、一息にあけてしまう。
ミンメイ「とってもおいしい！　こんなの初めて。すいません、もう一杯いただけます？」
ラボンスキー「おお、かまわんとも、かまわんとも。(ボーイに) おい、ピンク・レディを追加だ」

ボーイ、追加を持ってくる。
また一息に飲んでしまうミンメイ。
ミンメイ「フーッ、すっごくおいしい！」
ラボンスキー「好きなだけお飲み、いい気持ちになるよ」
ニンマリ笑うラボンスキーの目が、勝利の喜びに光る。

22 インペリアル・レコード・社長の部室

本社の最上階から夜の街が美しい。社長が書類を調べている。そこへノックもなくドアを開けて飛び込んでくるジャミス・メリン。血相が変わっている。
社　長「何事だね、ジャミス？」
ジャミス「あ、あ、あなたって人は！　よ、よくも、この人でなし！」
叫んでそこに泣き伏してしまう。
社　長「(困惑して) どうしたのかね、ジャミス。だれかに意地悪でもされたのかね」
ジャミス「(金切り声で) よくもそんなしらじらしい事言えるわね！」
社　長「わしが何をしたと言うんだ？」
ジャミス「ミンメイよ！　あの小娘よ！　あの娘をこのインペリアルの専属にするんですって!?」

社　長「ああ、その件ならさっき専務のラボンスキーから報告を受けたよ。それが何か気にさわったのかね？」
ジャミス「あなたって人は私の気持ちなんか、これっぽっちもわかってくれようとしないのね！　わ、わたしがあんな恥辱を受けたっていうのに、その張本人のあの小娘をうちの会社に入れて、売り出してまた私に恥をかかせようというの！」
社　長「そんなに気になるのか、あんな子供が」
ジャミス「私にはわかるのよ。あの娘には人にはない大変な才能が隠されてるわ。まだ本人も気づいてないようだけど、……あの娘が歌手になったら、必ず人気スターになってしまうわ。それはどんな邪魔をしても、止められはしない。私にはよーくわかるの。でも、このインペリアルのトップ歌手はわたしよ！　ジャミス・メリンなのよ！」
社　長「ジャミス、君はきっと疲れているんだ。そう興奮しないで、一杯やるかね」

ジャミス、いきなり窓際に走り出て、バルコニーから身を乗り出す。

ジャミス「ボス、あの娘を、リン・ミンメイを採用するんなら、わたし今すぐここから飛び降りるわ！」
社　長「ジャミス……」

ジャミス「……あなた……あなたを愛しているわ。けど、これは本気よ」
ジャミスのギラギラする目から、涙が幾筋も伝い落ちる。
社　長「……ジャミス……」

23

ナイトクラブ〝プロメテウス〟

真っ赤な顔をして静かになってしまったミンメイ。頃合いやよしと彼女の肩に手をかけるラボンスキー。
ラボンスキー「ミンメイちゃん、ずい分酔ったようだね。もし歩けないようなら、近くのホテルに部室をとってあるから、少し休んでいきなさい」
ミンメイ、黙ってコクリとうなずく。
ラボンスキー「へへへへ……」
いやらしくミンメイの腰に手をまわして立たせる。フラフラと立つミンメイ。

24

夜の色街

いいご機嫌のフォッカーらがやってくる。
柿　崎「ああ、いい気分だ！　スカッとすらァ。ン、もうまったく、うちの隊長も損な性分だなァ！」
マックス「隊長は年の割には純情だからね」

　フォッカーが急に足をとめたので、後の二人、ぶつかり、こける。
フォッカー「おい、あのアベック見てみろ。ミンメイちゃんじゃねえか？」
柿　崎「まさかァ」
マックス「こんな所で隊長とデートですか」
　と、のぞく。
　ラボンスキーに抱かれるようにして、フラフラ歩くミンメイ。
　尾行をする三人。
　と突然、踊り出すミンメイ。
ミンメイ「ワーイ、ワーイ！」
　あわてて押えつけようとする。
ラボンスキー「こ、これ、ミンメイ！　どうしたんだ？　ミンメイちゃん！」
　陽性のヨッパライと化したミンメイは踊りをやめない。
マックス「ミ、ミンメイちゃんが悲鳴をあげています！」
柿　崎「ミンメイになにしてやがるんだ！　あの男は」
フォッカー「行け！　ミンメイを救い出すんだ！」
　駆けよって行く三人。
　ラボンスキーのえり首をつかみ、一発お見舞いするフォッカー。
　倒れたラボンスキー、起き上がり、

ラボンスキー「な、なに者だ！」
フォッカー「手前こそミンメイちゃんに何をしようとしてたんだ！」
ラボンスキー「お前らに関係ない話だ」
柿　崎「このスケベ野郎！」
　と、蹴るわ殴るわ、ラボンスキーをクッチャン、クッチャンにしてしまう。
　マックスに抱きかかえられて、
ミンメイ「そーれ！　やっちゃえー！　かっこいい！　うわー!!」
　途端に全身の力がぬけてしまう。
マックス「(あわてて) ミンメイちゃん？」
　のぞき込むが、すでにミンメイはスヤスヤと寝てしまっている。

25

〃娘々〃店内

　フォッカー達三人しかいない。
　階上からミンメイを寝室に運び入れた伯父と伯母が戻ってくる。
伯　母「まったく、フォッカーさん達が見つけてくれなかったらどうなっていたやら」
伯　父「ご迷惑をかけてしまって」
フォッカー「いやいや、本人は生まれてはじめて酒を飲んだので、飲りすごし

たんでしょう。最初はだれでもあることです」

伯　父「それにしても、まだホンの子供なのに酒を飲ませるとは」

伯　母「私達も油断していたんですよ。これからはもっと気をつけねば」

フォッカー「そうですとも、世の中誘惑だらけですからね。それにこの事は輝には知らせない方がいいでしょう。もちろん本人も何事が起こったかわかってないでしょうしね。（マックス、柿崎に向かい）お前らも今夜の一件は秘密だぞ。いいな！」

マックス「わかってます」

柿　崎「じゃア、口止め料にもう一軒……」

フォッカー「バカ」

柿崎を小突く。笑う一同。

26 高級マンション・ジャミスの寝室（翌日）

ガウンをはおり、ベッドに腰かけた社長が電話をしている。

社　長「……ラボンスキーか、わしだ。……実は例のリン・ミンメイの一件だがね、あれはなしだ。あの子は見込みはないよ、わしはそう思う。かわりの娘を見つけてくれ」

話す社長にしなだれかかるネグリジェ姿のジャミス、満足そうな表情。

27

インペリアル・レコード社内

受話器を持つラボンスキー、顔のあちこちがはれ上がっている。

ラボンスキー「……私もそう思っておりました。ハッ、承知しました」

受話器を置き、

ラボンスキー「イテテ……」

28

〃娘々〃内・ミンメイの部屋

ドアが開いて伯母が入ってくる。

額にタオルをあてがって寝ているミンメイを心配そうにのぞきこみ、

伯　母「大丈夫かい？　ミンメイ」

ミンメイ「(顔をしかめ) 大きな声を出さないでェ、頭がガンガンする」

伯　母「今、電話でね、インペリアル・レコードから採用取り消しを言って来たわ」

ミンメイ「もう何でもいいから、今は寝かせといて、お願い」

と、フトンにもぐり込む。

29

ビッグ・スター社内

電話をかけている。

芦　田「ハイ、じゃ、リン・ミンメイさんは我が社と契約をしてくれるんですね。ありがとうございます。すぐ参ります」

受話器を置き、部下に、

芦　田「奇跡が起こった！　リン・ミンメイは本当に我が社専属第一号になったぞ！」

部　下「信じられないですヨ。さしあたってボクがミンメイちゃんのマネジャーね、タハハッ」

と、ソファにひっくり返る。

芦田、改まった口調で、傍らに立つ男に向かい、

芦　田「貴方のおかげです。ミンメイは必ずビッグ・スターに育て上げます」

満足そうにうなずく男、それは前日芦田を見張っていた男である。

30　兵員宿舎

出てくる輝とかち合うマックス、柿崎。

マックス「おはようございます、隊長」

輝「やあ、夕べはどうだった？」

柿　崎「いやァ、どうだったたてなもんじゃない、まさに酒池肉林、ガハハハハ

輝　ハ。おまけに特別アトラクションまでついてて」
　「特別アトラクション？」
マックス「な、なんでもありませんよ。柿崎くん、行こ、行こ」
柿崎「ヒミツ、ヒミツ、ウプププププ」
　　呆気(あっけ)にとられた輝を残して去る二人。
N　「昨夜どんな事が起きたか、輝は何も知らない。もちろんミンメイも。
　そしてリン・ミンメイの歌手誕生の裏で、どんな人間ドラマが演じられたか、知る人は永久にいないだろう」

つづく

注1　トワイライト・シティ——MBSテレビで放映中のヤング向け人気番組。マクロス艦内のタウン情報等を紹介していく視聴者参加型の番組。
注2　レコード——西暦二〇〇九年当時のレコードには、オーソドックスな六チャンネルレーザーディスクから、マイクやスピーカーを全く使用せずに、音響だけでなく、歌手や演奏者の動きによって生ずる空間のひずみを直接検出・再現する、最新型の空間振動ディスクまで、様々なタイプが存在する。
注3　T・U(トラックアップ)——カメラが被写体に近づいていく事。写し出される画像は拡大されていく。

EXTRA STORY

Part.4

OPERATION SCANDAL



illustrated by
Haruhiko Mikimot

by Kenichi
Matsuzaki

1 聖バレンシア女子学院

終業のチャイムが鳴る。

2 同・ミンメイの教室

各人の机はコンピューター・ディスクのミニ版といった感じ。
帰り支度の女生徒達で雑然とした雰囲気。
その中でもソワソワと時計を気にするミンメイ。
セイコ、ミンメイに話しかける。

セイコ「ねえ、今度〝シャンタン〟で新しいメニューが入ったんだって」
アキナ「そうそう、行ってみない？」
ミンメイ「ごめん。その話、明日にして」
ミンメイ、教室から駆け出てゆく。
アキナ「この頃付合い悪くなっちゃったな、あいつ」
セイコ「仕方ないわよ。なにしろミス・マクロスだもんね」
アキナ「我々凡人とは身分が違うか」
セイコ「そ！　凡人はいつものクレープ屋で焼けクレープでもどう？」
アキナ「オエ！　お腹がクレープ焼けしそう」
と、キャラキャラかしましい。

3

同・校門

時計を気にしつつ走って来るミンメイ。

ミンメイ「あーん、地下鉄（注1）なんかに乗ってたんじゃ間に合わない」

足を止め、校門前の路左右をキョロキョロと見回す。

ミンメイ、タクシーの姿を認めパッと表情を明るくする。

ミンメイ「タクシー！」

タクシー、ミンメイの側にすべり込み、ドアを開く。

ミンメイ「右中央の三番までお願い」

ミンメイが乗るとタクシー、発車する。

4

タクシー

マクロス市街を走り抜けてゆく。

5

同・内

時間を気にするミンメイ。

ミンメイ（モノ）「そろそろ本気で休学の事考えなくっちゃ」

6

レッスン場のあるビル

シャレた感じの小ぢんまりとしたビルの前にミンメイを乗せたタクシーが止まる。
ミンメイ、タクシーを降り、ビルの中へ駆け込んでゆく。

7 同・内（入口近く）

マネジャー、待ち受けている。
ミンメイ「おはようございます」
マネジャー「ぎりぎりじゃない。先生、お待ちかねよ」
ミンメイ「ごめんなさーい」
マネジャー「それは先生に言って」
二人、廊下を歩いてゆく。
マネジャー「いい知らせがあるのよ」
ミンメイ「なあに？」
マネジャー「君のデビュー曲、出来たの」
ミンメイ「わあ、どんな!?」
マネジャー「お楽しみは後。それよりレッスンが先よ。地力をつけなくちゃ、この業界、生き残れないわよ」
ミンメイ「はーい」
二人、レッスン場のドアの前に来る。

マネジャー、ドアを開ける。
場内でピアノを弾いているケント先生。
マネジャー「お待たせしました！」

8　マクロス艦内・市街地

ジャミスが一人で歩いている。
しかし、一見してジャミスとわからないようにコートを羽織り、サングラスを掛け、頭もネット状の帽子をかぶり髪型を消している。

9　ビル内

ポンコツビルの前に来ると、ちょっと立ち止まり、ビルを見上げるような仕草をしてから中に入ってゆく。
階段を上って来るジャミスの前に『アーツ芸能』と記されたプレートが貼られている。
ジャミス、入ってゆく。

10　同・室内

某出版社の室内を彷彿させるように幾つかの机と床に所かまわず

紙や本が散らかっている。
その中でたった一人、煙草をくゆらしながら新聞を広げている男がいる。
まだ入って来たジャミスには気付いていない。
ジャミス「相変わらず汚いわね」
男（木田）、驚いたように新聞を下げる。
ジャミス、変装を解く。
木　田「こ、こりゃあ、お珍しい。大女優のご訪問とは」
ジャミス、ニコッとして、
ジャミス「今さらそんなお世辞言わなくてもいいわよ。ミス・マクロス・コンテストの件は知ってるでしょう」
木　田「どうしたんですか、ありゃ？　あんたの事だから根回ししてないはずがないし……」
ジャミス、ややヒステリックに答える。
ジャミス「もういいわよ、その事は。それよりちょっと手を借してもらいたいの」
木　田「へえ。そりゃおたくには苦しい時、助けてもらいましたからね。で、何をすればいいんで？」
ジャミスを窺（うかが）うような目つきをする。

ジャミス「ミス・マクロスに選ばれたリン・ミンメイっていう娘(こ)と二週間近く
も二人だけで閉じ込められてた（注2）軍のパイロット……ほら……あ
の」

名前が出ずにイラつく。

木　田「一条とかいう」

ジャミス「そう！　その一条でも二条でも、二人の関係を洗い出して欲しいの
よ。出来れば同棲してたっていうふうにね」

木　田「あたしも芸能レポーターの端くれですからね。ネタさえ面白きゃあ」

ジャミス「助けられた後だってその娘の家に住んでたっていうじゃない。何も
ない方がおかしいわ。うまくいったら報酬ははずむわよ」

木田、金の話を聞いて初めて顔を綻(ほころ)ばす。

木　田「やりましょう」

と手近の電話に手を伸ばす。

木　田「(電話に) 俺だ、メモ・ロボ二、三台都合つけてくれ。ん、至急な」

ジャミス、精力的に仕事を始めた木田を背にして、

ジャミス「じゃ、連絡待ってるわよ」

と、去ってゆく。

11　宇宙空間

12　星空の中を飛ぶバーミリオン小隊。

輝のバルキリー

輝「そろそろ交替の時間だ。マクロスへ帰るか？」

ディスプレイに柿崎が出る。

柿崎（オフ）「いいすねえ、そうしましょ。今日は獲物に出くわさなかったからバルバロイでうさ晴らすぞお」

輝「何が獲物だよ。いつもやられてるくせに」

柿崎（オフ）「何か？」

輝「いや何も」

柿崎（オフ）「あ、隊長もどうです、ご一緒に。可愛こちゃんいっぱいで。スカッとしますぜ」

輝「遠慮しとくよ」

＊

マックス「隊長、敵です！」

＊

輝「何!?」

ディスプレイに敵の表示。

＊

宇宙空間を移動する数個の光点。

＊

マックス「バトル・ポッドの編隊のようですね」

＊

輝「奴らもこっちに気付いたようだな。ち！　遅れちまうじゃないか」

柿崎（オフ）「何がですか？」

輝「何でもない。行くぞ！」

バーミリオン小隊、バンクをかけて敵編隊にからみ込んでゆく。

突進してくるポッドの編隊。

空戦が開始される（重要な意味のある戦闘ではないのでデュープで結構）。

13　プロメテウス・甲板

帰艦してくるバーミリオン小隊。

例によって被弾しているのは柿崎機のみ。

14　艦内・市街地の外れ

軍の艦内車輌、走って来て止まる。

輝が降り立つ。

輝　「ここまででいい。ありがとう」

　　軍用車輌、走り去る。

　　輝から少し離れたところでメモリー・ロボット（メモ・ロボ）が

　　ピョコンと頭を上に伸ばす。

　　（このメモ・ロボ、公園に出て来た出歯カメラに似ていますが、もっと高性能のタイプです）

　　走り出す輝。

　　その後を追うメモ・ロボ。

15　同・市街地

　　腕を組んで歩くフォッカーとクローディアのカップル。

　　対面方向から輝、走ってくる。

フォッカー「おい、輝じゃねえか」

輝　「あ、先輩」

　　輝、フォッカーの前で止まる。

　　息を切らせている。

フォッカー「何急いでんだ。勤務は終わったんだろ」

クローディア「はーん、察するところ誰かさんとデートかな」

輝　「いえ……あの」

フォッカー「だらしねえな、お前も。ちっとくらい相手を待たせとく男にな
　れ！　アチチチ！」
　　クローディアが手を背後に回してつねり上げている。
輝　「じゃあ俺、急ぎますから」
　　輝、走り去る。
　　間を置いてメモ・ロボがついてゆく。
フォッカー「ん？」
クローディア「どうしたの？」
フォッカー「あれは探偵やなんかがよく使うメモリー・ロボットだ。浮気の調
　査あたりにゃ便利な……」
クローディア「ふーん、あたしも借りようかな」
　　フォッカーに意味ありげにウインク。
フォッカー「ばか。冗談はさておき、今のは輝をつけてたみたいだったな」
クローディア「あの坊やが浮気？」
フォッカー「そんなこっちゃなくてな。まさかとは思うが。ちょっと待ってて
　くれ」
　　フォッカー、手近の公衆電話に入る。
フォッカー「防諜部のラディック中佐を頼む」

16 喫茶店〝エスペランサ〟

輝、入ってくる。
店内を見渡し、気が抜けたようになる。

輝「まだ来てないのか」

輝、一人で席につく。
（ウェイトレスや他の客の動きヨロシク）
窓越しにメモ・ロボが輝を覗（のぞ）いている。

17 レッスン場

ピアノに向かったケント、ミンメイに楽譜を手渡す。

ケント「さあ、今度はこれを見て、私が一回弾いてみるからね」

ミンメイ、壁の時計をチラと見上げる。

ミンメイ「あのう、もう終わりの時間じゃないんですか？」
ケント「なに言ってんの、君は。これからデビュー曲の練習やろうってのに」
ミンメイ「でも、何も聞いてなかったもんで」
ケント「デビュー曲発表まであまり間がないんだから。他に何かあってもそんなのはあと！　今日から特訓。いいね！」
ミンメイ「はい」

18　喫茶店〝エスペランサ〟

アホみたいに待っている輝。
いまだに覗いているメモ・ロボ。
輝、時計に目を走らせる。

輝「(ボソッと) 四時間か……もう来ないかもな」
気のない溜息を吐いて立ち上がり、レジを済ませて店外に出てゆく。

輝「これで何度目かなあ」
情けない顔。
輝の背に追い討ちをかけるように店員の声がする。

店員「毎度有難うございます!」

＊

外はもう暗い。
一人トボトボと歩く輝。
後を追うメモ・ロボ。

中　C　M

19

マクロス艦内・歓楽街（夜）

歩いて来る輝。
周りの様子に初めて気がついたように見回す。

輝「こんな所まで来ちゃったのか」

バーやキャバレーのイルミネーションが眩しい。

＊

先刻の柿崎のイメージ。

柿崎「可愛こちゃん、いっぱいで、スカッとしますぜ」

＊

迷ったような輝。
歓楽街を背景とした輝を撮り続けるメモ・ロボ。
（このへん、カット・バックかなんかで）

輝「やっぱり止めとこ。俺、未成年だもんな」

輝、首を振って独り言をつぶやき歩き出す。
ついてゆくメモ・ロボ。
と、そのまた後ろからもう一台、似たようなメモ・ロボが続いて追ってゆく。
最後尾のメモ・ロボにはなんと統合軍のマークが！

20

同・市街（夜）

〝娘々（にゃんにゃん）〟へと急ぐミンメイ。

ミンメイ「すっかり遅くなっちゃったわ」

ミンメイの後方からもメモ・ロボ。

そしてそのまた後ろから統合軍マークのメモ・ロボ。

ミンメイ、〝娘々〟へと入ってゆく。

ミンメイ「ただいまあ」

21

同・統合軍庁舎

さすがに市街とは雰囲気が違う。

前衛にデストロイドが警備。

門の前には銃を抱えた兵士が立っている。

フォッカー、門をくぐる。

警備兵、敬礼をし、フォッカーが答礼する。

22

同・庁舎内

フォッカー、防諜部（事務室）に入ってゆく。

デスクに向かって高級事務官（ラディック）が執務中。

その前に立つフォッカー。

フォッカー「いいかな？」

ラディック、顔を上げる。

ラディック「あ、ああ、いいとも。まあ掛けたまえ」

フォッカー「どうも」

すすめられた椅子に腰を下ろす。

フォッカー「例の方はどうでした？」

ラディック、ニヤリとする。

ラディック「君の心配は当たっていたよ。アーツ芸能という悪質なレポート屋がからんでいる」

フォッカー「芸能？　輝、いや一条少尉に関係があるとすれば、リン・ミンメイくらいしか思いつかないが」

ラディック「図星だ。メモ・ロボの線から手繰（たぐ）っていったら、例のミス・マクロスにも張り付いてたよ」

フォッカー「済みません、こんな個人的な事で防諜部の手を煩（わずら）わせるなんて」

ラディック「いや、立派な公務だよ。防諜部としてはどんなささいな変化でもキャッチ出来た方がいいんだ。君のような協力は助かる」

ラディック、意味深な笑いをフォッカーに投げかける。

23

〃娘々〃内・ミンメイの部屋

ミンメイ、自分のベッドに腰を落とす。

ミンメイ「はー、もうクタクタ」

時計は一時を回っている。

ミンメイ「わー、こんな時間!?　もう寝るしかないわね」

＊

〃娘々〃の前では統合軍マークのメモ・ロボがどうしようかという感じでウロウロ。

何かを察知したようにミンメイの部屋（二階です）の前でピタリとボディを停止させると、首（カメラ部）をグーッと伸ばす。

首だけを張り出しに固定して分離、ボディ部は路地に入ってゆく。

＊

ミンメイ、欠伸（あくび）をしながらパジャマに着替えはじめる（わ！　また浴場ライターと言われそうじゃ）。

ミンメイ、まったく気付かないでいるが、窓の外でメモ・ロボのカメラが見つめている。

24 統合軍庁舎

25 同・防諜部の一室

TVスタジオの調整室に似たスクリーンや操作パネルが部屋全体に並んでいる。

ミンメイを写し出すスクリーン前のパネルに張りついている防諜部員A。

普通の人なら喜びそうな画面を見ながら全くの無表情。

防諜部員（チーフ）、部員Aの背後に立つ。

チーフ「マークAはどうした？」

防諜部員A「マークAは兵員宿舎に戻りました」

チーフ、部員Aの隣の、同様にスクリーンを睨んでいる部員Bへ移る。

チーフ「どうだ？」

防諜部員B「は、工作班がマークC、Dへの発信器の取り付けに成功しました。これからは直接受信出来ます。マークCは巣に帰りました」

チーフ「ん、引き続き監視を続けろ」

防諜部員B「イエッサー」
　全体的に明るいマクロスの中では特異な、諜報部門の暗いムードが漂う。

26　『アーツ芸能』のあるビル

27　同・一室

　防諜部のそれより遥(はる)かに貧弱だが、一応ビジュアル系の機器が揃っている。
　木田と助手がそれを操作中。
　ジャミスが後方で所在なげに見物。
　木田の足下に二台のメモ・ロボが寄ってくる。
　木田、鵜飼いよろしくメモ・ロボから一枚ずつプレートを吐き出させる。
　プレートを機械に差し込む。
　複数のスクリーンにそれぞれ異なる生活状態の輝やミンメイが写し出される。

木　田「あたしなりに調べたんですがね。ご覧の通りあの二人、何もありませ

　　　　んや」
ジャミス「それじゃ困るのよ！」
木　田「まあまあ」
　　と、身振りで落ち着くように制する。
木　田「こいつは一種のコンピューター・ディスプレイですからね。こんな事
　　　も出来るんですよ」
　　パネルを操作。
　　すると、別々の画面にあった輝とミンメイが同一の画面に合成さ
　　れ、背景も全く違うものと入れ替わっている。
木　田「ね？」
ジャミス「これでどうしようというの？」
木　田「まだわかんないかな」
　　木田、ジレたように言う。
木　田「ここには二人の顔や体格・服装のデータが入ってるわけだから、実際
　　　にはなくても、二人にどんな事でもさせられるし、どんな場所だろうと
　　　再現出来るんですよ」
ジャミス「ふーん」
　　半信半疑である。
木　田「こんな事、低予算の映画だって使ってる技術ですぜ」

ジャミス「私、B級には出ないの」
木　田「これだ。ま、やってみりゃわかりますよ。例えばこれはピンクがかった映画の一シーンですがね」
スクリーンの一つに、それらしい画面が出る。
木　田「この女優と男優の顔を入れ替えて、体格も二人のデータに合わせると。（助手に）おい」
助　手「はい」
助手の手、木田より敏速にパネル上のスイッチや調節機の間を飛び交う。
と、中心のスクリーンに輝とミンメイに入れ替わった画像が出る。
木　田「ね？　で、背景もマクロスの中のどこかと替える。ホテルの一室とか……」
助手、同様の操作。
スクリーンでは、どう見ても輝とミンメイのアバンチュールという感じの画像が出来上がる。
木　田「これをプリント・アウトすれば出来上がりってわけで」
ポンとボタンを押すと、画面通りのえげつない写真が出てくる。
（この写真のあたりはとても筆力が満たないので、この手の得意な原画の

方にお任せする。ハハハ）

写真をつまんで見るジャミス。

ジャミス「ふん……。よくこんな恥ずかしいもの作れるわね」

木　田「そりゃ、商売ですからね」

ジャミス「でも、こんなものプロの目は誤魔化せないわよ」

木　田「それはそうですがね。雑誌で見るのは素人さんだし、嘘でもこういったスキャンダルが流れたタレントは、必ず潰れてますからね」

ジャミス「公表してしまえばこっちのもんね」

木　田「先手必勝ってね」

木田、下卑た笑いを漏らす。

ジャミス「その調子でお願いするわ」

ジャミス、毛皮のコートかなんかを翻して退場してゆく。

木　田「それじゃ、本作業にとりかかるとするか」

助手と二人で操作を始める。

＊

何枚も出来上がった写真。

ニタニタしている木田。

木　田「こんなもんでいいな。さて、仕上げだ」

電話の受話器をとって連絡先をプッシュ。

木　田「あ、どうも。アーツ芸能の木田ですがね。実はいいネタが……」
　とまで言った所で、横あいから伸び出た手が木田の腕を摑み、ねじ伏せるように受話器を置いて電話を切る。
声（チーフ）「そこまでにしてもらおうか」
　驚いたように首を曲げる木田。
木　田「だ、誰だ!?」
　防諜部のチーフが二人ほどの部下を連れて立っている。
　不気味なムードである。
助　手「鍵は掛けときましたが」
チーフ「生憎だが、あんな旧式のものは我々にはないも同然でね。さて悪巧みは中止してもらおうか」
木　田「な、何の権利があって。第一、あんたら、何者だ!?」
チーフ「統合軍防諜部……と言ってもかね」
　木田、おし黙る。
　チーフ、写真を手にする。
チーフ「こんなものを発表されては支障が出る」
　写真にライターで火を点ける。
チーフ「彼女には、これから戦火による民衆の不安を解消出来るほどの存在にまで成長してもらわねばならんのでね。良いイメージを崩されては困る

んだ」

木　田「だったら、ジャミスの方がてっとり早いじゃないか」

チーフ、軽蔑したように笑う。

チーフ「すれっからしはいかん。それは君も知っていると思うが」

木　田「軍がこんな事をして。……訴えてやる。この事も発表してやる！」

チーフ「ここで止めないというなら我々にも考えがある。紙がなければ印刷も出来まい。電気も電話回線も使えないとしたらどうするね。全ては軍が供給していたと思ったが」

木　田「う……」

チーフ「なんなら弾薬輸送ルートをこの前に通してやろうか。ふふ、万が一の事故が起こる可能性もあるな」

木　田「そ、そんな事が」

チーフ「出来んと思うか？　インペリアル・レコードに敵対した弱小のビッグ・スター・レコードが何故潰されないでいるか考えてみた事があるかね」

木　田「……も、もういい」

チーフ「聞きわけのいい事だ」

防諜部員達、踵(きびす)を返す。

彼らの姿が消えた後、ヘナヘナとくずおれる木田。

28
ある一室
豪華なマンションかホテルの一室といった感じ。
ウキウキ気分のジャミスが悪女っぽく煙草を一服ふかす。
そこへ電話。
モニターに現われる木田。
ジャミス「なあに、うまくいったの？」
明るい。
木田（オフ）「例の件は中止だ。なかった事にしてくれ」
ジャミス「どういう意味？」
木田（オフ）「とにかく止めだ！　悪い事は言わん、あんたもこれ以上動かん方が身のためだ。それじゃ」
そそくさと切る。
ジャミス「何よ、今ごろになって。バカにしてるわ！」
乱暴に自分の方の電話を切る。
が、ハタと何か感じたように動作を止める。（軍部とまでは考えが回らなくても、何か大きな力が動いたのかな？　といった所でしょう）

29
聖バレンシア女子学院

終業のチャイムが鳴る。

30 同・校門

走ってくるミンメイ。
路を見回す。
タクシーは見当たらない。
ミンメイ「あーん、間に合わない」
ミンメイに近寄る自家用車が一台。
止まってドアが開く。
ミンメイ「?」
車内からマネジャーが声を掛ける。
マネジャー「ミンメイちゃん、わたしよ。早く乗って!」
ミンメイ「わあ、マネジャーさん、助かったわ」
ミンメイが乗り込むと急ぎ走り去ってゆく。
N「ミンメイは、自分の身に何が起ころうとしていたのか、そしてどんな力が陰でうごめいていたのか知る由もなかった」

つ づ く

注1　地下鉄——もともと巨人用に作られたマクロス艦内では、巨人達の通路や部屋の部分に市街地を作り、その床下や天井裏が地下と呼ばれている。その巨大な通風ダクトや排水パイプを利用して、地下鉄が作られたわけである。

注2　二週間近くも二人だけで閉じ込められていた——マクロス進宙式当日、ゼントラーディ軍の戦闘ポッドに襲われたミンメイを救出した輝。彼らはふとした事から、マクロス艦内の無人区画に閉じ込められ、二週間にわたって、二人きりで艦内漂流生活を過ごした（ＴＶシリーズ＃4話参照）。

EXTRA STORY
Part.5
VIVA DEBUT



by
Hiroyuki
Hoshiyama

illustrated by
Haruhiko Mikimot

1

ケント音楽スタジオ・一室

作曲家ケント・フライアーのピアノ伴奏で、歌のレッスンを受けているミンメイ。

歌はデビュー曲――「私の彼はパイロット」。

ミンメイ、時間が気になるのか、歌いながら、壁の掛時計にチラチラ目を走らせる。

突然、ケントがキイをバンバン叩いて、

ケント「だめだ、だめだ！」

ミンメイ「すいません」

ケント「どうしたんだ、今日はまるでリズムに乗ってない」

椅子から立って、煙草に火をつける。

ケント「悩みごとでもあるのか」

ミンメイ「いえ、人を待たせたまんまなんです……。（キッパリと）もう一度お願いします！」

ケント「連絡を入れとき給え、レッスンはそれからだ……五分間休憩にする」

ミンメイ「ありがとうございます」

ペコンと頭を下げて、廊下にとびだしていく。

2

街中・噴水広場

ベンチで苛立（いらだ）っている輝。

電話ロボ「一条輝様、お電話が入っています」

七十センチくらいの移動電話ロボが、コールしながら現われる。

電話ロボ「一条輝様」

輝「(手を上げて) 僕だ！」

移動電話ロボが目の前に来て、

電話ロボ「一条輝様ですか」

輝「そうだ」

電話ロボ「お電話が入っています、どうぞ」

輝、モニターに設置されている受話器をつかむ。

モニターに、ミンメイが映って、

ミンメイ「ごめん、ごめん」

輝「どうしたんだよ、一時って約束じゃないか」

ミンメイ「歌のレッスンが急に入って抜けられなくなったのよ」

3

音楽スタジオ・廊下

テレビ電話に出ているミンメイ。

　モニターに映っている輝に、

ミンメイ「わかって。この電話する時間だって、やっと貰ったんだから」

輝　「すっぽかされるのはこれで五度目だよ……今日は一日君とゆっくり出来ると思ったのに」

ミンメイ「ごめん」

輝　「だんだん僕の手の届かない所へいっちゃうんだね」

ミンメイ「そんなことないって。デビューが近くなったから忙しいだけ……ん？」

　脇から手が伸びて、ミンメイの持つ受話器が奪い取られる。

ミンメイ「マネジャー？」

　オカマっぽいマネジャーが立っている。

マネジャー「（送話口を手の平で押えて）先生、怒ってるわよ……さ、すぐレッスンに戻って」

ミンメイ「は、はい」

　電話を気にしつつ、場を離れていく。

4

噴水広場・ベンチのところ

　怪訝顔の輝。

マネジャーが、モニターの中から、

マネジャー「一条君って……君ね」
輝「………」
マネジャー「あの子は大事なスターの卵なの……これからは馴れ馴れしく近付かないでちょうだい」
輝「そんな？」
マネジャー「それじゃなくても、ミンメイのデビューをつぶそうとする連中が、あんたとの妙な噂をデッチあげてるの」
輝「妙な噂……」
マネジャー「いいわね、あの子を想うなら、今後近付かないでちょうだい」
言って、画面から消える。
輝「ちょっと！　こっちは軍人。いつ死ぬかわからないんだ、逢いたい時逢ったたっていいじゃないか！」
電話ロボ「ご利用、ありがとうございました」
電話ロボが滑るように去っていく。
輝「……（見送る）」

5　艦内・市街地・通り

輝が元気なく歩く。
と、後方からクラクションが鳴って、柿崎・マックスの乗る車が

脇に滑り込んで来て止まる。
柿崎が窓から顔をだして、
柿　崎「隊長、乗って下さい！」
輝「(見て）俺は今日休暇だ」
柿　崎「緊急指令です……敵艦隊が急速接近中、投降せよと言って来たそうです」
輝「えっ？……それで」
柿　崎「敵の正確な動きを知るため、キャッツ・アイ（注1）をとばすから護衛せよとのことです」
マックス「急いで下さい」
輝、頷（うなず）いて後部席に乗り込む。
同時に、車が発進していく。

6 走る車の中

運転するマックスが、室内ミラーをチラッと見て、
マックス「どうしたんです……さえない顔して歩いてましたよ」
輝「別に……なんでもない」
柿　崎「見ろ！　ミンメイさんだ……いよいよ、デビューだぞ〜ォ」
輝、視線を追って窓の外に目をやる。

7　ビッグ・スター・レコード社

ビルの屋上からスルスル下りて来たミンメイの大パネル写真が、ビル正面の壁面に固定される。

「もうちょい下げて〜！　よう〜し！」

地上から社員が声をかける。

8　走る車の中

窓の外——ビッグ・スター・レコード社のビルがみるみる遠ざかっていく。

輝「…………」

体をひねったまま、ジッと見ている。

＊

車が遠ざかって消えていく。

9　軍施設内・喫茶室（二日後）

コーヒー・カップを両手で包み、座っているクローディア。

入口からフォッカーが勢いよく駆け込んで来て、クローディアの向かいに座る。

フォッカー「どうだった、輝たちの消息はつかめたか」
クローディア「(首を横に振って) まだ何の連絡も」
フォッカー「そんな？　輝たちが早瀬君の乗るキャッツ・アイを護衛して、マクロスを出てから、もう二日だぞ」
クローディア「(沈痛に) 口にこそださないけど、艦長はもう駄目じゃないかと思い始めてるわ」
フォッカー「じゃ、戦死したと」
クローディア「そうは思いたくはないけど……敵艦隊と遭遇したという交信を最後に連絡が途絶えたとなれば、艦長だって……」
フォッカー「(心の声) 輝……」
宙の一点に視線を投げる。

10　艦内・商店街・通り

ワイワイおしゃべりしながら歩いてくるミンメイとクラスメートのアキナ、セイコ (私服)。
セイコ「(はずんで) デビューまであと十日ね。すごいわ、歌手になるなんて……今のうちにサインしといてもらおうかな」
ミンメイ「やだァ、そんな」
アキナ「有名になったからって、道で逢った時、知らんぷりはなしよ」

ミンメイ「変わらないって、私はただ歌が好きなだけ。……？」

　　立ち止まる。

　視線の先――〝娘々〟の前にフォッカーが立っている。

ミンメイ「フォッカー少佐？」

フォッカー「やあ」

　　ミンメイが駆け寄っていく。

ミンメイ「輝は一緒じゃないの？」

フォッカー「それが……（改まって）落ち着いて聞いてくれ。輝の奴、戻ってこないんだ……」

ミンメイ「戻ってこないって？」

フォッカー「偵察機の護衛に出たまま、行方不明になってな……」

ミンメイ「そんな!?」

フォッカー「いや、その……まだ死んだって決まったわけじゃないんだ」

ミンメイ「（ショックで）聞きたくないわ、そんな話」

　　ダッと駆け去っていく。

アキナ「ミンメイ……？」

セイコ「どうしたのォ！」

　　追おうとするセイコとアキナに、

フォッカー「そっとしといてやってくれ」

二人、怪訝顔で見交わす（TVシリーズ＃11話よりデュープ）。

11
同・高台・展望公園

イヤイヤをするようにして駆け込んで来たミンメイが、橋の手すりに手を当てて、宙を仰ぐ。

ミンメイ「うそよね、死んでなんかいないわよね……輝、生きて帰って来て……そして私のデビューする姿を見て……待ってるわ」

ケント「よし、もう一度、初めから！」

オフから、作曲家・ケントの厳しい声が突然入って……。

12
ビッグ・スター・レコード社内・録音スタジオ

ヘッド・フォンをつけたミンメイが、マイクの前に立っている。
ガラス一枚隔てた向こう側に、レコーディング・スタッフの顔が見える。
中央にケントの姿。
そのケントの声がスピーカーから流れてくる。

声「二小節目の頭で半音下がるから気をつけて」

ミンメイ「(元気よく）はい」

声「それとブレス音が入るから……それも気をつけて……よし、本番いっ

てみよう！」

ミンメイ「お願いします」

言って、緊張する。

声　「スタート！」

声と同時に「私の彼はパイロット」のイントロが始まる。

ミンメイ、体でリズムをとって、歌い始める。

♬キューンキューン、キューンキューン

私の彼はパイロット〜

続く歌声が以下の各シーンにかぶっていく。

13

デビュー寸前・多忙なミンメイ

集まった各雑誌社の共同グラビア写真撮影会。

セーラー服のミンメイが、ポーズをとってニッコリ。

＊

走る車の中——譜面を見ながら、手で拍子をとり、何やら歌っているミンメイ。

＊

ホテルのプール・サイド。

カメラマンが、水着姿のミンメイを撮っている。

ある レコード店の前。
マネジャーと私服のミンメイが店主に「よろしく」と頭を下げている。

＊

あるスタジオの廊下のソファ。
毛布を胸までかけ仮眠しているミンメイ。

＊

14 街中・メイン通り

マネジャーの運転する車が、後部席にミンメイを乗せて走る。

15 走る車の中

片手にハンバーガー、もう一方にパック入りジュースを持つミンメイがせわしない食事をしている。
マネジャー「デビューまで、あと五日。がんばってよ」
ミンメイ「これからどこへ？」
マネジャー「社に戻ってデビュー衣裳の決定会議よ」
ミンメイ「チャイナ・ドレスじゃだめなの」
マネジャー「あんなもん喜ぶのは、いやらしい中年のおじさんだけ……もっと

フレッシュなイメージで売り込まなきゃ……いいこと、社につくまでに食事すましてちょうだい」
ジュースを飲むミンメイの手がフッと止まる。
窓の外――セーラー服の高校生が、楽し気に歩いていく。
ミンメイ「(呟く)どうしてるかな、みんな……ん!?」
通りを輝が歩いている。
ミンメイ「輝!?」
輝の姿がごく普通の若者になる。人違いだ。
マネジャーの声「時間遅れてるから、車降りたらエレベーターまで走るわよ」
ミンメイ「(はッと) え?」
マネジャー「車降りたらエレベーターまで走ると言ったの、しっかりしてちょうだい!」
ミンメイ「は、はい」

16

街中・メイン通り
ミンメイの乗る車がフルスピードで去っていく。

中　C　M

17

ビッグ・スター・レコード社内・企画会議室

長いテーブルを囲んだミンメイ売り出しのメイン・スタッフたち(注2)七、八人が一方を見ている。

人形のように立つミンメイがいる。

脇に立つ服装担当の女史が、五つくらいあるステージ服の中から一つを抜いて、ミンメイの体にあてる。

女　史「では、これは」

芦　田「地味だな……それよりは前の方が」

スタッフA「難しいとこですね」

スタッフB「この前売り出した新人歌手もそんな服だったな……ちっとも売れなかったが」

スタッフA「中身が悪かったんですよ」

スタッフB「まあ、そうだが」

女　史「では、これを見て下さい」

芦　田「他にもあるのかね」

女　史「多分難航するだろうと思って、もう一着有名なデザイナーに発注しといたんです」

言って、ケースから白を基調にしたブルーの入った服を取りだし

て、ミンメイにあてる。
ただただジッとしているミンメイ。
芦　田「いいぞ、なかなか、それ！」
スタッフA「清潔なイメージがビンビンですよ」
女　史「私はこの方が、この子には一番ぴったりだと思いますけど」
芦　田「どうだね、みんなは」
スタッフB「いいですよ、これでいきましょう！」
芦　田「よし決定だ！……レコードのジャケットの方はどうなってる」
壁際にマネジャーが立っている。
マネジャー「この会議で決定したものがいいかと思って、まだ」
芦　田「よし、そっちもこれでいこう！」
言って、満足気に立ち上がる。
バタバタ音をたて、他のスタッフも椅子を立つ。

18　同・廊下

スタッフが笑いながら室内からゾロゾロ出てくる。
ミンメイとマネジャーが、エレベーターの前に歩く。
「おい、君〜ィ！」
芦田が追って来て、

芦　田「この後の予定は」
マネジャー「スタジオに戻って、夜までレッスンですけど」
芦　田「だったらあとへまわせ」
マネジャー「は？」
芦　田「思いだしたんだ。レインボー映画社が若い女の子を主人公にした映画を作りたがってるのを」
マネジャー「ミンメイを映画に？」
ミンメイ、目をパチクリ。
芦　田「新曲でまずミンメイをデビューさせて、人気の出たところで、彼女の主演映画をぶちかます！　いいだろ、このプラン」
マネジャー「出来れば、それは」
芦　田「これからすぐレインボー映画へ行ってくれ、向こうには私から電話を入れとく」
ミンメイ「………」
芦　田「がんばってちょうだいよ」
ミンメイの肩をポンと叩（たた）いて、待たせてあったスタッフと去る。
エレベーターが開く。
マネジャー「さ、乗って」
ミンメイを中に押し込む。

19 街中・通り

マネジャーとミンメイの乗る車が一方へ走っていく。

20 走る車の中

胸にコートをかけ、まどろんでいるミンメイ。

マネジャー「いいわね、向こうは映画の大手なのよ。質問されたらハキハキ答えるのよ」

ミンメイ「わかってるわよ」

マネジャー「着いたら起こしてあげる……それまでは少しでも寝ておいてちょうだい」

ミンメイ、もう眠っている。

21 レインボー映画社・撮影所・入口

ミンメイを乗せた車が滑り込んでいく。

22 所内・応接室

ミンメイ「よろしくお願いします！」

面接を受けるミンメイが、元気よく言ってペコンと頭を下げる。

テーブルをはさんだ向かい側に、プロデューサーと営業担当、そしてむさくるしい監督が一人座っている。
三人、目を通していた書類から顔を上げる。
武骨そうなプロデューサー。
プロデューサー「さっそくだが、映画は好きかね」
ミンメイ「はい」
プロデューサー「うちとしては、君を主演にした映画を撮ろうと思っている」
ミンメイ「(パッと)ほんと！」
思わず両手を胸に当てる。
プロデューサー「僕としては、出来れば純愛映画でいきたい」
ミンメイ「純愛映画？」
プロデューサー「いろいろとあるだろう、ほら、〝伊豆の踊り子〟とか〝野菊の如き君なりき〟とか……こうなんていうか、余命いくばくもない幸薄(さち)い少女の物語なんかがいい」
控えていたマネジャーが、もみ手で、
マネジャー「いやあ、結構な企画だわ」
営業担当「僕は純愛ものでもちょっと角度をかえてみたいね」
パイプを手にしたキザ風営業担当が口をはさむ。
プロデューサー「例えば？」

営業担当「そうね、この子のキャラクターを生かすとしたら〝ロミオ・アンド・ジュリエット〟……オア、〝ウエスト・サイド・ストーリー〟のマリアね」
プロデューサー「洋ものか……」
監　督「（ボソッと）脱がしたら」
ミンメイ「（驚いて）私、裸になるの？」
監　督「そう、スッポンポンに」
ミンメイ「いやよ、そんなの絶対に！」
営業担当「（慌てて）プロデューサー、き、君ィ」
プロデューサー「いやあ、話が急だったもんで、面接してくれる監督がポルノ専門の彼しかいなくて……気にせんでくれ」
監　督「君、風呂入る時裸で入るんだろう、どうってことないと思うけどな」
プロデューサー「いいから君は黙って……（ミンメイに）なんか純愛ものに乗ってないようだけど、どんな映画が好きなの」
ミンメイ「だんぜん、カンフー！」
プロデューサー「（驚いて）カンフー？」
営業担当「クンフーともいうあれね」
ミンメイ「私、ベトベトした映画嫌い……どうせならスカッとしたアクション

のカンフーものがいいです」
マネジャー「(制して)君、君ィ……」
一同、困惑顔で見交わす。
ミンメイ「私、ちょっとだけど出来るの」
プロデューサー「カンフーを?」
ミンメイ「従兄(いとこ)のお兄さんに子供の頃、教えてもらったの……ちょっとやってみる!」
スクッと立って、カンフーの構え。
ミンメイ「アチョ〜!!」
と、ポーズを決める。
三人「……(凝然)」

23 同・玄関口

マネジャーが憤然として足早に出てくる。
ミンメイがしょんぼりついてくる。
マネジャー「アチョーはないでしょ、アチョーは!」
ミンメイ「ごめんなさい、つい」
マネジャー「向こうは君を気に入ってくれてたのよ。それをぶちこわして……映画の話はもうこれでパーね」

怒って、停めてある車に向かう。

ミンメイ「……………」

立ち止まっているが、慌てて追う。

24　MBS・大ホールの前

人気番組〝サンデイショウ〟を見ようと、長蛇の列が出来ている。

出演する人気歌手に混じってミンメイのポスターも玄関に貼ってある。

開場を待つ人だかりの中に、セイコ、アキナたちの姿。

アキナ「ミンメイ、いよいよ今日デビューよ」

セイコ「あたし、バッチリ応援してあげる」

アキナ「今日の出演者の中じゃ、なんたってミンメイがピカ一よ！」

25　中華料理店〝娘々〟店内

客は誰もいない。

伯父さんと伯母さんが、テーブルの上においたセーラー・バッグを見ている。

伯　父「私物が軍部から送られて来たところを見ると……輝さん、もう死んだ

伯　母「見せてあげたかったわね……ミンメイのデビュー姿」って宣告されたようなもんだな」

伯　父「輝さん、あんたもここで一緒に見てあげて下さい」

ファンファーレが流れる。

伯　母「始まわるよ！」

二人、サッとテレビに視線を移す。

26　MBS・大ホール・会場

激しいドラムのロールがホールいっぱいに響き、スポットライトがステージを浮かび上がらせる。

舞台中央に出てくるタキシード姿の司会者。

ホールを埋めている大観客に向かって、

司会者「永らくお待たせ致しました。これよりサンデイショウ・スペシャル、題して〃輝けビッグ・スター、歌の饗宴〃のスタートです！……まずはトップ・バッター、ご存知ジャミス・メリン！　歌は〃ハイビスカス・レディ〃、レッツ・ゴー！」

拍手が鳴り響く中、マイクを手に華やかな舞台衣裳のジャミスが登場してくる。

イントロに乗って体を動かしていく。

27

同・楽屋の前

舞台衣裳のミンメイを囲んでいるビッグ・スター・レコードの芦田、スタッフ達。

ミンメイ、持ち切れないほどの花束を抱えている。

芦　田「いいね、落ち着いて歌うんだ」

ミンメイ「はい……あの、出番まで一人にして下さい」

芦　田「そうだな、君にとっては今日が初舞台……よし、みんな、向こういって聞こう」

一団がガヤガヤと移動していく。

28

同・楽屋の中

誰もいない楽屋に入って来たミンメイが、鏡の前に静かに座る。

ミンメイ「私の彼はパイロット……」

ミンメイの脳裏に、輝の姿が一瞬、蘇(よみがえ)る。

ミンメイ「輝、私、がんばる……どこかで生きているなら聞いててね」

ドアがバタンと開いて、演出助手が顔をだす。

助　手「ミンメイさん、間もなく出番です！　ステージの方で待機して下さい」

ミンメイ「はい」

と、立ち上がる。

29

ステージへの出入口・通路

ドアが開いて、もれてくるホール内からの拍手と熱気。

同時に出てくるジャミス。

一方から小走りに来たミンメイが、ハッと立ち止まる。

ジャミス、ミンメイに気づく。

二人の視線がぶつかり合う。

ホールからミンメイ・コールが聞こえてくる。

気まずい沈黙。

ミンメイの脇を通り過ぎようとしたジャミスが足を止めて、

ジャミス「人気では私の負けね……でも歌で負けたとは思ってないわ」

ミンメイ「ジャミスさん……」

ジャミス「この世界、可愛こちゃんだけでいつまでも通用しなくてよ……本当の勝負はこれから……がんばってね」

静かに言って立ち去っていく。

「ミンメイさん、急いで下さい！」

の声。

30

大ホール・会場

舞台中央でマイクに向かう司会者。

司会者「さて、続いては、ミス・マクロス・コンテストで栄冠に輝いた、期待の大型新人、我らがアイドル、リン・ミンメイ!!」

大拍手がホール内を揺るがす。

マイクを手にスポットライトを浴びてミンメイが舞台中央に現われる。

司会者「歌はデビュー曲〝私の彼はパイロット〟!!」

紹介が終わるのと同時にイントロが始まって、進み出て来たミンメイが歌いだす、

♬キューンキューン、キューンキューン

私の彼はパイロット〜

キラリ光って急降下〜♬

ゴーと噴かして　急上昇〜

長く尾を引く　飛行機雲で

大きなハートが　重ねて二つ

青い大空　ラブサイ〜ン

I　LOVE　YOU

YOU　LOVE　ME?
だけど彼ったら　私より
自分の飛行機にお熱なの～♬
♬キューンキューン
キューンキューン
私の彼はパイロット
続く歌声が次の各シーンにかぶっていく。

31　宇宙空間

バルキリー編隊対ゼントラーディ戦闘ポッド群の乱戦の真最中、少し離れた空域をバトル・ポッドが一機飛んでいる。敵艦隊に捕まり捕虜となっていた輝たちが、脱走に成功——敵から奪って来たバトル・ポッドだ。

32　バトル・ポッド・中

疲労の色濃い輝、ミサ、柿崎、マックスの四人が乗っている。無線機からとぎれとぎれに聞こえてくるミンメイの歌声。
輝が、ハッと顔を上げて、
輝「(叫ぶ) この声は……ミンメイの、ミンメイの歌だ」

マックス「ミンメイさんの!?」
柿　崎「ってことは隊長!!」
ミ　サ「マクロスが、マクロスがいるのね！」
と喜び叫ぶ（TVシリーズ#12話デュープ）。

33　宇宙空間

ゆっくり漂う輝達のバトル・ポッド。
行く手にマクロスが見えてくる（注3）。

34　軍施設内・通路

歩いて来たフォッカーが、近づく靴音に立ち止まる。
前方から、若い軍人たちがバラバラ来て、脇を駆け抜けていく。
「ロイ〜！」声がしてクローディアが駆け寄ってくる。
フォッカー「?……何があったんだ」
クローディア「後輩の荷物、ご面倒でも〝娘々〟から持って来て下さる」
フォッカー「(ハッと) 連絡があったのか、輝たちから!?」
クローディア「無事ご生還よ」
フォッカー「ほんとか！」
顔がみるみる笑顔になる。

35 軍施設内・別な通路

基地施設からとびだして来た輝が、一方へ全力疾走。

36 街中・通り

道行く人をはねのけるようにして、輝が走っていく。
走る、走る――。
輝が、息をはずませて走る――。
MBS・ホールの近く。
来た輝が柵をとび越えていく。

37 MBS・ホール・玄関付近

黒山の人だかりが出来ている。
中から出てくる歌手をひと目見ようと待っているのだ。
人だかりの背中に駆け込んでくる輝。
が、前に出ることができず右へ左へと道を探して走る。
突然、人垣の中から黄色い声と歓声が起こる。
ミンメイがマネジャーと連れだって出て来たのだ。
ミンメイ、ファンにもみくちゃにされるが、ガードマンの誘導で

停めてある車に乗り込む。
ガードマンが外からドアをバタンと閉めて、
ガードマン「道を開けて！　危いからどいて！」
道が出来て、車が発進していく。
その車を人だかりから抜けでて来た輝が追うようにして走る。

38　走る車の中

外を見ているミンメイがハッとなる。
ミンメイ「輝!?……まさか」
追って来た輝が、遠ざかっていくミンメイの車を見送って立ち尽くす。

＊

39　走る車の中

視線を元に戻したミンメイに、運転席からマネジャーが声をかける。
マネジャー「ジャミスになんかいわれなかった」
ミンメイ「言われたわ……。がんばってねって」
マネジャー「あのジャミスが？……それだけ」

ミンメイ「ウフッ……それだけ」
言って、いたずらっぽく笑う。
その目がキラキラと輝いて。
クレジット・タイトル。

（了）

注1　キャッツ・アイ――マクロス艦載中型電子偵察機。二人乗りで、今回の偵察では特別に、早瀬ミサも搭乗した。

注2　メイン・スタッフたち――弱小だったビッグ・スター・レコードは、軍部の秘かな資金援助を得て、ミンメイ売り出しのためのスタッフを増員していた。

注3　帰還する輝達――ブリタイ達に捕虜にされた、輝・ミサ・柿崎、そして、彼らの救出を果したマックスの四名。彼らは、ゼントラーディ軍のボドル基幹艦隊に連行され、地球人として、はじめてゼントラーディ人との会見を行なった。その時輝とミサのキスから、ボドルザー総司令は、地球人が彼らのプロトカルチャーの末えいではないかとの疑問を抱き、マクロスにスパイを送り込む作戦を実行。
　一方、様々な障害を乗り越えて、敵艦隊からの脱出に成功しマクロスに帰還したミサ達の報告により、ゼントラーディ軍の実態の一部が明らかにされていった（TVシリーズ#11・12話参照）。

絵コンテ	演　出	演出助手	作画監督	キャラ作監	メカ作監	美術担当
石黒　昇	高山文彦	山賀博之		美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
河森正治	津田義三 高山文彦	山賀博之		美樹本晴彦	板野一郎	多田喜久子
山田勝久	康村正一		朴　烔仁			佐藤広明
高山文彦	高山文彦	山賀博之		美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
康村正一	康村正一			鈴木英二	板野一郎	佐藤広明
石黒　昇	高山文彦	山賀博之		美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
山田勝久	康村正一		平野俊弘			宮川佳子
山田太郎	圓出　漫			鈴木英二	板野一郎	佐藤広明
山賀博之	山賀博之			美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
高山文彦	吉田　浩			鈴木英二	鄭　裕杼	佐藤広明
黒河影次	高山文彦	山賀博之		美樹本晴彦		勝井和子
黒河影次	秋山勝仁		平野俊弘			佐藤広明
山田勝久	田中宏之		朴　烔仁			多田喜久子
石黒　昇	構成・演出 石黒　昇		鈴木英二			多田喜久子
知吹愛弓	高山文彦			美樹本晴彦	板野一郎	多田喜久子
康村正一	康村正一			鈴木英二	平野俊弘	勝井和子
構成 黒河影次	石黒　昇			美樹本晴彦	板野一郎	多田喜久子
石黒　昇	高山文彦			美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
黒河影次	秋山勝仁		平野俊弘			多田喜久子
山田勝久	吉田　浩		朴　烔仁			多田喜久子
石黒　昇	笠原達也			美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
秋山勝仁	秋山勝仁		朴　烔仁			多田喜久子
康村正一	康村正一			鈴木英二	平野俊弘	多田喜久子
高山文彦	高山文彦			美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
三家本恭美	吉田　浩		朴　烔仁			多田喜久子
秋山勝仁	秋山勝仁		平野俊弘			多田喜久子
黒河影次 (板野一郎)	石黒　昇 笠原達也			美樹本晴彦	板野一郎	多田喜久子
石黒　昇	高山文彦	西森明良		美樹本晴彦	板野一郎	勝井和子
康村正一	康村正一					多田喜久子

「超時空要塞マクロス」放映（関東地区）・スタッフリスト（カラーページの#は放映Noを示します）



放映No.	放映日	制作No.	サブタイトル	脚本
1	'82 10/3	1	ブービー・トラップ	松崎健一
2	10/3	2	カウント・ダウン	松崎健一
3	10/17	3	スペース・フォールド	松崎健一
4	10/31	4	リン・ミンメイ	石黒　昇
5	11/7	5	トランス・フォーメイション	富田祐弘
6	11/14	6	ダイダロス・アタック	富田祐弘
7	11/23	7	バイバイ・マルス	松崎健一
8	11/28	8	ロンゲスト・バースデー	松崎健一
9	12/5	9	ミス・マクロス	富田祐弘
10	12/12	10	ブラインド・ゲーム	松崎健一
11	12/19	11	ファースト・コンタクト	富田祐弘
12	12/26	12	ビッグ・エスケープ	富田祐弘
13	'83 1/9	13	ブルー・ウインド	松崎健一
14	1/16	13.5	グローバル・レポート	
15	1/23	14	チャイナ・タウン	松崎健一
16	1/30	15	カンフー・ダンディ	大野木寛
17	2/13	15.5	ファンタズム	
18	2/20	16	パイン・サラダ	星山博之
19	2/27	17	バースト・ポイント	富田祐弘
20	3/6	18	パラダイス・ロスト	松崎健一
21	3/13	19	ミクロ・コスモス	大野木寛
22	3/20	20	ラブ・コンサート	星山博之
23	3/27	21	ドロップ・アウト	大野木寛
24	4/3	22	グッバイ・ガール	富田祐弘
25	4/10	23	バージン・ロード	富田祐弘
26	4/17	24	メッセンジャー	松崎健一
27	4/24	25	愛は流れる	松崎健一
28	5/1	26	マイ・アルバム	星山博之
29	5/8	27	ロンリー・ソング	富田祐弘

INDEX

●MINMAY'S DIARY ······ 1
●MINMAY'S ALBUM ······ 5
●MINMAY'S FRIENDS ······ 21
●MINMAY'S FAMILY ······ 36
●MINMAY'S DEBUT ······ 40
●MINMAY'S FASHION ······ 47
●MINMAY'S DREAM ······ 60

夢みるプレリュードMy Fair Minmay ······ 65
FANCY DAYS (Hiroshi Ōnogi) ······ 69
MAKE UP (Sukehiro Tomita) ······ 95
PINK LADY (Noboru Ishiguro) ······ 127
OPERATION SCANDAL (Kenichi Matsuzaki) ······ 153
VIVA DEBUT (Hiroyuki Hoshiyama) ······ 181

アニメージュ文庫

My Fair Minmay

夢(ゆめ)みるプレリュード

「超時空要塞マクロス」

　C-003

Printed in Japan

1983年4月30日初刷

著者　シナリオスタッフ

発行者　徳(とく)間(ま)康(やす)快(よし)

東京都港区新橋四―一〇―一　〒一〇五

発行所　株式会社　徳間書店

電話〇三(四三三)六二三一(大代)

振替　東京四―四四三九二番

印刷　大日本印刷株式会社

製本

(鈴木敏夫・小沢雅子・中村秀敏)

ISBN4-19-669509-4C0174(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

夢みるプレリュード

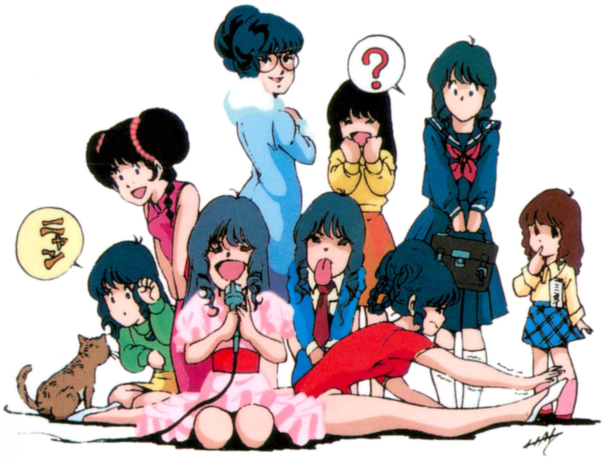
シナリオ・スタッフ共著

アニメージュ文庫

夢みるプレリュード
シナリオ・スタッフ共著

アニメージュ文庫 C 003
定価 380円

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669509-4 C0174 ¥380E 定価380円



カバーイラスト＝美樹本晴彦
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷(株)